

微笑むもの

T a t s u r u U C H I D A



内田 樹 (凱風館館長、神戸女学院大学名誉教授)

1950年東京都生まれ。東京大学文学部仏文科卒。合気道道場・凱風館館長。神戸女学院大学名誉教授。合気道7段、杖道3段、居合道3段。ブログ「内田樹の研究室」で様々なテーマを縦横に論じている。『私家版・ユダヤ文化論』で第6回小林秀雄賞、『日本辺境論』で第3回新書大賞受賞。他に『下流志向』『呪いの時代』など著書多数。

合気道という武道を長く修業している。師の多田宏先生には二人先達がいる。一人は心身統一法の中村天風先生で、天風先生は「笑っているとき、人間はもっとも強い」という言葉を残された。もう一人は合気道開祖植芝盛平先生で、植芝先生は「稽古は常に愉快に実施するを要す」という道場訓をつくられた。ふたりの達人が道破したとおり、人間は微笑んでいるとき、動きの速さも、出力のつよさも、運動精度も、最高になる。これは長く修業をしてきた経験的確信に通じている。

もし武道があらゆる危機的環境を生き延びるための「命の力の高め方」についての技術の体系であるならば（そのはずだが）、「不機嫌な武道家」というのは形容矛盾であるだろう。

ただ、ここでいう「笑い」や「愉快」は演劇的な哄笑や痙攣的な愉悦とは無縁のものである。それは身体の内側からゆっくりにじみだす、いつ始まっていつ終わるのかわからないような穏やかで落ち着いた笑顔でなければならない。

どうすればひとはそのような愉快感を継続させられるのか。それは外から何か「気分がよくなる入力」が到来して、それに感化されて気分がよくなるというような受動的な経験のはずがない。「先を取られる」ということは武道的にはあってはならないことだからである。

私が「終わることのない静かな笑顔」に近いものを自分の表情の上に見たのは、親となって幼い娘を

育てているときであった。眠る嬰兒を腕に抱いて、その柔らかい身体にそっと手を添え、熱さを感じ、健康な吐息を肌を受けているとき、私は鏡に映っている自分の顔に、それまで見たこともない種類の静かで、穏やかな笑顔を認めた。そのときの構えはなかなか均整のとれたものであった。

考えてみれば当たり前のことだが、哺乳類の成獣が幼児を守るときの動きは、生物学的必然として、最小エネルギー消費で、最大の出力を生み出す、最強最速のものでなければならない。改めて注視してみても、武道の型のいくつかは「幼児を抱く構え」をゆるやかに作り、それをたわめ、崩し、またつくるという一連の流れから成ることに気づいた。それらの運動は、学習するまでもなく、人間の生物学的深層に刷り込み済みだったのである。

滑らかで、滞りのない運動をしているとき、ひとは心身ともに「わが子を抱いている気分」に近づいている。そのときの「親」は、どのような不意の出来事にも対応できるように、居着かず、力みや詰まりがなく、「起こり」（予備動作）抜きでいきなり最適動線に身を投じることができる穏やかな開放状態のうちにある。そのときの「ふわり」とした立ち姿がおそらくは武道的な身体のひとつの理想なのである。

微笑むものは、怒りや悲しみや憎しみに捉えられたものよりも、高い確率で生き延びる。達人たちはそう教えているのだと私は理解している。

能——鎮魂の芸術

観世清和氏インタビュー

聞き手 吉川左紀子 (こころの未来研究センター長)
Sakiko YOSHIKAWA

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)
Toji KAMATA

Kiyokazu KANZE



2011年5月に談山神社で翁舞を舞う二十六世観世宗家・観世清和
撮影：清忠之

観世清和 (かんぜ きよかず) 二十六世観世宗家。昭和34年東京生まれ。平成2年、家元継承。観阿弥、世阿弥の流れを汲む観世流の宗家として現代の能楽界を牽引する。国内公演はもとより、フランス、中国、アメリカ、ドイツなどの海外公演、『箱崎』などの復曲、新作能にも意欲的に取り組んでいる。芸術選奨文部大臣新人賞受賞、フランス文化芸術勲章シュバリエ受章。重要無形文化財「能楽」(総合認定)保持者。(財)観世文庫理事長、(社)観世会理事長、(社)日本能楽会常務理事、独立行政法人日本芸術文化振興会評議員。著書に『一期初心』(淡交社)など。

震災と鎮魂

吉川 『こころの未来』第8号は「負の感情」が特集テーマです。怒り、悲しみ、苦しみといった感情は心理学の中でもとりあげられていますけれども、今日は、能の世界の中でそういう感情をどのように表現し、またどのように鎮めているのか、そんなお話をうかがいたいと思っています。

観世 昨年3月11日に東日本大震災がございましたが、私は17年前に阪神淡路大震災が起きたとき、偶然、神戸におりました。震災の前夜に神戸で能を舞い、ホテルに投宿していたのです。17日はなぜか午前5時に目覚め、しばらくベッドの中でまどろんでいたところ、5時46分にあの地震がありました。

私がおりましたホテルは高層建築の16階で、下から勢いよく突き上げるような感じでした。

吉川 16階ですか……。大変だったでしょうね。

観世 あのと、オートロックの扉がエラーになっていてドアが開かないということがございました。これは大変だと思っていると、隣の部屋の外国人の方がドアに体当たりして開けてくださった。その方が片言の日本語で、「16階のお年寄りと女性と子どもを下へ降ろさないといけない。あなた、手伝って」と言うので、エレベーターは使えませんから、非常階段で、お年寄りやお子さんをおぶり、4往復くらいいたしました。

私は神戸で惨状を目の当たりにしましたので、事態を非常に重く受け止めて、東京へ戻ってから、トラック3台に食料を積み込み、避難場所になっている神戸の小学校へお届けいたしました。やはりその場に居合わせませんと、なかなか相手の側に立って考えられないと思うのです。

吉川 東日本大震災の後、どのようなことをなさったのですか。

観世 昨年3月に地震が起きた後、義援能を2回いたしました。出演者もみなボランティアで、収益をすべて東北の方たちにお役立ていただくべく実施いたしました。

ご承知のとおり、能楽はもともとレクイエム、鎮魂の芸術です。世阿弥の作品には、悲惨な最期を送った人でも、その人が生きていた中で最も輝いていた一瞬を舞台に引き上げるという優しさがございます。

ですから、義援というのは当然の行為だと考えております。これは、先祖以来700年間、私ども能楽師が担ってきたことなのです。たとえば、「勧進能」がございまして。「勧進」は戦乱や天変地異で荒廃した神社仏閣を再建するために演能を催して、その利益を神社仏閣にご奉納申し上げるというものです。

鎌田 東北でも演能されているんですか。

観世 避難場所へ個人的にうかがい、仕舞や謡を謡うことでお慰めをさせていただいている者が多くおります。私も、観世流の盛んな福島県のいわきや須賀川などへうかがって、魂を鎮めるために謡の一節を謡ってまいりたいと思っております。

鎌田 そういうふうにして、世界全体を鎮めると同時にパワーを注入していく。まさに復活の技ですね。

『翁』——諸人快樂と魂鎮め

観世 毎年、東京の観世会の初会で、代々の観世宗家が『翁』を舞っております。今年の1月3日は、気持ちも新たに東北のほうへ思いを向けながら、ご祈禱をいたしました。

ご承知のとおり、『翁』という能は、謡や舞の所作がほかの演目と異なる点が多いものですから、「能にして能にあらず」と申します。しかし、実はその裏返しで、私は『翁』こそ能だと思のです。では、『翁』の能とは何かと申しますと、ご祈禱なのです。ご祈禱は、諸人快樂、人々が喜んで「ことほぐ」ということと、もう一つ、亡くなられた方々に対する魂鎮めがあり、両方でバランスが取れているのです。

『翁』を演ずる前に、「盃事」がございまして。これは、翁、千歳、三番叟、面箱、囃子方、後見、地謡、皆が鏡の間で一座になり、洗米とお塩とお神酒を準備して、揚幕の奥でいたします。翁を中心に車座になり、まず、お杯を頂戴して、お洗米を口に入れ、お塩をなめます。そして、こころの中で「祓えたまえ、清めたまえ、守りたまえ。祓えたまえ、清めたまえ、守りたまえ」と神道のやり方で唱えます。これは「杯固め」といい、こころを一つにすることと潔斎の意味があるのです。俗世間から離れて、神聖な舞台でご祈禱をするための潔斎なのです。

翁の大夫がやおら葛桶から立ち上がり、いよいよ出を待つ段となると、後見が舞台に向かって切り火を切ります。そして、翁から順番に出演者全員が切り火に送られます。翁は、舞台へ出て、翁の面をかけたとき、神様がその身体へ乗り移り、最高潮を迎えます。翁の大夫は、生け贄なのです。

鎌田 自らを差し出す献身ですね。

観世 はい、そうです。翁の大夫は、皆の気持ちの代表者として献身をするという心境です。

鎌田 ほかの曲の場合は、面をかけて橋掛りから登場する。けれども、『翁』は舞台の正面で面をかけて、そこで舞を舞ったあと外す。これは特異ですね。

観世 ほかの曲とはまったく異なります。自らトランス状態に入る瞬間を衆人に見せるのです。面をかけ、



吉川左紀子センター長



鎌田東二教授 撮影: 柏原真紀(p4、5)

面紐でこめかみを締める。「江戸っ子のいなせな豆絞り」と言いますが、あの世界です。こめかみを締めると、身体に新たな覚醒が生まれる。不思議な瞬間です。

よく私は『翁』を勤めたあと後見から、締め方がいっつになく強かったのでは、と言われます。力の限り締め上げることで、気持ちを別の次元に持っていく感じなのです。

鎌田 そういのお話を聞くと、確かに、自己犠牲的というか、生け贄みたいな部分がありますね。

観世 決して『翁』は神聖なものだけではないのです。それこそ生け贄のような土俗的な要素があります。

鎌田 それは、芸能の一番根本にあるものだと思います。高いものに近づいていくためには、身を一回落として低いところに位置しなければならない。そういう逆説的な構造ですね。

観世 そうだと思います。『翁』の謡は、「鶴は千年、亀は万年」から始まりまして、滝の水の話、海の砂子の話……、自然万物の豊かさを語り続けます。そして「天下太平、国土安穩、今日のご祈禱なり」と言うのです。本当は先祖供養が常に根底にあって、今生きているものたちへの感謝によって成り立っているのではないかと思います。

鎌田 背景に死者供養があるのですね。そして、「とうとうたり」という不思議な、意味がまだ十分にわかっていない謡の詞章があります。宗家は、そのあたりはどのようなふうにお考えですか。

観世 これは呪文だと思います。チベットの言葉という説もございますが、意味は私にも不明です。

鎌田 あの謡の中で何回繰り返すんですか。

観世 「とうとうたりたりら。たりあがりららりとう」と言うのです。すると、地謡は「ちりやたりたりら。たりあがりららりとう」と。

鎌田 真言のようなものですね。それを唱えていると、自分の状態もやはりハイテンションになってくる。

観世 はい、そうです。『翁』の謡は、最初は静かな調

子なのです。先代の家元との稽古のときは、「とうー」というのは下からぐっと上がっていくのです。それから「ちりやたりたりら。たりあがり」という、地謡とのかけ合いになってくる。

そうなりますと、気持ちが高揚して、露払いの「千歳の舞」になる前の最後の「とうとう」のときはクライマックスになる。そのときの鼓は、乱打です。鼓も、謡っている演者も、魂が揺さぶられてくるのです。そういう演出ができあがっています。

鎌田 ころの未来研究センターで、私は3年前から世阿弥研究会をやっています。月2回ずつ、『風姿花伝』から始めて、『花鏡』、『至花道』、『三道』、『申楽談儀』などを読んできました。それによって、能の面白さ、奥深さを改めて感じているのです。

『風姿花伝』の中で、世阿弥が、能楽というのは、「寿福」、人々の喜び、幸せを追求して実現していく、諸人快楽の技である。そして、その一番の根本にあるのは、天照大御神が隠れてしまった世界を、アメノウズメノミコトがもう1回呼び戻す、鎮魂、再生のための祈りである、ということを繰り返し語っています。

能こそが、日本における鎮魂の芸能だと思うのです。そういう意味での宗教性、神事性、あるいは呪術といった儀式的な側面を今も引き継いで実践されているということをおうかがって、非常に心強く思いました。

時空を超えて先祖とつながる

鎌田 昨年、奈良の談山神社で摩多羅神の神面とされる能面をかけて『翁』を舞われました。これが翁面の原型であると考えられているのですか。

観世 「多武峰猿楽」は能楽の源流の1つです。談山神社のある多武峰は、まさに能楽の一大文化を築いていた場所です。

鎌田 藤原氏ですね。談山神社は鎌足を祀っています。観世 観阿弥・世阿弥も談山神社の庭で演能をしたことは間違いないでしょう。その庭の前にある常行堂で、子孫の私が『翁』を舞わせていただくというのは、700年の時空を超えて先祖とつながったようでございました。

鎌田 まさに神話的時間を生きた。

観世 そうですね。観阿弥も世阿弥も、そして音阿弥も、おそらくはこの同じ庭に立っていたのではないかと、という先祖の匂いを感じ、気持ちが引き締まる思いがいたしました。

鎌田 厳粛なような、悲しい喜び。不思議な、懐かしいような、せつないような。

観世 そうなのです。談山神社は今回初めてうかがったのですが、かつてここを訪れたことがあるかのような思いにとらわれました。観阿弥様、世阿弥様に、「おいで、おいで」と招かれて、同じ空気を先祖も吸ったのであろうという一体感を、そこで感じたのです。

吉川 舞っておられるとき、周りには観客の方もおられたんですか。

観世 いらっしゃいました。今、鎌田先生がおっしゃったように、この摩多羅神面は翁面の原型になったのではないかという面なのですが、非常に大きな面なのです。その大きな面に対して、拮抗できる力量が備わってなければ『翁』は勤められません。

面をかける前に、一度、面に対して拝礼をいたします。面を「いただく」と申しますが、この拝礼にはいろいろな意味があると思います。ご神体たる摩多羅神に対する畏敬の念と、自分の魂をこの摩多羅神面に捧げて魂を注入するという思い。そのとき、いつにも増して「入魂」するのです。面と向かい合うときは、応分の集中力を要するのです。

役者の道を志す者の中には、しばしば「無心」という言葉を使い、自らの演技を振り返ることがありますが、私はそれを好みません。歌舞伎役者の坂東玉三郎さんともよく話すのですが、私たちの意識は舞台上では常に100パーセント働いているのです。玉三郎さんは、無心の部分は7割だと言います。では、残す3割はというと、それが世阿弥の言う「離見の見」なのです。一步引いて、わが身を遠くから見つめる。芸能者としてそういうものがないと芸は成立しないと思います。

鎌田 それは、メタ意識というのか、意識の不思議な状態で、自分で集中を強くしながらも、それを超えた部分をどこかで持っている。ある種、冷めてそれを見ている自分があるわけですね。そのときの脳の状態を測ると相当面白い現象が起こっているのでしょうかね。

観世 それから、能は息を詰める芸能です。長い謡を謡った後に、深呼吸をするかということ、絶対にいたしません。たとえば、「さしこみ」という型があり、扇で指したとき、息は止めています。息が抜けていたら指せないのです。

鎌田 私は、能楽というのは、舞台上で演じられる演劇的修験道だと思います。つまり、能の技はほとんど武道・武術の根幹にあるもので、同時にそこには神事ともつながる部分がある。一方では、静かに見えるけれども、無理に無理を重ねた非常に激しい体さばきが



観世清和宗家

ある。こういう訓練は、武芸の達人の境地に近づいていくような形態で、修験的な部分が様式化されていると見えるんですが、いかがでしょうか。

観世 おっしゃるとおりだと思います。1曲の終わりに「留拍子」という拍子を2つ踏みます。終わった後、橋掛りを歩んで幕へ行くわけですが、子どものころ父から稽古を受けているとき、1曲舞い終えた後、「後ろに目をもって入るように」と言われました。子どもだから、「後ろに目がある？ そんなのわからないよ」と言うと、「理屈では捉えられないかもしれないけれども、後ろに目があると思って入ってごらん」という稽古を受けるのです。

鎌田 イメージ・トレーニングですね。

観世 そうですね。あるとき父から、「今日はおまえ、後ろに目があって、ちゃんと後ろを見ながら幕に引いていたぞ」と言われました。

鎌田 『花鏡』を読むと、まさに今のお話のように「目前心後」という熟語が出てきます。普通、目は前に、ここは後ろに、ととりますが、まさにここを後ろのほうに置く。武道でいう「残心」ですね。それによって、最後の最後まできちんと緊張感をもち、集中力を高めて去っていく。

吉川 それを、お父様はちゃんと見ておられるわけですね。

本物を教える

観世 父も祖父からそういう訓練を受けている。これは全然理屈の世界ではないのです。

吉川 いくつぐらいのときに、そういうことをお父様から言われたのですか。

観世 4、5歳から稽古を始めますから、子どもにわかりやすく、ジェスチャーを交えながら教えます。「こ



『朝長』 足利義政拝領の蜻蛉の法被を着て舞う観世宗家 撮影:林 義勝

れをやったらこういうふうになる」という稽古はしません。からだで教えるわけです。

吉川 真似をする。

観世 そう、真似るのです。

鎌田 からだで教えるということですが、近代教育は知識偏重的なところがありますね。世阿弥の能楽論、『風姿花伝』を読むと、7歳、12歳、17歳、24歳、34歳、44歳、50有余歳まで、節目節目で、そのときどきの花をどう開かせていくことができるかが説かれています。世阿弥の時代は、7歳から始めよという。今は、3、4歳から始める。「鉄は熱いうちに打て」ということわざがありますが、子どものころやからだの中に、無意識的にも一番入っていくのは何歳ごろが1つの転換期だと思われませんか。

観世 年齢は人によって違うと思いますが、やはり幼いときから、本物を教えていくことが大切です。子どもだからといって、もちろん手抜き稽古もいたしませんし、幼くても、しっかりと気持ちを入れた謡、舞事を見せております。

鎌田 そこは極めて重要ですね。小林秀雄だったか、古美術などで本物かどうかを見分ける鑑識の目を育成するためには本物を見続けるしかない。本物を見続け

ていると偽物がわかる。非常に単純だけれども、それしかないというようなことを言っていますが、それと同じですね。手抜きをするというのは、ある種偽物を見せるということですね。そうではなくて、常に本物と対面していく。

観世 わが家に足利義政^{とんぼ}拝領^{はっぴ}の蜻蛉^{ともな}の法被^{せんぼう}がございます。『朝長』の懺法で歴代家元が使うもので、足利義政もおそらく袖を通したであろうという、600年以上の年月が経っている大事な装束です。それを見せないとだめなのです。その写しもあるのですが、漂ってくる雰囲気、本物と写しとは重さが全然ちがいます。義政拝領の法被にはオーラのようなものがあります。その本物の発するオーラを感じることが、子どもにとって大切なのです。

「朝長の懺法」——鎮魂供養の舞

鎌田 重要なのはそのセンスですね。『朝長』のことが出たので、少し『朝長』についてうかがいたいんですが、今年のNHK大河ドラマは「平清盛」です。保元の乱(1156年)、平治の乱(1159年)が打ち続き、平治の乱で源義朝が落ち延びていくときに、息

子の朝長が怪我をしたので大垣でどうしても首を斬らなきゃいけなくなった。そこで朝長の首を斬ったか、あるいは自害して果てた。

『朝長』を見るたびに思っていたのですが、「朝長の懺法」というのは鎮魂供養ということでしょうね。

観世 観音懺法です。

鎌田 能のほかの曲も鎮魂の意味があると思うのですが、なぜ『朝長』はタイトルにまでなっているのでしょうか。

観世 足利義満の次の将軍・足利義持は、禅に傾倒されました。京都の相国寺でお坊さんが観音懺法の稽古をしていると、たまたま義持公が聞いていて、稽古が終わってから、そのお坊さんたちを呼び、「お経を数句飛ばしたぞ」と注意したというのです。

鎌田 そこまでよく知っていた。

観世 そうなってくると、世阿弥も禅に傾倒せざるを得ないわけです。義持という方は、お経の中身まで詳しく、「観音懺法のあの歌い方はまずい。もっとこういうふうによれ」と言ったとか。

鎌田 普段から唱えていたのでしょうか。

観世 そうですね。『朝長』の懺法は、相国寺の観音懺法を模写したという説があります。

鎌田 『朝長』にそこまで深い鎮魂的な懺法の意味があるのは、父と子の非常に哀切な別れがあったからでしょうね。父親が負傷した朝長を殺さなきゃいけない。この忍びない悲しみは、もっとも悲劇性が高いというか、愛しているにもかかわらず、一族郎党のために殺してしまった。それに対する深い深い悔悟と鎮魂があるので、あえてそこに観音懺法の表現が付着してきたのかなと思います。

観世 それでよろしいと思います。朝長自身が、後シテの曲の中で、「世の中すべての父を父と思え、世の中すべての母を母と思え」という、非常に達観した、悟りの境地みたいなことをはっきり独白いたします。『朝長』という曲は私も何度か勤めましたけれども、幼くして父親の手にかかってしまうという重いテーマの話です。

鎌田 残酷ですね。実は私の先祖は鎌田^{まさきよ}政清といまして、平治の乱に敗れて源義朝とともに落ち延びます。おそらく源義朝はわが子を斬るに忍びなく、一族郎党で乳兄弟だった鎌田政清に殺せと命じたんじゃないかと思うのですが、どうなのでしょう。自らの手でわが子を殺害したのでしょうか。

観世 『烏帽子折』がございますね。政清の妹が阿古屋^{あこや}松^{まつ}として登場します。私は子どものころから先生のご先祖の鎌田^{ひょうえ}兵衛政清というお名前をずっと耳にしています。この方は1つのキーパーソンになっていると思います。今おっしゃったように、源の家にとっては大番頭さんですね。私は、先生がおっしゃったようなことはあり得ると思います。

鎌田 私はそう思っているんです。『ミセス』(2012年1月号)という雑誌で『烏帽子折』のことが紹介されていて、ご長男の三郎太さんと一緒に『烏帽子折』を舞われた。三郎太さんが義経役をされて、烏帽子屋の亭主の役を宗家がされた。

観世 その亭主の妻が、政清の妹です。

鎌田 これを読んで、「へえーっ」と驚きました。

観世 岐阜の青墓に朝長のお墓がありまして、そのお寺のご住職に以前お話をうかがったのですが、たぶん鎌田兵衛が義朝に言われて首を刎ねたんだらうということをおっしゃられました。



『烏帽子折』 義経役は長男の三郎太さん、烏帽子屋の亭主役を宗家が勤めた 撮影:前島吉裕

観世流の太鼓で『朝長』の「懺法」をいたしますときには、演能が全部終わりましたから、太鼓方が、橋掛りの三の松へ出まして、「後のお調べ」というのをお客様にお見せするのです。私が「懺法」を勤めましたとき、今の観世流太鼓方の観世元信先生に太鼓をお打ちいただき、そのときも「後のお調べ」をされました。太鼓を、3つ・3つ、合わせて6つ打つのです。その後、お道具を横に置きまして、観世元信先生が深々と拝礼をなさいました。あとで元信先生に、「あの拝礼はお客様に対するものですか」とお聞きすると、「いや、源朝長公に対しての拝礼なのです」とおっしゃっていました。

鎌田 やはり。『朝長』には鎮魂供養のところがこもっていますね。

からだで表現される絵巻物

鎌田 『朝長』が1つの代表的な曲だと思うのですが、そういうさまざまな鎮魂、「負の感情」を巡る曲を、世阿弥は夢幻能の中で展開していますね。宗家が特に「負の感情」的な曲だと思われるものを挙げていただけませんか。

観世 昨日、京都で『采女』^{うねめ}を舞いました。朝廷に仕える一介の采女が、時の帝に恋をしてしまいます。でも、帝のほうはそんな感情はないのです。はじめは寵愛を受けていたのですが、帝のお気持ちがほかの女性に移ってしまふ。そこで、采女は猿沢池^{さるさわのいけ}に身投げをする。いま采女神社のあるところです。

それを哀れに思われて、帝が猿沢池に御幸されます。そのとき、身投げした采女の亡骸^{なきがら}が現れ、その緑の黒髪が美しい玉藻のように見えたという歌を帝が詠まれるのです。



『采女』美奈保之伝 シテ:観世清和 撮影:ウシマド写真工房

かなわぬ恋の話です。一途な思いで身投げをした若い采女は、旅のお坊さんのありがたいお経によって、救われます。

鎌田 日本の古典の中で、鎮魂がどういう方法でなされるかという、仏教では、読経、真言、懺法を含めたさまざまな儀式、修法がありますが、神道の場合、祭りであり、歌であり、神楽だだと思います。歌は、須佐之男命すさのおのみこととか日本武尊やまとたけるのみことの歌の中に鎮魂の思いが込められています。もうひとつの方法は舞踊や神楽ですが、能を見ていると、謡も出てこない、ただ舞だけのものがあります。言葉がない中で、ただ静かに舞がある。これは、アメノウズメノミコトの舞の場面に近いと思いますが、和歌と舞が持つ鎮魂力は、日本文化のもっとも基層にあると思うのです。

観世 そうだと思います。今おっしゃられたように、舞だけで、たとえば、お笛はひとつの旋律を吹いて、鼓、大鼓、太鼓が入る。それで、謡がない。お客様は、舞っている人の姿をご覧になって、インスピレーションが湧いてくるわけですね。

たとえば、『野宮』の女は、序の舞を舞っているときは、源氏に対する思い、正妻の葵上に対しての恥ずかしい思い、六条御息所の妄執ろくじょうみやすどころといったものが、暈染うんぜん一体となって湧き上がってきます。それをお客様に感じていただく技量が必要だだと思います。

『井筒』の女は、幼いころ、井戸の際で背くらべをし

た2人が、成人して歌を詠み交わして結ばれた恋物語を舞で表現します。謡も何もないので、ある研究者の方は、能楽の解説書に「この舞の部分はべつに意味がない」と書いておられます。しかし、実はそうではなくて、その一番深いところを感じていただくために、舞があるわけです。

鎌田 謡のない舞は「からだで表現される絵巻物」のようです。絵巻物は、言葉書きがあって、絵で見えていくことによって、世界を察知します。序の舞も含めて、舞の中で絵巻物が展開されているので、その物語的世界がからだを通して見ている人に伝わり、そういうもので故人を偲んだり、その状況を思いやったりして、フィードバックされたものが霊に返って行って、鎮まりが起こる。そういう意味性が、暗黙知のように循環していると思います。

観世 私も同じ気持ちです。舞を舞うときはからだの芯がぶれないようにする。特に、面をかけてかなり束縛された状況で舞うので、身体的にはかなり締めつけている。その締めつけているからだが必要なのです。

よく父が、弟子たちに序の舞の稽古をしているときに、「魂が抜けている。腑抜けだ」と言うのです。「芯がぶれているからだめ。もう今日は稽古しない。明日もう一回来い」という稽古でした。

幕が上がった瞬間、お客様がわかる

鎌田 近代の心理学は、そういうものを定量的に測ったり、いろいろな方法論で人間のこころとからだ、行動といったものをつなげて考えてきたんですが、いま宗家が話されたようなからだの訓練の仕方は、現代の心理学から見ると、どういうふうに考えられますか。

吉川 からだの訓練といったことはほとんど扱っていないと思いますね。私が知らないだけかもしれませんが。

鎌田 本当は扱わなきゃいけない領域ですね。

吉川 本当にそうですね。ただ、能のお稽古のように長い年月をかけて体得するような学習をどうやったら心理学で扱えるのか。難問です。

お父さまが「魂が抜けている」と言われるような舞いかたと、魂の入った舞の違いは、どういうところにあるのでしょうか。

観世 世阿弥もよく伝書で申しておりますが、幕が上がった瞬間に、今日はどのようなお客様かということがわからなきゃいけない。

「おまーく」と言って幕を上げます。そのときの空気、匂いというんでしょうか、押し寄せてくる波みたいなものがあります。

鎌田 それは、直感とも言えるし、身体知とも言える

し、潜在知とも言える。

吉川 本当にそうですね。そのとき、どんなことを感じ取っておられるのか。

観世 息子の三郎太が以前、仕舞を舞いました。切戸が開いて出ていったら、たまたまお客様が、たぶん耳がお悪いのでしょうか、けっこう大きな声で、「あれがお家元の坊ちゃんよ。今度中学なのよ」なんてしゃべっているのです。そのとき私は仕舞の地謡でございました。三郎太は稽古どおり仕舞を舞い終えまして、切戸へ引いて、「ありがとうございました」とあいさつをしました。そして、着物を着替え始めたら、「お父さま、大きな声のおばさんがいたよね」って。「ああ、君、わかった?」と言ったら、「わかりました」。集中していても、そういう雑音の記憶さえも、しっかりと残っていることが大切なのです。舞台上で間違えたことすらわからない子がいますが、プロとしてそれも欠格です。もし間違えたのだったら、どこをどうして間違えたかということが、師匠から尋ねられたときに答えられなければいけません。

鎌田 まだ客席を見る前、もちろん面をかけているから何も見えませんが、そういう瞬間に察知できる。すごいですね。宗家の中では、子どものころからその感覚は自分で自覚できたんですか。

観世 はい、ありました。

鎌田 三郎太さんも、そういう感じは、いまある。

観世 ありますね。

抽象美の中のリアリティ

鎌田 曲の中で、悼みとか悲しみとか、そういうものを技としてどう伝えるのか。あるいは、能という芸能が、次の世代に伝えていく伝え方の特徴はどこにあるのでしょうか。

観世 先ほど鎌田先生が、能楽は武士道の世界にも修験道の世界にも通じるとおっしゃいました。私は、まさに修験道の世界に通じるのではないかなと思います。たとえば、師匠の稽古を受けるとき、板の間で身じろぎひとつせずに、正座をして2時間、3時間耐える時間があります。2、3時間座っていて痛くないかと思ったら、痛いに決まっています。でも、その痛さに耐え、突き抜ける瞬間があるのです。

たとえば、『采女』のように、全編を通じて非常に静かに物語が展開していく曲があります。父から稽古を受けたとき、静かなものは弱いだけではないと言われました。『野宮』にしても『井筒』にしても、女性の役が舞台に出てきたときに、楚々として美しいだけではなく、芯の強さも求められるのです。ある種、男がやっていて武張っているなという印象も必要な



世阿弥筆『花伝』(応永10(1403)年代、一部) 観世宗家に残る世阿弥自筆本

です。

鎌田 『花鏡』などの伝書でも、そういうことを世阿弥が述べていますね。ある種、反対のもの、対極のものを内に秘めている。

吉川 そういう能の世界を表現するのは、12歳、13歳ぐらいの年齢では、たぶん難しいですよ。ある年齢になって初めて舞える能というのがあるんじゃないかと思うのですが、どうでしょうか。

観世 はい、ございます。

吉川 たとえば、3、4歳ぐらいから始めて、この年齢ではこのような感情表現とか、そういうものはあるんでしょうか。

観世 能の場合は「感情表現」ということを嫌うのです。たとえば、『烏帽子折』の能を三郎太に稽古をするとき、「これから元服するシーンだからね」というようなことは説明してはいけないのです。

子どもの稽古の最大の特徴は、能の詞章、言葉を書いた謡本という台本がございしますが、これは一切見せません。謡本がない中で、師匠と対座して、「いかに申すべきことの候。はい、謡って」、「いかに申すべきことの候」と、1句ずつオウム返しに真似をします。ですから、子どもは舞台上で謡っている自分の謡に対して感情移入はありません。そういう稽古法なのです。

吉川 先ほどの身投げをした采女の思いであるとか、そういう気持ちも同じようなやり方で身につけていくのですか。

観世 ええ。能楽が最終的に目指しているのは、贅肉



『三輪 誓納』 シテ:観世清和 撮影:前島吉裕

を取った抽象美の中のリアリティなのです。ある人間国宝の先生がおっしゃるには、幕から出てきて、舞台を一回りして、そのまま何事もなく去っていく、そういう芸をしたい。謡も謡わない。舞も舞わない。舞台を一回りしただけで、「ああ、『井筒』の世界だ」と感じていただける、最終的にはそういうものを目指したいと。

ですから、『采女』の稽古をするときも、猿沢池に身投げをした女性というイメージは心の中にあるのですが、リアリティは追求しないのです。

鎌田 むしろリアリティを求めるのは観客じゃないですか。観客は感情移入する。そこに抽象性があるがゆえに純粋な感情移入がかえってできる。歌舞伎だと、役者さんが感情移入をするじゃないですか、見得を切ったり。歌舞伎と能は、そこが違うと思うんです。歌舞伎はそういう露骨で過剰な、ある種バロックな感情表現をして、それに観客も乗るわけです。一方、能はそれを削ぎ落として削ぎ落として、そこに純たる感情移入が生まれてくる。

観世 そうですね。

能楽の囃子は演奏家ではなく俳優

吉川 能を見ている観客の側にも、能の世界を感得する修行のようなものがあるのかもしれないね。背景になっている歴史的な出来事であるとか、どういうシ

チュエーションの中のどういう思いを込めた舞なのかということを知らないと、深い感情移入は生まれないのではないのでしょうか。

鎌田 それは、国民的芸能、芸術とも言える『平家物語』とか、いくつか重要な古典から多くの題材が取られていますね。そういう歴史とか、実際に起こってきた事件に対する人々の記憶、感知力があって、それが能だけじゃなくて、幸若^{こうわか}とか、いろんな芸の中に演目がありますから、そういうもの全体の中で能が特別に抽象性を高めた。

世阿弥が言っていますが、「神楽」の「神」の「示偏」を取ったのが「申」で、それが「申楽」になる。そのあたりがまた能の持つ独自性というか、面白さですね。「示」を取ったことにより、禅のように切り捨てて抽象性を高めた。だから「申」だけの楽にしたという。そここのところがすごいと思うんです。それが、諸外国の人たちにも通ずる。

吉川 外国の人たちには、どういうふうに通じるのでしょうか。

観世 海外へ行って演能をしますと、こういうことをよく言われます。お能のとき8人の地謡が整然と正座をしている。そして、整然とお扇子を取って謡を謡う。あの姿を見て、宗教性を感じると。その宗教性とは何ですかと聞いたら、教会のミサのようだというんです。

それと、能楽の小鼓、大鼓、太鼓といった囃子方が、楽器を打つときに掛け声をかけるのが非常に奇妙だと言われます。

鎌田 日本人である私から見ても奇妙ですよ。私はあれが大好きなんです、あの独創はどこから生まれたのか。また能管が、なんであの「ひしぎ」という乱高下する、わざわざ出にくくした響きを発するのか。そのへんも独特ですね。

観世 能楽の囃子方は、いわゆる演奏家ではないのです。能役者として舞台上上がっているのです。たとえば、「頭^{かしら}」といいまして、「いやーっ」と打ちます。この頭は1つとして同じものはないのです。演奏家だったら、いつ、どんなとき、どんな場面でも同じ掛け声と同じ打ち方をします。しかし、能では1つとして同じものはない。それが役者として舞台上に出ているということです。

鎌田 楽譜ではない、ライブということですね。

観世 まさにライブです。ですから、シテが何か絶叫をしたシーンでは、そのシテの謡の声に誘われて、大鼓が「いやーっ」と高い声で応対するわけです。静かなところであれば、「いやー」と低い声でいく。まさにアクターとしてそこにいるから、生身のシテの気持ちを察して演奏するのです。

吉川 あうんの呼吸みたいなものですか。

観世 そうなのです。そこが能の独特のところではないでしょうか。

鎌田 神楽だと、囃子方は決して役者意識ではないと思うんです。神楽の笛は、純粹に演奏的な世界だと思います。囃子方が正面の松のところ端座して演奏する、それが演技だというのは、能が持つ特性ですね。

『三輪 誓納』の宗教儀礼性

鎌田 観世宗家にだけ伝わる独自の儀式性を持つ能のことをおうかがいしたいのですが、『誓納』という、観世宗家が、基本的に一生の代替わりのときにだけ演能する特別な能がありますね。

観世 先ほど申し上げた『翁』の能と『三輪 誓納』は、切っても切れないものだと思います。なぜかといいますと、玄賓庵に訪ねてきた謎の女性は神様なのです。先ほどの『翁』の「天下太平、国土安穩」のように、『三輪 誓納』の舞の中にも、宗教儀礼のようなものが入っています。里の女が正体を現すと神様なのです。その神様が、天の岩戸隠れのくんだりを玄賓僧都に見せます。彼女は神でありながら、その仕方話をするときにはシャーマンのところになっている。次に、自分のことを語ろうとすると、ずっとシャーマンから本来の神様の神体になるのです。舞を舞っていくうちにテンションが上がり、『誓納』の舞の中では『翁』とまったく同じ所作をします。それで、岩戸神楽の岩戸隠れの『三輪』という曲に戻ります。

鎌田 だから、『三輪』に『翁』がついたものかといえる。実に不思議な構造ですね。

観世 不思議ですね。この『誓納』の部分は、まったく「三輪の能」から乖離してしまっているのです。

鎌田 世阿弥は複式夢幻能をつくりましたが、今のお話を聞いていると、もう1回展開して複々式、三重構造になっている。これがもう1つ、能の神髄はここにあるんだぞということを徹底していく、宗家にだけある伝え方のように見えます。

般若は泣いている

観世 『翁』の能も、観世家の大事な芸でございますが、世阿弥も申しておりますように、観世は鬼の能を得意とする家です。鬼の能というのは、「追儺式」、悪魔祓いでございます。平安末期に春日という面打ちがおりました。その方の赤鬼・黒鬼という面がわが家に伝わっております。本当は追儺面は追儺式が終わったら壊すのです。それが、この赤鬼と黒鬼2体の面がそ



観世宗家に伝わる赤鬼・黒鬼の面

のまま大事に伝わっているのは、観世の家が追儺式を司っていた家だということを忘れるなということではないかと思います。

吉川 鬼の面のときにはどんな舞をなさるのですか。

観世 世阿弥もはっきり申しておりますけれども、能楽の場合、人間が何らかの影響を受けて鬼になったものと、根っからの鬼と、2種類ございます。「力動風」「碎動風」という言葉がございます。変わった分け方ですが、世阿弥がそういう細分化をしたのです。世阿弥も伝承で残していますが、根っからの鬼は人間とは違うので、何か非常に超越した部分がございます。

鎌田 神的な世界により近い。千早ぶる神ですね。

観世 はい。一方、人間が鬼になった場合は、鬼の姿はしているけれども、人のところなのです。

鎌田 まさに「負の感情」。

観世 ですから、超越している部分もありますが、本当は悲しみなのです。顔はカッとしていても、どこかに涙がある。このおぞましい姿から昇華したい。元の人間の姿に戻りたいという思いがある。角が出ている般若の面がございすね。あれは強いただけじゃなくて、泣いているのです。男に捨てられた女の悲しさ、寂しさが表れているのです。

鎌田 それが「般若」という名を持っているのも、非常によくできていますね。般若というのは「知恵」のことです。プラージニャー・パーラミータ。その「般若波羅蜜多」の「空」の精神は、この世は苦であり悲しみだけれどもそこを超えよということで、そういう思想と希求が「般若」というネーミングに込められているのでしょうか。

観世 口は耳まで裂けて、目は見開かれて、角が生えている。でも、その姿で、実は泣いているのだと。その意識がないと動物になってしまいますからね。

吉川 そこが今の心理学と離れるところですね（笑）。今の心理学での感情の捉え方は、そうした複雑な多層の感情ではなくて、表に出たものからどう感情を読み

取るかという、ずっとシンプルな発想をしていると思います。研究で内部にある複雑な思いを扱うのは、なかなかむずかしい。

鎌田 日本文化、特に能に表現されている裏と表は実に興味深いです。表に出ているものの中にどういう影が隠れているか。河合隼雄先生の『影の現象学』ともつながる臨床心理学的な、こころの影の部分が何であるかを見通していく芸能ですね。日本のこころの伝統、こころのワザ学は、能の中に非常に色濃く残っている。

最初にお話しされたように、東日本大震災や阪神淡路大震災も含めて、いろんなことが人間世界には起こってきますが、能という芸能は、そういう場合の悲しみを越えていくための日本人のこころのワザ学だと思うのです。そのこころをどういうふうにケアしていくことができるのか。

宗家は能楽全体のリーダーとも言える位置にいらっしゃいます。これから先、どういうお気持ちで伝統芸能としての能文化を次に伝えていきたいとお思いなのかをお聞かせください。

伝統文化に気軽に触れる機会を

観世 能楽というと、どうしても敷居の高さのようなものがあると思われています。そこで、私は、もっと若い人、小さい方々に、この日本の深い伝統文化に触れていただきたいと思っております。

室町時代に生まれたお茶とお花と能楽は室町三兄弟でございます。また、時代が少し下って、日本舞踊も、歌舞伎も、文楽もあります。

今、私はいろいろところに温めているものがございまして、日本のそういう伝統文化のエキシブみたいなものに、もっと気軽に触れていただけるような場をつくりたい。たとえば、能楽堂へお遊びに来ていただければ、ロビーでお抹茶をいただくことができる。そこに生け花がある。じゃ、お能を観てみましょう。お能も少し短縮型で、エキシブだけを抽出したような演出でやる。そういうものを、ない知恵を絞って考えているのです。

イタリア人の多くはカンツォーネが歌えると言います。海外へお仕事で行かれた方が、「日本人だから謡曲を歌えるだろう」と言われて、恥をかいて帰ってきたという話をうかがったことがあります。理屈ではなくて、日本の伝統文化に気軽に触れていただきたいという思いが非常に強くございます。

食べ物も食べてみなければその味はわかりません。お能も直接接してもらうことが必要なのではないのでしょうか。お能を観にいくから『源氏物語』『伊勢物語』『平家物語』を読まなくてはいけないということはござ



『道成寺』 シテ:観世清和 撮影:工房円

いません。そういう前段的なものは後からでもいい。まずは触れていただく。いろんなTPOで能を楽しめばいいと私は思うのです。

平成25年(2013)が世阿弥生誕650年、観阿弥生誕680年という節目の年になります。それに向けて、もっと皆さんに気軽に能を楽しんでいただく仕掛けをつくりたいなと思っております。

鎌田 こころの未来研究センターがある京都は、日本の伝統文化の1つの拠点の場所です。京都には観世会館もある。われわれは「こころ学」というものを発信していこうとしているのですが、今後、何らかの形で共同の提携事業が継続してできたらいいですね。

吉川 私はお能のことは不勉強なんですけれども、今日は宗家のお話をうかがって、表に表れているものと内に秘めているものの関係、とても強いものを静かに表現するという、あるいは「背中に目がある」といった、お父様から伝えられた教え、そういったことを知った上で能を観ると、全然違った見方になると思えました。若い人たちに、そうした能のもつ奥行きを伝えるような企画をセンターでぜひできればと思います。

観世 学術面を担われる先生方と実演家としての私が、何かご一緒できるようなことがあれば、ぜひこちらでもお願い申し上げたいと思います。

鎌田 こちらこそ、よろしく願いいたします。

吉川 宗家のお話を大変感銘深くうかがいました。今日は長時間ありがとうございました。

(平成24年1月8日、観世能楽堂にて)

論考◎ 特集・負の感情

負の感情は、ほんとうに「負」か？

下條信輔 (カリフォルニア工科大学生物学部/計算神経系教授)

Shinsuke SHIMOJYO



1955年東京生まれ。マサチューセッツ工科大学大学院修了、同Ph.D。東京大学人文科学大学院博士課程修了。現在、カリフォルニア工科大学教授。2012年4月よりこころの未来研究センター特任教授。専門は知覚心理学、視覚科学、認知神経科学。『サブリミナル・マインド』(中公新書)、『〈意識〉とは何だろうか』(講談社現代新書)、『サブリミナル・インパクト』(ちくま新書)など著書多数。これらの著作によりサントリー学芸賞受賞。日本神経科学会より時実記念賞、日本認知科学会より独創賞、中山賞大賞受賞。アーティストとの共同制作などの活動でも知られる。

はじめに

筆者はこれまで、視覚やクロスモダル(視聴覚、視触覚)統合などの知覚機能、注意や視線を含む認知機能の発達、潜在過程と情動、意思決定、それらの社会性などをテーマに、研究を続けてきた。方法的には、心理物理学や眼球・手腕運動などの行動計測と、fMRI、EEG、MEGなどの脳活動計測技術、TMS、tDCSなどの脳刺激法を組み合わせる。それによって究極的には、クオリア問題(これ自体は擬制問題に近いと考えているが)に象徴されるような心の主観経験の解明

に、諦めることなく挑みたい。そのための準備として、まずはこうした主観経験を、脳-身体-(他者を含む)環境のより広いダイナミックな関係の中に位置づけたい。

このふたつの方向性は、相反すると思われるかもしれない。が、案外そうでもない。後者(脳-身体-環境のつながり)が前者(一見孤立して見える、主観経験の絶対質)に本質的な解を用意する。これが筆者のアプローチの背景にある、思想的な直観である。

さて、こころの未来研究センターの活動のひとつの指針は、「あくまで基礎研究のスタンスを維持しつつも、学際協力により、世の中と密接に関わり合えるプロジェクトを推進していく」ところにあると、個人的には受け止めている。かねてからそのような方向性に共感し、たびたび招聘を受け、交流を深めてきた。上記のような研究歴と問題意識が、今後さまざまな形で貢献できれば嬉しいと考えている。またその「さまざまな形」を、ともに積極的に模索したいとも考えている。

負の感情？

さて、そういう筆者に最初に与えられた課題が、これである。「負の感情」プロジェクトが現在進行中だから、それについて何か識見を示せ、ということだ。正直のところこれには虚を衝かれ、しばらく思考停止してしまった。不意打ち試験にお手上げの劣等生、という状態だ。もちろん考えてみれば、こういう広いテーマを選んで多分野から協力を仰ぎ、世の中の「負の問題」の解決に多少

でも手を差し伸べる。そういうモチベーションには、おおいに共感するのだが。

はじめは、これまで筆者が手がけてきたのが、ポジティブな情動や意思決定(選好や魅力判断)だけだったことが、思考停止の原因だと思った。だが少し考えると、原因はほかにもいろいろある。それらを分析することで、空回りしがちな「学際協力」や「世の中との有効な連携」に礎を与える。それを本稿の目的としたい。一言だけ予告的に言っておくと、筆者のような心理学・神経科学の研究者の目から見て、十把一からげには議論しにくい異質性を、このテーマは孕んでいる。

負?の感情

まず(すでに指摘されていると思うが)、「負」という言葉が問題だ。「負の感情」というと普通には、怒り、憎しみ、恨み、嫉みなどを指し、これらが「負」の感情であることに疑義を差し挟む人は、普通はいないだろう。しかしそれがいかなる意味において「負」なのかを掘り下げようとする、なかなか一筋縄ではいかない。またそのことが、研究のゴールを明確にし、ゴールに対して適切なアプローチを採ることを妨げかねない。

ここでの「負」ということばの意味には、大雑把に見て以下の3通りぐらいが考えられる。

- ①個人の不快な感情として。
 - ②適切でない、迷惑、などの社会規範的な意味で。
 - ③不適応、という生物学的意味で。
- この中で①が一番直接的で、自明



な意味だろう。実際に嫉妬にかられているときに、その嫉妬は本人にとっても不快な感情で、にもかかわらず制御できない。この「本人にとって」という部分が、この場合キーになる。

ところが日常生活の文脈で「負の感情」を考えると、案外②の意味が多く含まれていることに気づく。(そもそも、今使った「不快」ということばにしても、半分は他者に振り向けた意味で使われることも多い。)たとえば怒りや憎しみにかられている人が居るとき、それはたいてい本人にとって不快というよりは、周囲にとっての迷惑の方が大きいだろう。「怒りのあまり我を忘れる」などという慣用語があるとおり、本人はしばしば快も不快も、その刹那には自覚していない。つまり怒りや憎しみの一部は、上記①の観点からは必ずしも「負」とは言えないが、②の観点で明らかに「負」の感情、ということが出来る。

これは決して、特殊な場面だけを採り上げた議論ではない。ことさら

にいじわるをして喜びを感じたり、過剰なゴシップ好きなどの場合も、このカテゴリーに入る。さらに例を追加するなら、傲慢な自尊感情もそうだし、思い過ぎしの優越感、また最近の若い人に多いらしい「根拠のない自信」。みなこの部類かもしれない(掘り下げれば、それぞれ事情はちがうが)。つまり、これらはいずれも個人の感情(上記①の意味)としてはニュートラルかむしろ快(=正の方向)なのに、社会規範的な(上記②の)意味で「負」のケースと(一応は)考えられる。

私たちはこれらの例を日常よくあるケースとして認め、①と②の意味を峻別する必要がある。そのことは、「負の感情」を独我論的な陥穽から取りあえず公共の場に引きずり出す上で、有効な前提となるはずだ。

負は本当に負か？

このように「負(の感情)」の意味には、半ば独立した複数のレベルがあって、必ずしも一致するとは限

らない。

この点をさらに検証するために、次のような例を考えよう。ある人が身内の事故死などの悲運に会い、心から泣いて周囲の同情を集めたとする。「嘘泣きで注意を引く」といった自覚的な虚偽のケースは、ここでは考えない。)これは先の一連のケースとはほぼ逆で、①(個人の主観的感情)のレベルでは問題なく猛烈に「負」だが、②の(適切でない、迷惑、など社会規範的な)意味で「負」と断定することには、大きなためらいがある。結果的に周囲がこの人を助け、立ち直れたとすると、むしろまさにこの②の意味で望ましい、「正」常な社会機能として捉えるべきだろう。

別の例として、友人の大きな成功に嫉妬した。がそれが動因になって自分も努力し、それなりに成功できた。そういう場合はどうだろう。嫉妬は普通に考えれば、②の(社会規範的な)意味で「負」の感情の代表例だが、この場合はそうとばかりも言えない。「その場では不快=負だったかもしれないが、結果的にみなにとって良かったのでは」とも言える。①の(主観的感情の)意味でも、当座は不快で「負」だが、より大きな満足に因果的にリンクした負だったかもしれない。古来「災い転じて福となす」というとおりだ。

脱線ついでにいうと、「禍福はあざなえる縄の如し」という言い回しもある。英語では“Good luck and bad are next-door neighbors.”などというように、これは運の話だ。が、感情の話とすることもでき、その方が深そう。

分析的思考や実験室における「感情」と、実生活のそれとの最大の違いは、後者があくまでも連続していることだ。これは言い過ぎかもしれないが、日常生活における「負の感情」はほとんどの場合、「禍福はあざなえる縄の如し」的な一面を持っているのではない。

「不適応」という意味の「負」

このような例を少し細かく分析することから自然に、先ほど挙げた第三の意味レベル（不適応、という生物学的な意味）も見えてくる。つまり見てきたように、日常生活の時間軸では実のところ、「負」と「正」の感情はあざなえる縄の如きものだ。だとすれば「負」の意味を、もっと生物学的で恒常的な不適応だけに限定してはどうか……そういう選択肢もあるということだ。

その場合「負」の感情は、不安神経症や鬱、病的な躁状態、その他の情動障害など、精神医学的な意味での「症状」と重なってくる。ここでも面白いことに、たとえば鬱と躁を比較すると、前記①の「主観的な快、不快」の意味では正反対なのに、この③の立場で分類すれば共に「負」となる。やはり重なるようであり、重ならない事例がたくさんある。

蛇足ながら薬物中毒（アディクション）の場合は、詳述は避けるが①の意味に限定してもすでに正／負が重なりあっており、②、③の意味では明らかに負、と考えるべきだろう。

整理すると、(a)場面や文脈によっては「負」だが生物学的・精神医学的には健全な情動表出（＝①または②の意味で負だが③の意味では負でないケース）と、(b)精神医学的に「病的」な症候群（＝③の意味で負のケース）とを分けて考えたい。それには学問的意味があるだろうし、臨床的にも受け入れられている。

負の感情?～感情だけを切り離せない

以上をまとめると、「負の感情」の「負」の部分に多様な意味のレベルがあり得、そこを丹念に整理しな

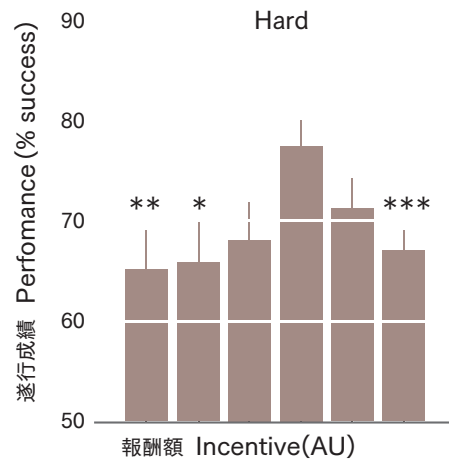


図1 報酬予告額と運動遂行の成績

いと先が見えてこない。くり返し述べてきたように、ある意味レベルでは負（正）でありながら、別の意味レベルでは正（負）であるようなケースが、案外多いからだ。さらに、「禍福はあざなえる縄の如し」と言い、中毒の例でも示したように、感情の正負はしばしば逆転し、また重なりあっている。

これに関連する第二の論点として、感情だけを、他の機能から切り離して議論することはできない。

感情は、もともと心理学の中ではごく限定された地位しか与えられてこなかった。単純な分類学の他は、（感情自体は一時的な心的状態／経験であるにもかかわらず）人格尺度との関連で恒常的な「感情傾向」として捉えられたり、また情動表出の一部として捉えられたりしてきた。今「情動表出の一部」と言ったのは、たとえば公衆の注目を突然浴びたとき、顔が赤くなったり心臓がどきどきするといった身体的反応と、羞恥の感情は切り離せないという意味だ。

感情はまた、情動のみならず、感覚・知覚や分析的な認知（意思決定）、行動と連続している。後で述べるように、痛みは普通「感覚」に分類されるが、不快の感情と切り離すことはできない。また一般人は感情と理性を対立的に捉えるのに対して、専門家（心理学者、認知神経科学者）は、むしろ連続的に捉える。

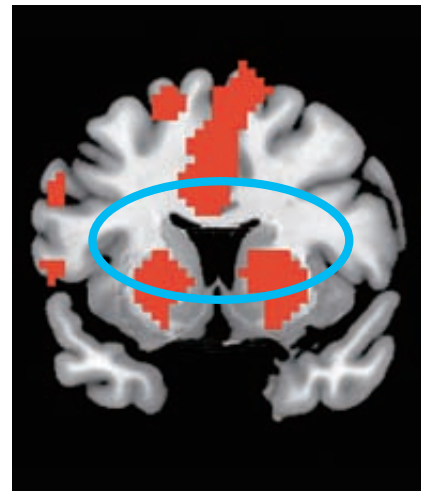


図2 腹側線条体の活動（一被験者の例）

チョーク（窒息）現象——負の理性？

感情と理性の「連続性」の最新例として、私たち自身の「チョーク（窒息）」現象の研究を挙げたい（Chib, et al, 2012）。チョークとは、いわゆる「堅くなる」「あがる」状態のことだ。オリンピックなどのように成功したときの栄誉が極端に大きかったり、入試などのように結果の落差が大きかったりすると、人は本来の実力を発揮できないことが多い。広い意味で「負」の心理状態と言ってよい。また経済学の「利得最大化」のモデルから考えると、期待される報酬が大きいほど、成績は向上するはずだから、その意味では説明の困難な「非合理的」ふるまい、ということにもなる。

困難な運動課題をfMRIスキャナーの中で実行させ、各試行ごとに成功の場合の報酬を事前に知らせる方法で、私たちはチョーク状態を実験的に再現した。図1のように、縦軸に遂行成績、横軸に報酬額をとると、真ん中に山ができて右端はむしろ下がる。またこのときの神経活動を見た。図2はひとりの被験者のfMRIデータで、青丸で囲った部分が腹側線条体の活動を示す。

結果をまとめると、報酬手がかりが与えられたときには、報酬の額に応じて腹側線条体（運動機能や意思

決定、報酬価への関与が知られる皮質下の領野)の活動が報酬額に正相関していた。ところが遂行時になると、なんと逆相関していた(遂行成績が落ちるのもこのためと思われる)。またこの報酬額による線条体の活動低下(逆相関)は、被験者の「損失回避傾向」が大きいほど大きかった。損失回避傾向が大きい被験者では、報酬額が呈示された時点で損得計算の「原点」が「報酬をすでに獲得できた」レベルまで上がってしまう、そこで遂行時には大きなペナルティの可能性と戦うことになってしまう。そのように解釈できた。

つまり、従来ショック現象は、精神的なストレスや緊張から注意が集中できなかつたり、運動系の働きのノイズが入ったりというふうに、情動要因で解釈されてきた。が、神経経済学的な(つまり利得計算の)モデルの方が、計量的にはよりよくフィットしたということだ。

ここでこの例を挙げたのは、情動的な解釈と、利得に基づく解釈のどちらがよいかを論じるためではない。むしろその両者が多くの場合連続的であること、非合理的な感情も、合理的な解釈が可能であることを、例証したかったからだ。

世界の見え方そのものが変わる

このように情動を含むさまざまな機能が密接にリンクしているのは、一個の脳や身体が適応メカニズムとしてある程度首尾一貫しているから、と考えられる。もう少し具体的に、たとえば情動や動因が知覚内容に影響するという証拠も、たくさんある。

見たくないものは意識レベルでは見えない、という「知覚的防衛」はその古典的な例だ。これについては論争があり、さまざまな追実験がある。だが、論争の焦点は主に「どのレベルで抑制が働いたか」を巡るので、効果自体を否定する研究者は

少ない。また、老人など身体的にハンディのある人には、同じ階段のスロープが急峻に見えたり、同じ荷物がより大きく(重く)知覚されるという報告もある(Bhalla & Proffitt, 1999)。

もっと精神病理学的なケースに訴えていいなら、鬱や精神外傷で「世の中灰色」になったときに、それが比喩的な意味ではなくて文字どおり知覚が変わっている(その場合には感覚皮質の活動も低下している)と疑うべきケースがかなりある。

以上のように、知覚、運動、意思決定など他の心的機能モジュールとの関係から見ても、「負の感情」をそれだけとして切り離して「負」とラベル付けることはできない。

負の感情はコントロールすべきか?

ここまでで、一口に負の感情と言っても「負」にはさまざまな意味のレベルがあり得ること(第1の論点)、また感情は知覚、運動、意思決定など心の他の働きの繋がりが強く、切り離せないこと(第2の論点)を強調してきた。これらを受けて、第3の論点として言いたいのは、次のことだ。つまり、負の感情はコントロールできるならそれに越したことはない、と誰しもが思うだろう。だがこれも、上記の2点を前提にすると、簡単には領けない。コントロールできた方がよい場合と、できない方がむしろよい場合とがあるのではないか。

そもそも負の感情が、生物学的に見て本当に常に不適応なものであるなら、進化の過程でとくに淘汰されているはずだ。……そういう進化心理学っぽい議論は、どこかで見たような気がする。統合失調症や自閉症などの精神疾患では、すでにお馴染みの議論だ。つまり何十世代経っても淘汰されていかない。人口に対する罹患率が減らないどころか、自閉症に至っては急増し、診断の普及

などの人工要因を考慮に入れても、本質的な意味で増えている疑いすらある(LA Times, 12/13/2011付)。何らかの生物学的意味で、役立っているのではないかと。

痛みは不要か?

負の感情全般についてこれに類する主張をするのは、いささか乱暴かもしれない。この議論がより普遍的な説得力を持つのは、「痛み」の場合だろう。痛みは、教科書的には「感情」ではなく「感覚」に分類されるが、常に不快の感情とリンクしている。痛みは身体の危機の緊急信号だ。緊急性を伴う(つまりなんとしても排除しようとする行動をトリガーする)ためには、極度に不快である必要がある。そして痛みの知覚機能は、進化の過程で淘汰され消えてなくならなかった。つまりは役立っているということだ。比較行動学的にも、進化論的にも、異論の余地はない。

その痛みが通常の意味(=上記①の意味)では問題なく「負」の知覚/感情だとしても、ないほどよい、コントロールできるほどよい、とはとても言えない。

それなのに人類の文明は「無痛化」を旨とし、自らを家畜化してきた。これは人間の本性から見て望ましくない、と警鐘を鳴らす倫理学者、哲学者は古来、少なくない(その最近の一例として、森岡正博『無痛文明論』)。

そこでの議論には、広い意味の「痛み」が含まれている。つまり負の感情の少なくとも一部が、含まれているということだ。たとえば今ここに、愛児に先立たれて悲しみにくれている母親がいるとする。また現代医療が進んで、悲しみや精神的苦痛を取り除く薬が使えるとする。(これは絵空事ではない、SSRI〈選択的セロトニン再取り込み阻害薬〉、SNRI〈セロトニン・ノルアドレナ

リン再取り込み阻害薬〉などの新世代抗鬱剤は、その有力候補だ。)この母親にその薬を与えて悲しみをすぐに取り除くことが、果たして母親自身にとって、あるいは人類全体の未来にとって、本当によいことなのだろうか、と。

これは痛みに関する議論なので、負の感情一般にそのまま適用するわけにはいかない。その理由はすでに見てきたとおりで、「負」といってもいろいろあるからだ(第1の論点)。ただ再度強調しておきたいのは、痛みという感覚が、不快の感情と不可分につながり、さらにそれが個体としての適応機能や、人間の本性ともつながっていたということだ(第2の論点の拡張)。

さらに付け加えると、この広い意味での「痛み」には他者性が深く関与している(これも第2の論点の拡張)。「泣いて周囲の同情を(結果的に)集める」場合を、先に挙げた。他にも最近のfMRI研究で、他者の痛みを自分の痛みとして感じる共感性の、神経基盤を調べたものがある。そういう場合にも、自分の痛みの場合とほぼ重なる、島、前部帯状回、脳幹などの情動・愛情関連部位が活動することがわかった(Singer, et al., 2004)。(しつこいようだが、この他者の痛みを感じるケースも、①の主観的意味で負ながら、②の社会的な意味で正の例となる、それもきわめて重要な。)

学問的理解と実存 ——「貫通する」部分

最後に、どうしても指摘しておきたい重要なポイントがある。ここで述べたのは主に、負の感情を分析的・科学的に研究する準備、そのための概念整理といったことだ。だがこれらの認識は案外、実際に負の感情に悩む個人の実存的な、臨床的な場面に活かせるかもしれない。

「自分だけの悩みではない、ひとりで悩む必要はない」という認識

が、時として苦しんでいる若者を助ける。これは筆者自身も(両側で)体験してきたことだ。また「客観的に見て、負は単に負ではない、より大きなスケールでは正の側面を必ず持っている」。このことを実感できれば、実存の場面でも力となるかもしれない。

私たちは今や、自らの築いた文明に足元を脅かされながら生きている。温暖化しかり、環境や食物の汚染しかり、原発しかり、だ。若い世代が抱え込む未来への不安や漠然とした「負の感情」、その総量も確実に増え続けている。

しかしそれでもなお、学問的な知が実存的な心のあり方に「貫通する」可能性がある。この貫通する部分こそがチャンスであり、こころの未来研究センターのアプローチにとっても、本質的に重要なものかもしれない。

参考文献

- 森岡正博『無痛文明論』トランスビュー、2003年。
下條信輔『〈意識〉とは何だろうか——脳の来歴、知覚の錯誤』講談社現代新書、1999年。
Autism boom: an epidemic of disease or of discovery? LA Times, 12/13/2011付。
Chib VS, De Martino B, Shimojo S, O'Doherty J. Neural Mechanisms Underlying Paradoxical Performance for Monetary Incentives are Driven by Loss Aversion. *Neuron*, 74, 582-594, 2012. DOI 10.1016/j.neuron.2012.02.038.
Bhalla, M. and Proffitt, D. R. Visual-Motor Recalibration in Geographical Slant Perception. *Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance*, 25, 4, 1076-1096, 1999.
Singer, T., Seymour, B., O'Doherty, J., Kaube, H., Dolan, R.J., Frith. Empathy for pain involves the affective but not sensory 2503 components of pain. *Science* 303, 1157-1162, 2004.



負の感情の適応的意義

入來篤史 (理化学研究所脳科学総合研究センター)

Atushi IRIKI



1957年生まれ。東京医科歯科大学大学院歯学研究科博士課程修了。理化学研究所脳科学総合研究センター象徴概念発達研究チーム・シニアチームリーダー。歯学博士、医学博士。ヒトの知性を特徴づける象徴概念機能の発達と進化の神経生物学的メカニズムの解明を目指す。著書に『研究者人生双六講義』(岩波科学ライブラリー)、『Homo faber 道具を使うサル』(医学書院)、『言語と思考を生む脳』(東大出版会)ほか。

はじめに

感情を生物現象の視点で考える

「感情をコントロールして理性的に振る舞うこと、それが成熟した大人の第一の証である」と言われれば、多くの人は同意するのではないだろうか？ 近代に成立し現代社会を広く覆っている、いわゆる〈自然科学的人間観〉では、合理的な理性の優位性を前提として社会が設計され成立しており、そこには、〈感情〉は抑えて制御すべき一段劣った動物的な機能である、という暗黙の認識が潜んでいる。しかし、これは翻って考えてみれば、人間は油断してい

ると押し並べて〈感情的〉に振る舞う傾向が強い、という諒解の裏返しであるとも考えられる。そしてさらに、そこには〈感情〉はえてして非合理的なものである、という暗黙の警戒感も同時に潜んでいるに違いない。さらに、感情を抑制すべきものと感じさせているのは、いわゆる社会的な〈負の感情〉の存在が暗い影を落としていると思われる。一般的には、恨み、妬み、憎み、嫉み、などがその例として挙げられる。しかし、一体そもそも〈感情〉とは何なのであろうか？ そして、その〈負〉の側面は、いかにして規定されるのであろうか？

人間が〈感情〉をいだき、それに突き動かされて行動を起こすのは脳の働きである、とわれわれ脳神経科学者は考える。多くの人々はこれに同意するであろう。脳神経は、われわれの頭蓋の中に収まっている、生物学的実体としての〈臓器〉の1つにすぎない。であるので、その働きによって生じる現象は、生物学的現実である。したがって、感情が脳神経系の作用によって湧き起こるものであるならば、それは生物学的に記述されるはずである、と科学者は考える。そして、それが他の生物学的な形態や機能の実体と同等なものであれば、長い生物進化の過程を通して適応し、選択されてきたもののはずである。本稿では、まずは生物学としての脳神経科学の立場から〈感情〉とは何か、そして社会的な〈負の感情〉とはいかなる性質を持った現象であり、それをコントロールするにはどうすれば良いのかという、現時点では自然科学の射程を超える事象について、あえて想像を巡らせ

てみることにしたい。

感情とは何か？

情動反応としてそれを生物学的に定義してみる

感情とは、いわゆる〈情動反応〉の背景として心に湧き起こる精神の〈状態〉をさす、と一般には漠然と考えられているのではないか。ここで情動反応とは、環境のある状況に対する〈生物の一連の生理的反応〉の様式であるといえる。ここでは、環境の〈ある状態〉を科学的に記述することができるし、それに対する主に自律神経応答などの〈生理反応〉も計測し記述することができる。そして後者は、《回避・忌避・排出》や《是認・接近・摂取》という、〈態度・行動〉を促す対象や事象の存在の感知とそのような〈“態度”という内部状態〉や〈“行動”という外部応答〉の形成、といった一連の行動を引き起こすための準備的現象をふくんでいる。すなわち、感情とは〈行動の背景〉を織りなす一連の生体反応の総体、ととらえることができる。ならば、このような現象は、ごく下等な生物から観察することができる。そこでは、この〈状態〉の性質は、それを引き起こす環境の性質ではなく、その環境によって引き起こされる行動の性質によって決定される。では、この一連の過程に伴う〈感情〉はすべての動物にあり、それを定量化することができるのだろうか？

〈情動反応〉の生成の一連の過程に関する、脳神経科学的、生物学的なメカニズムについては、多くのことがわかっており、生理学の教科書などでは多くの頁をさいているの

で、詳細は別の機会にゆずる。なぜこれが自然科学の体系として確立しているかという、これは物理的に計測可能だからである。また、生体反応の時間的フレームが、比較的短時間の微分方程式的な定式化で収まる〈無時間的〉な自然科学現象だからである。そして、その行動を引き起こすための内部状態の〈構え〉あるいは〈準備の仕方〉のパターンに対して、様々な分類がなされ、一連の情動反応として確立しているものと考えられる。これらが、いわゆる喜・怒・哀・楽として分類される、原始感情または《一次感情》である。つまり、感情とは、情動反応（主に自律神経反応）の総体に対して付与された名称であるとみなして、ほぼ齟齬はないだろう。

感情に正／負や善／悪があるか？ それを生物学的に構造化してみる

前節で考察したように、感情とは〈ある環境状態における生体の反応〉の様式の1つであるならば、それ

自体に付与される〈価値〉は、〈生存にとっての有利さの程度〉以外にない。ここで、すべての生体反応は進化の過程で適応的に選択されたものであるとするならば、生存にとって積極的に不利になる反応は長い進化の過程で淘汰されているはずなので、生き残り戦略の上で不利になるような機能は残りに残らないことになろう。したがって、そこには〈より正しい〉〈より善なる〉ものがあつたとしても、〈負〉〈悪〉といったマイナス方向への値は、元来あり得ないものである。にもかかわらず、人間の一般的〈感覚〉としては、正負／善悪は存在する。それはなぜか。

前節でみた、生物の〈行動・態度〉の種類をもう一度考えてみよう。生物の外界に対する行動は、基本的には《回避・忌避・排出》や《是認・接近・摂取》に大別される。われわれの日常感覚に立ち戻って内省してみると、《回避・忌避・排出》すべきものには嫌悪感を抱き、《是認・接近・摂取》すべきものについては

愛好感を抱くだろう。そして、前者には〈負〉・〈悪〉のラベルを与え、後者には〈正〉・〈善〉のラベルを与え、あるいは無邪気にそう〈感じる〉のである。双方とも必要性という〈価値〉については同等であるにもかかわらず、である。これは他の感覚についても同様である。例えば、味覚。エネルギー源として価値の高い食物は、甘く、コクがあり、美味しい。そして人はそれを好む。たとえ過剰摂取（動物界ではほとんど起こらない）がいかにも有害であろうとも。また、毒性のあるものは、苦く、渋く、まずい。そして人はそれを嫌う。たとえ長期的には有効成分であろうとも。「良薬口に苦し」とはこのような状況への教訓・戒めなのであろう。

こうしてみると動物（人間を含む）の行動は、誤解を恐れず単純化していうならば、基本的には生存上の有利さに基づいた《損・得》によって行動選択され、それらを選択する心的規範として《嫌・好》という



図1 パールヴァティー(左)とカーリー
ヒンドゥー教の女神で、三最高神の一柱シヴァ神の妃。パールヴァティーは「山の娘」を意味し、母性愛を体現した美しく優しい女神。一方、カーリーは「黒い者」を意味し、戦いの女神。パールヴァティーの憤怒相がカーリーとされる。カーリーは殺戮を好むとされるが、カーリーが闘う相手は悪魔で、悪魔退治を終え、勝利の踊りを踊ったところ、大地が壊れんばかりに揺れた。それを抑えるために、シヴァ神は踊るカーリーの下に自らのからだを投げ出す。

漠然とした感情を対応させたのであろう。一次感情は、〈情動反応〉、主に〈自律神経反応〉としての表出に対する自己再帰的認知過程であるといえよう。感情の認知のためには、環境状態と自己の状態を客観的に認知して相対化し、比較対照する心的メカニズムが必須となる。したがって、〈自己の状態の客観的モニタ〉メカニズムが備わっていないかぎり、〈感情〉を自ら記述することはできない。つまり、動物には〈情動反応〉はあっても、〈感情〉は存在しないことになる。〈感情〉を記述するのは、人間中心主義的な〈解釈〉の問題だからである。これは喜怒哀楽などの《一次感情》あるいは生物的感情では比較的明確である。では《二次感情》あるいは社会的感情ではどうであろうか？ 基本的には同じ神経メカニズムを転用するのが進化の常道である。次節では、それを前提に、二次感情に外挿し、考察の延長を試みてみることにする。

人間の社会的感情は科学できるか？

その生物学的な制御機構を考えてみる

前節でとりあつかった、いわゆる《一次感情》は、生体が生きている物理的環境世界の中における自己の身体の状態、の様式についての状態表象であった。それに対して、人間が生きている世界は、〈自己客観化〉と〈自己相対化〉によって、多数の客観化された自己の集団によって構成される〈社会〉が物理環境を凌駕してその環境世界の主体となる。それは多分に、物理法則から乖離したシンボリックシステム象徴的世界・なのである。そして、この〈象徴世界〉は刹那的な空間的広がりのみならず、未来に向かって

も永く続く時間的広がりももっている。それは、〈いま・ここ〉には存在しないものによって構成され人間精神の中のみ存在する抽象的な世界である。したがって、それを物理的に〈計測〉することはできない。この世界を構成するものは、象徴的な法則と、社会の構成員によるその共通認識である。これは、折に触れて、現実の物理世界と摺り合わせを行って校正される以外は、現実から乖離してまったく自由に設計できる（できてしまう）。この世界は多義的、多層的、暫定的、可変的、複合的である。しかも、構成員の《自由意思》によって変更可能でさえある。その〈世界操作性〉の中に〈社会的感情〉が産まれるのだろう。動物の一次感情は、即時的、刹那的である。しかし、人間の時間フレームは複雑で長い。

さらに、長期的な価値と短期的な価値は、矛盾する場合、多義的な場合がある。人間の社会的感情（あるいは《二次感情》）は、そのようなフレームの中に生じる、現代の自然科学的技術では計測不可能な精神現象である。

しかし、その〈象徴的世界〉の中でも、適切な行動選択はなされなければならない。言い換えると、象徴的な社会的環境の中に〈適応的行動〉は存在する。即ち、社会的に《回避・忌避・排出》すべき行動や《是認・接近・摂取》すべき行動は存在する。そして、それらに対して、同様な〈適応的価値〉はラベルされるのが自然で、それは既に存在する《一次感情》の神経回路を便宜的に利用するのが進化の常道であろう。つまり、定義されるべき〈社会的感情〉の無意識的な選択反応、そしてその客観的認識としての〈心理状態〉が存在するのであろう。本稿で問題としている〈負の感情〉とはまさにこの側面なのである。つまり、社会的感情は、社会的に適応的な行動をラベルするための作用であるといえる。

道徳・倫理は感情に由来するか？

負の感情の生物学的な意義を考える

では、社会的な〈負の感情〉が、社会的意味を持つとすると、それはやはりその社会環境の中での個体（個人）の生き残りにとって積極的な価値があるはずである。負の感情は、一般的に、非道徳、非倫理的、といわれる。それは、嫉妬、羨望、怨恨、憎悪などは、対象からの《回避、忌避》を誘発するよりも、対象に対してその対象から見ると好ましからざる、反社会的とみなされるような社会的操作を伴う行動を誘発するからであろう。この対象の操作、という行為は、物理的世界における嫌悪情動にはみられない特徴である。例えば、苦いものを甘くしようとか、そ

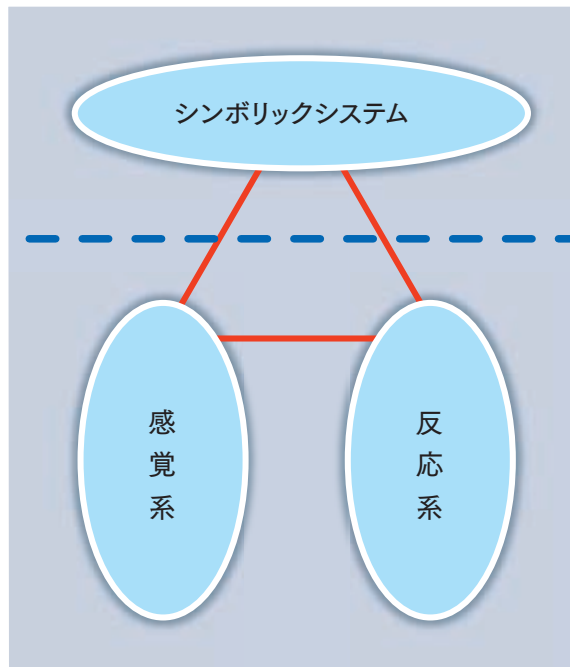


図2 動物界と人間界の関係(カッシーラー『人間:シンボルを操るもの』より)
動物界(点線から下)は感覚系と反応系のみからなる現実世界。人間界(点線より上)では前者2つの系の上位に象徴系が存在し、現実世界から乖離した象徴世界を構築する。(岩波文庫版(1997年)の概念図を元に作成)

れを破壊しようとは直ちにはしないだろう。象徴世界は、多義的で、恣意的に再構成するような操作が可能である、という特徴がある。物理的世界ではそうはゆかない。象徴的な社会環境にあっては、みずからの行動によって環境世界の構造を変更することが可能なのである。

物理的世界では、最適な行動（感情的な好悪を一義に規程する）は、外的条件によって一義に規定されており、それらは自動的に誘発される。言い換えると、個体は受動的な行動しかできないが、象徴的世界では、それらから解放されて《自由意思》が存在するので、選択可能な行動のレパートリーが無限に広がることとなる。したがって、このような環境にあってその秩序を保つためには、物理法則とは乖離したレベルでの、生存上の規範となる抽象的ルールが必要になる。それが〈道徳〉〈倫理〉として立ち現れ、感情を誘発するのだろう。ここに社会的な〈負の感情〉の特異性がある。したがって、社会的な〈負の感情〉とどうつきあうか、によって未来の社会が規定されてしまうことになる。自己抑制、感情のコントロールをしないと、象徴的世界の時空間的地平がどんどんと収縮してしまう。負の感

情が引き起こす自律反応が、共有する一次感情を担う神経回路との対応によって、元来持っている時間スケールで反応を引き起こしてしまうからである。

おわりに

自己を確立して負の感情をコントロールする

一般的に、自分に自信のある者、自己の確立した者は、感情が安定していて、世の雑事には関せずで、滅多に腹を立てたり争ったりしないものである。逆に、自己の確立していない者、自分に自信のない者は、負の社会的感情を起こしやすい。逆恨み、カチンとくる、逆撫で、気分を害する、などがその契機となる。これは、何らかの社会的状況が、情動を惹起する神経回路を刺激したためであろう。この〈社会的状況〉が生物的な情動神経回路をどのようなメカニズムで〈刺激〉するか、という様相をあきらかにすることによって、いわゆる〈負の感情〉の正体と、その制御法が明らかになってくるものと考えられる。ここで鍵となるのは、〈自己〉の〈確立〉ということであろう。

これらの負の感情は、社会的存在である個人が社会的活動を通して

“自己実現”を図る過程で「他人から認められたい、一目置かれたい」という社会的欲求が満たされなかったと感じたときに生まれる。上記の論考から、この葛藤的欲求から解放される道は、その社会的状況が情動神経回路を刺激しないようにすることである。そのためには2つの方策が考えられる。すなわち、それが事実でもたとえ幻想でも周囲から突出して絶対的自己を確立（“自己確立”）してしまうか、周囲を遮断して絶対的自己に閉じこもる（“自己逃避”）か、である。その中間の状況にいる大多数の人間は、周囲からの目を気にしながら“自己実現”を目指す。その過程でこの基本的欲求と齟齬を来たす事象に対して〈負の感情〉が誘発される。翻って、“自己確立”したものが周囲との関わりの中でその存在の沽券をかけて“自己表現”する場合には、そのような感情を引き起こすことはない。この確立した自己が真実であるか幻想であるかが大問題であるが、それを峻別するのは歴史の判断を待たなければならないだろう。つまり、社会環境の進化的適応による選択によって淘汰されてゆくことになる。



図3 ピーテル・ブリューゲル「嫉妬」(1558年)「7つの大罪」と名づけられた版画シリーズの1つ。下の銘文には「嫉妬は恐るべき怪物であり、残酷な疫病である」とある。中央の女性が右手に持っているのは心臓で、これが嫉妬を表すしぐさだという。ちなみに、あとの6つの大罪は傲慢、激怒、怠惰、貪欲、大食、邪淫。ベルギー王立図書館所蔵。

負の感情をのりこえる語り——「がんばろう、日本」と「アイ・ラブ・ニューヨーク」

やまだようこ（京都大学大学院教育学研究科教授）

Yoko YAMADA



1948年岐阜市生まれ。京都大学大学院教育学研究科教授、教育学博士。2012年4月より京都大学名誉教授、立命館大学特別招聘教授に就任。専門は、生涯発達心理学、ナラティブ心理学、描画イメージの心理学、文化心理学。著書に『やまだようこ著作集』全12巻（新曜社）のほか、『ことばの前のことば——ことばが生まれるすじみち1』（新曜社）、『私をつつむ母なるもの——イメージ画にみる日本文化の心理』（有斐閣）など多数。

語りの力

未曾有の東日本大震災が起こった。今こそ、ナラティブ（語り、物語）やことばの力が試されているような気がする。ナラティブとは、「2つ以上の出来事をむすびつける行為」である。私たちは、現実には起こった出来事を変えることはできないが、それらをどのようなことばと「むすぶ」かによって、経験の組織化と意味づけ方は変えることができる。物語によって未来をつくっていくこと

もできる。

私たちの文化には、不幸な出来事に出会ったときに活用できる、多くの物語がすでに蓄えられている。ある文化に共通する集合的で定型的な語りを、文化的ナラティブと呼ぶことができるだろう。文化的ナラティブは、その文化に属する人は誰もが知っている日常的で平凡なことばで出来ているが、いざというときには渦のように自然に巻き起こって次々に語り直され、言い換えられ、バージョンを変えながら口コミで波及する。

東日本大震災3.11のあとは「がんばろう、日本」の大合唱が起こった。「がんばれ、東北」「がんばってます、石巻」など多様な語り口を生みながら急速に広がった。これらは突然起こった理不尽で国全体を揺るがすネガティブな出来事を、共同体が集団で団結して乗り越えようとするときの文化的ナラティブである。

文化的ナラティブは、ときにマスター・ナラティブ（支配的語り）になる。権威者や支配者が用いると政治的に利用されやすい。定型的で紋切り型であるから、オリジナリティを重視する研究者や芸術家からも評判がよくない。「がんばろう、日本」は、大衆に広く普及したが、2011年の流行語大賞に選ばれるどころか、ノミネートされることもなく無視された。しかし、日常の何げない単純なことば、平凡で定型的で集合的な語りこそ、人びとが負の感情をのりこえ苦境のなかで生き抜くときの知恵として実生活で活用される。それらは、良きにせよ悪しきにせよ、私たちの生活や人生のなかに奥深く浸透し、広く早く伝わる力をもってい

るのである。

「がんばれ、日本」の多様な変奏

震災の直後、2011年3月13日、英国の新聞インディペンデント（日曜版）は、1面全体に赤い日の丸を描き、日本語で「がんばれ、日本。がんばれ、東北。」と応援メッセージを掲載した（図1）。

この語りは日本人を励まし、世界中に共鳴の語りの変奏を生み出した。当事者も支援者も同様の語りをを用い、立場のちがいにいかかわらず、多様な変異形と微妙にズレをもつ意味になって「うたう」ように波紋を拡げていった（図2～図4参照）。

ここに掲載した図は、比較的公的に使われたステッカーなどの例であるが、はちまき、手ぬぐい、ポスター、立て看板、うちわ、シャツ、バックなど多様な媒体に、似たデザインと語りが使われて普及した。

また、新聞記事やブログ、個人の投書やツイッターでも、「がんばれ」「がんばって」「がんばろう」「みんなががんばろう」「よくがんばった」「がんばりすぎないで」「がんばらなくていいよ」など、単純ながら多様な変奏をもつ「ガンバレ・コール」が、つぎつぎに交わされた。

情報伝達のナラティブは、相手に伝わって目的を達すれば、解消され消えていく。それに対して負の感情をのりこえる文化的ナラティブは、自分流にバージョンを変え、文脈にあわせて変奏されながら、自分の感情を鎮めるとともに他者を共鳴的に巻き込む力もち、多様なバリエーションを伴いながら波及するといえよう。



図1 2011年3月13日付の英紙インディペンデント・オン・サンデーの1面トップ (Reproduced with permission from The Independent)



図3 東北観光振興ポータルサイト



図2 被災地復興支援プロジェクト・ステッカー



図4「がんばろう ふくしま」福島県

アイ・ラブ・ニューヨーク (I love New York)

「がんばろう、日本」の大合唱は、アメリカの同時多発テロ9.11のときに起こった“I love New York”や“We love America”の大合唱に匹敵するだろう。両方とも国旗がシンボルとして使われることも多く(図5、図6参照)、さまざまなバリエーションを生みながら世界中に広まった。

国や共同体が震撼するような危機や災害に見舞われると、それを取り返す(redemptive)文化的ナラティブが自然に同時に巻き起こるのである。これらのナラティブは個人の負の感情を表現し、集団のなかで人と人とのむすびつきや共鳴を高めて、ポジティブな方向に前進させるために大きな力をもつ。それと同時に、マスター・ナラティブとして使われる危険も生じる。

2つの文化的ナラティブを比較すると、共通性が見出されるとともに相違点もある。アメリカでは、個人としての自己が主語で、「愛する」という主体的行為が国や都市や人びとに向けられた。同時に「神がアメリカを祝福しますように“God bless America”」など宗教的ことばも多く見られた。日本では、主語はなく「がんばろう」という集団による意志表示が国や都市や人びとに向けられた。宗教的なことばは連動せず、あくまで集合体の一員としての絆を自覚し相互にむすびつけることばとして機能したようである。

「ラブ」という英語の日常語のもつ広く深く、人びとの心を情動的に揺り動かす豊かな意味は、日本語にはうまく訳すことができない。毎日のように気楽に使うことばであるとともに、大切な人を喪失したとき、その人との関係をあらわすとき、その人を追悼するとき、もっとも重要なことばになる。個人的な感情をあらわすとともに、宗教的な深さも、哀悼もあわせもつ。「愛する」「ほれ

る」「恋う」「好き」「いとしい」「慈しむ」「祝福する」「大切にする」「大事にする」、どれも不十分だろう。

「がんばる」と 「持ちこたえる(hold on)」

「がんばる」の豊かな深い意味も、外国語には訳しにくい。インディペンデント紙(図1)では、「がんばれ、日本」の下に、“Don’t give up, Japan”(あきらめるな、日本)という英語がつけられていた。その後の海外ネットでは、「Ganbare」という日本語がそのまま使われることもある。

「がんばる」は、文脈によって多義的に使われる興味深い日本語である。スポーツ応援の「がんばれ」は、「ファイト(fight 闘志)」だろう。「ふくしま」のステッカー(図4)は、ファイトになっている。しかし、「困難にめげず気丈に耐える(タフtough)」という意味のほうがふさわしいときも多い。駅で見送るときの「がんばってね」は、「お元気で(good luck)」というニュアンスになる。

「がんばる」は、懸命に努力する意味もあるが、積極的にアクションを起こす行為とはいえない。英語にすれば“hold on”, “preserve”などにあたり、「抵抗する」「忍耐する」「持続する」「保持する」というニュアンスが強い。震災が報道されたときに世界が驚いたのも、想像を超える負の出来事に遭遇して、忍耐強くがんばる日本人だったと考えられる。

ジョン・レノン、ビートルズ解散後の辛い時代に、「ホールド・オン(HOLD ON)」という歌をつくっている。日本語に訳せば、「がんばれ」「しっかり」というような意味になる。彼は、自分に向かって「がんばれ、ジョン。ジョン、がんばれ」と繰り返しつつおやく。「君がひとりぼっちで、他に誰もいないとき、ただ自分を保つのだ、そして自分に言うのだ、がんばれ」。この歌は、困難

なときに自分で自分に言い聞かせる「がんばれ」ということばの働きをよく示している。

「がんばる」という日本語は、「あきらめない」「持ちこたえる」「しっかりする」「ふだんの自分を守りつづける」「負の感情を抱えながらがまんして生きる」へと意味のむすびつきを広げて深めていくことができるだろう。

ナラティブは、自分と同伴する物語として機能し、「自分自身を持ちこたえる」(holding one’s own)働きをもつ。他者に語るナラティブは、自分自身に言い聞かせるナラティブでもある。困難なときに自分を励まし、自分を保持し、そして再び他者へと共感を広げる働きをする。「でも、がんばろう」と負を転じる語りは、日本文化のなかに生きるしたたかな共同生成のナラティブといえよう。

「がんばろう」のほかに「ありがとう」も、喪失に出会ったときの興味深い文化的ナラティブとして、私は注目してきた。負の感情に打ち負かされそうになるときに、「がんばろう」「ありがとう」など自分にも相手にも呼びかけることのできる文化的ナラティブを私たちはすでに持っており、必要なときに文脈に応じて使うことができるのである。

参考文献

やまだようこ『喪失の語り——生成のライフストーリー』(やまだようこ著作集第8巻)新曜社、2007年。

やまだようこ「不幸を転じるナラティブ——東日本大震災「がんばろう」の語り」、子安増生・杉本均編『幸福感を紡ぐ人間関係と教育』ナカニシヤ出版、2012年、27-39頁。



図5 I love New York
2001.9.11後のニューヨーク、グラウンド・ゼロにて
(2002年8月伊藤哲司氏撮影、図6も同様)



図6 We love New York, God bless America

負の感情と身心変容技法としての瞑想

中川吉晴 (立命館大学文学部教授)

Yoshiharu NAKAGAWA



1959年生まれ。トロント大学大学院オンタリオ教育研究所博士課程修了(Ph.D)。立命館大学文学部教授。2012年4月より同志社大学社会学部教授に就任。専門は臨床教育学、ホリスティック教育、スピリチュアリティ研究。著書に『ホリスティック臨床教育学——教育・心理療法・スピリチュアリティ』(せせらぎ出版)、『気づきのホリスティック・アプローチ』(駿河台出版社)、訳書にA・ローエン『うつと身体』(共訳、春秋社)ほか多数。

「魔女ランダの舞」から

私はこれまで何度かバリ島をおとずれ、幸運にも魔女ランダの舞を見るという貴重な機会にめぐまれた。これは、ランダの役に抜擢された日本人、川手鷹彦氏(演出家、治療教育家、青い丘主宰)と、川手氏が属す名だたる芸能一家、メシ家のご厚意によって、村で行われる儀式に列席することを許されたためである。川手氏は、バリ・ヒンドゥ芸能の最高峰と呼ばれた故デワ・マデ・ライ・メシ師のもとで研鑽をつみ、ヒンドゥ僧の資格をとり、ランダの舞い手となった人物である。

魔女ランダの舞は、バリの年周期である210日ごとにおとずれるオダラン祭で舞われる、村でいちばんの神聖な儀式である。ランダの舞は正式にはチャロン・アラングと呼ばれ

る舞踊劇で、娘を国王に嫁がせる望みを果たせなかった寡婦チャロン・アラングが魔女ランダとなって国を苦しめるという物語が演じられる。それは劇を演じる一座と楽団をまねいて、村人総出でおこなわれる一大宗教行事である。

当日は朝から、われわれ日本人グループも正装し、川手氏やメシ家の人たちとともに、ランダの舞が行われる村の寺院に向き、豪華に飾りつけられた祭壇のまえで礼拝をした。その後いったん家にもどり、夜になって再び村に向向いていった。すでに寺院には、幼い子どももふくめて村人がたくさん集まっている。やがてガムランの演奏とともに村の

子どもたちの踊りが始まり、その後、女性の踊り手や、役者たちによってチャロン・アラングの物語が演じられていく。着飾った踊り手は妖艶な踊りを披露し、それに役者たちの踊りがつづき、魔女退治にむかう刺客が出てきて、その場面がドタバタ劇のように演じられ、見ている人たちの笑いをさそう。

このとき時刻は深夜をとくにすぎている。この場面が終わると、あたりの雰囲気は一気に変わって、村人たちの様子も騒然としてくる。そのとき、恐ろしい仮面をかぶった魔女ランダが寺院の狭い門から姿をあらわす。「面を掛ける」という行為によりトランス状態にはいったランダは、悪霊を呼び寄せる台詞を唸るように唱えながら、あたりかまわず動きまわる。その動きはしだいに激しさを増していき、最後はどこに向かって走り出すかわからないようになる。まわりの男たちは、その様子を見てランダの動きをおさ祭壇へと運んでいく。そこで仮面をとったランダ役の川手氏に聖水が注がれ、正気にもどり、長い夜は終わりをむかえる。

バリでは、村に蓄積された負のエネルギー(悪の力)を、こうした宗教的・芸術的儀礼のなかで一挙に解き放っている。川手氏によれば、僧侶が魔女ランダになることで、村全体の悪を一身に引き受け、それを浄化し変容するのだという。バリの人たちにとってランダや悪霊は現実の存在であり、ランダの舞はコミュニティ全体の霊的浄化の儀式であるが、それは同時に、村人たちのなかに蓄積された負の感情を浄化するものになっている。



図1 魔女ランダの舞い手・川手鷹彦氏



図2 川手鷹彦氏が舞う魔女ランダ(吉岐紀仁氏撮影の動画より)

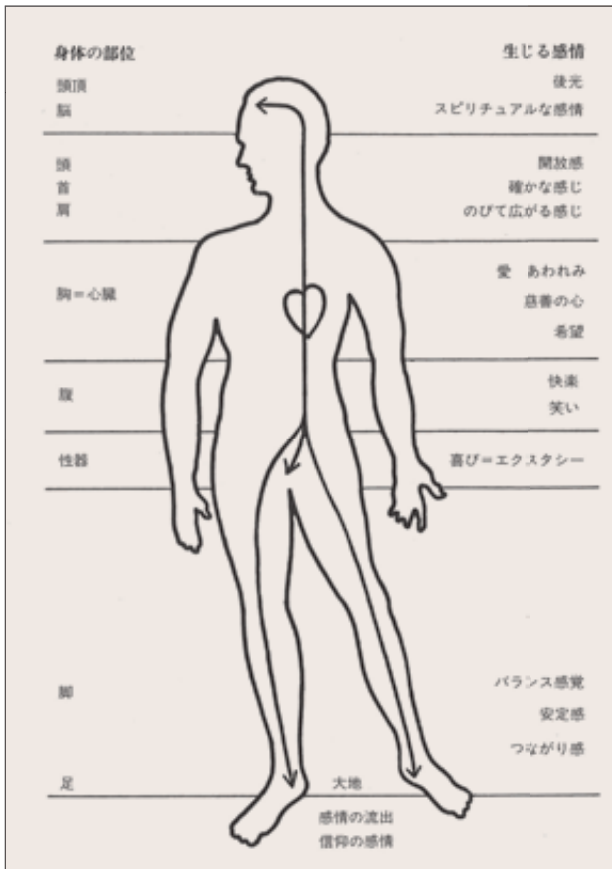


図3 心臓からはじまる感情の流れ（アレクサンダー・ローエン『うつと身体』春秋社、p363より）

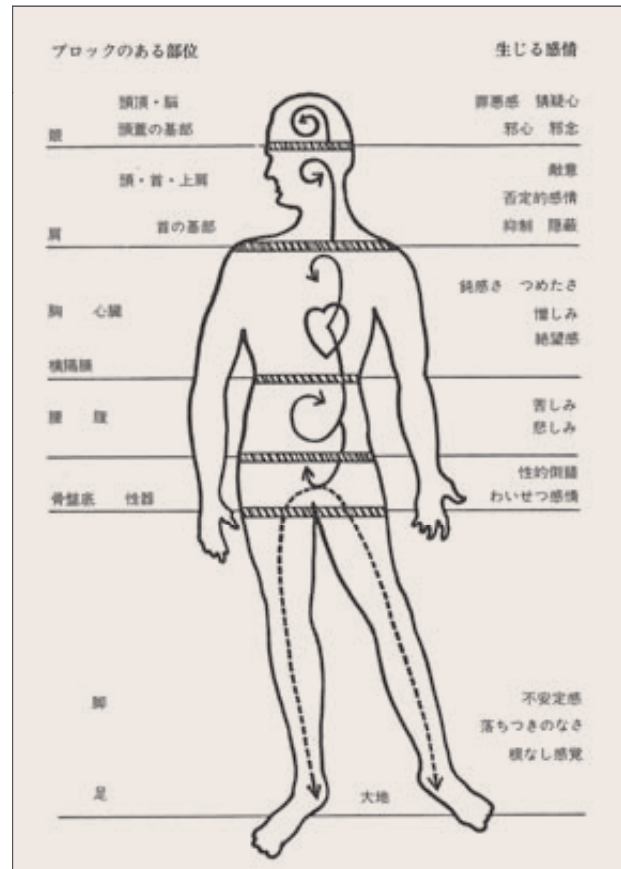


図4 慢性的筋緊張による感情の流れの中断（アレクサンダー・ローエン『うつと身体』春秋社、p 364より）

感情と身体

現在の私たちの社会では、ランダの舞のような儀礼の存在はもはや望むべくもない。たしかにわが国にも負のエネルギーにかかわる伝統的な儀礼や習俗は残っているが、現代社会の進展のなかで多かれ少なかれ形骸化を免れることはできず、負の感情への対応という点では、以前ほどの効力もちあわせていない。負の感情を外部的文化的装置をとおして解消できなくなったため、その対応は個人内部の解決策にゆだねられるようになる。私たちが生きていくうえで、怒り、悲しみ、嘆き、恐れといった負の感情を抱くことは避けがたいが、私たちはそれらを自己のうちで統制しようとするのである。言いかえると、個々の生活環境のなかで、社会の感情規則にもしたがいないながら、感情に対処する身心の仕組みを構築するのである。

感情は身体の内側で感じとられる経験である。感情はいわばエネルギーの高まった状態であり、身体の動きをとおしてその解放を求めてくる。動きをとおして感情が表現されると、それは流れ去ってゆく。しかし、私たちはたいていの場合、感情が身体表現をともなってあらわれることをコントロールしようとする。このとき筋肉を緊張させることで、感情はからだの内側に押しとどめられる。たとえば、悲しみは泣くことで表現されるが、それは眼や口、のど、胸、みぞおち、お腹をふくめた動きのなかで表現される。これに対し、泣くことを押しとどめようとするれば、息をとめ、のどを締めつけ、みぞおちやお腹をかたくしなくてはならない。また怒りは大声や肩から腕にかけての動きで表現されるが、それをとめようとするれば、あごをかたく引き締め、肩を引き、胸を緊張させなくてはならない。

このような点に着目したのは、ウ

ィルヘルム・ライヒであり、ライヒの考えを継いだ人たち、とくにアレクサンダー・ローエンである。感情表現の動きを抑えるには、自分でコントロールのできる随意筋を緊張させなくてはならない。もちろん一時的に感情の表現を抑えても、とくに問題はない。しかし、この抑止がたえずくり返されて習慣化すると、筋肉の緊張が慢性化する。ライヒはこれを筋肉の鎧化と呼んだ。筋肉の鎧化とは、筋緊張の固定化によって感情抑止の仕組みが身体に構造化され、無意識の態勢にまでなったことを意味する。ライヒやローエンは、筋肉の鎧（別名ブロック）ができやすい部位として、眼のまわり、口のまわり、あご、のど、首の裏、肩、腕、胸、みぞおち、腹、腰などをあげている。筋肉の鎧化にともなって呼吸は浅くなる。感情を抑えるには、呼吸を抑えないといけなからである。逆にいえば、深い呼吸をすると感情が喚起される。

筋肉の鎧化は、負の感情に対する個人的な解決策である。しかし、これは決して望ましい解決策ではない。私たちは自分の感情から疎外されることになり、感情を生き生きと感じられなくなる。ここで抑圧されるのは、たんに負の感情だけでなく、喜びや愛情といった感情も同時に抑えられる。その結果、生きている実感もうすれてくる。私たちは、生きるレベルを引き下げることによって負の感情に対処しているのである。感情は外へと向かっていき、世界とのつながりを生み出すものである。それゆえ慢性的な筋緊張があると、世界との生きたかかわりは制限され、表現や行動は不自然なものになる。さらに重要なことに、感情の自由な流れが妨げられることによって、陰湿な気持ちが生まれてくる。憎しみ、敵意、猜疑心、邪心といった暗い感情は、感情への不適切な対応のなかで生じてくる（ローエンがつくった2つの図を見くらべていただきたい）。詳しくはふれないが、ライヒは筋肉の鎧を解消するための治療方法を考案し、ローエンもバイオエナジェティックスと呼ばれる技法を確立している。ライヒ派のアプローチは今日の身体心理療法（ソマティック心理学ともいう）のひとつの主要な流れとなっている。

感情と瞑想

私たちの問題は、筋肉の鎧をまとい感情を感じられなくなり、感情の表現ができなくなっていることである。それゆえ大切なのは、感情があらわれてきたときには、恐れることなくその感情にふれてみることであり、どんな感情であれ、それにとりまなう身体感覚もふくめて、それをありのままに感じとってみることである。感情にふれていくなかで、それはおのずと変化していく。私たちが学ぶべきは、感情を抑えることなく、感情が自然に流れ変容してい



図5 アーチャン光男カウエーサー師とともに

くことを促す方法である。そのさい役立つひとつの方法は、瞑想である。瞑想といってもさまざまであるが、ここでとりあげたいのは、マインドフルネス瞑想あるいはヴィパッサナー瞑想と呼ばれる、気づきの確立をもたらす伝統的な仏教瞑想である。それは今日では有効性が認められ、医療や教育や心理療法など、さまざまな分野に浸透しつつある。

怒りをはじめ負の感情への取り組みは、仏教瞑想のなかでも重視されている。瞑想によって生まれる気づき（パーリ語ではサティという）の空間のなかで、感情の発生から変容・解消にいたる一連のプロセスが細やかに見つめられる。瞑想のなかでは、感情を裁いたり抑えたりすることなく、それがいまここで起こっている、そのあるがままの姿に気づいていく。気づきにとどまり、感情にのみ込まれないようにし、その自然な流れを見つめていく。たとえば、怒りの暗雲がやってきても、雲をなくそうと努力するのではなく、それが流れていくのをながめ、背景にある空とひとつになっているようにする。仏教では、気づきのなかで怒りにくまなく注意を向けていると、怒りのような感情も慈悲へと変化していくという。なぜなら、どんな感情も同じエネルギーが変容したものだからである。ただし、感情に対して気づきを向けるには、日頃から気づきの力を高めていないといけない。

とくに強い感情にはのみ込まれやすいので、瞑想のなかでそれを見つめるという作業は決して容易でない。なお、ティク・ナット・ハンの著書『怒り』には、瞑想による怒りへの対処の仕方が示されている。

タイでの瞑想体験

瞑想のことにふれたので、最後に私の体験を記しておきたい。昨年夏、私はタイでNGOの活動を調べていたのだが、その間にヴィパッサナー瞑想をする機会があった。上座部仏教の国であるタイでは、瞑想人口が多く、瞑想センターのような森の寺が数多くある。森の寺は日本の寺院のイメージからはほど遠く、広い森そのものが瞑想場となっている。私はタイを旅しながら、日本人僧侶アーチャン光男カウエーサー師のスナンタワナラーム寺や、タイを代表する仏教者であったプッタター比丘のスワンモーク寺などを訪れた。カウエーサー師は、高名な瞑想の師であったアーチャン・チャーの弟子にあたる方で、現在はタイでも屈指の瞑想の師として活躍されている。今日（ティク・ナット・ハン師やゴエンカ氏などと並んで）ヴィパッサナー瞑想を世界中に広めているのは、同じアーチャン・チャーのもとで瞑想を学んだ西洋人の弟子たちである。

9月のはじめ、私は知り合いの紹



図6 タイ南部チャイヤにあるスワンモーク寺

介で、タイ東北部にあるソンパナス寺に1週間滞在した。私はふだんから瞑想をしているだけでなく、寺院で瞑想をするのも初めてであった。この寺では住職のプラスリヤ・マハパンヨー師のもとに比較的若い僧が15名程度と女性の修行者が10名程度いて、ほかに在家のタイ人が瞑想をしにやってくる。市民や学生に向けて瞑想コースを開催するときには100人以上の人が参加するそうだが、私たちはコース中の参加ではなかったので、僧たちの日常生活にあわせて瞑想を体験することになった。全体が森につつまれた広い敷地には、体育館のような本堂のほかに、いくつかの施設、僧たちが寝起きする瞑想小屋、外来者の宿舎などが点在し、瞑想用の小道がたくさんつくられていた。住職によれば、廃寺を14年かけて改修したそうで、私たちの滞在中も僧たちが改修工事をつづけていた。

この寺のヴィパッサナー瞑想は、ルアンポー・ティアン師が伝えた動きの瞑想と呼ばれるもので、手を動かす瞑想と、歩く瞑想が中心となっている。日本人僧侶ナラテポー師によれば、この瞑想スタイルはタイでは比較的最近になって広まったものだが、それでも東北部を中心に140以上の寺でおこなわれているという。住職は、ティアン師自身がこの方法を試してわずか数日で苦から解放されたということもあり、この方法がい

ちばん簡単で効果的だと言っていた。

瞑想といえば、静かに坐って呼吸をする瞑想をイメージしていたので、最初は少しとまどった。朝3時半に起床し夜9時半に就寝するまで、起きているあいだは、とにかく動きに気づいているようにする。朝4時から6時まで本堂のホールに坐っているときは、目をあけたまま、15の動きからなる一連の手の動きをおこなう。清掃と食事のあと9時から夕方5時までの瞑想時間にも、手を動かす瞑想か、歩く瞑想だけをおこなう。食事は朝8時の1回だけなので、そのあと夕方まで休み時間はいっさいない。初日は夕方までがとても長く感じられた。外での瞑想がわかり、身の回りのことをしてから、夜の瞑想がホールであり、そのあとすぐに就寝となる。

日中の時間はほとんど歩く瞑想をした。12歩行っってはもどるということ、ひたすらくり返す。歩くスピ

ードは、ゆっくりしたものではなく、ふだんとあまり変わらない。眠気が生じても早足で歩きながら、それがすぎ去るのを待つ。思考や感情もつぎつぎにわいてくるが、歩きながらそれらを見つめるようにする。毎日つづけていると、想念の固まりが外に落ちていくような感じがし、最後には歩いているだけになり、空っぽのような感じになった。

最終日をむかえ、その日も1人で瞑想道を歩いていると、目の前の空間が一瞬ゆれた気がして、その瞬間、胸の奥で何かが炸裂し、その波があたり一面に広がっていった。それと同時に強烈な喜びがからだを貫いて涙があふれてきた。これはしばらくの間つづいたが、まったく予想もしない出来事であった。もちろん仏教では、このような一時的体験にとらわれてはならないのだが、寺を去る時この話を住職にすると、いつもはきびしい住職が「あなたも仏教を学ぶ用意ができましたね」と話してくれた。

参考文献

- 川手鷹彦『「魔女ランダ」への道』、中村雄二郎・木村敏監修『講座生命』vol.5、河合出版、2001年。
 アレクサンダー・ローエン『うつと身体』、国永・中川訳、春秋社、2009年。
 ティク・ナット・ハン『怒り』、岡田訳、サンガ、2011年。
 アーチャン・チャー『手放す生き方』、星飛他訳、サンガ、2011年。
 プラユキ・ナラテポー『「気づきの瞑想」を生きる』、佼成出版社、2009年。



図7 ソンパナス寺の瞑想場

負の感情と倫理

カール・ベッカー（こころの未来研究センター教授）
Carl BECKER

パソコンが思うように動かない。机の上に置いたはずの書類が見当たらない。頭で覚えたはずの情報を思い出せず、身体は思いもよらない痛みを感じ、苦しむ。

日々、物事は思うようにいかないであり、仏教で言う「生老病死悉皆苦也」である。物事がすべて思うようにいけば、そもそも負の感情は生じないのだろうが、思うようにいかないからこそ、怒り、悲しみ、嫉妬などが生じるのである。

先進国の国民が、環境を破壊し、第三世界の労働者を搾取する自分たちの振る舞いに気がつき、恥や悲しみ、同情などを感じる。この場合のように、不平等や不公平に対する怒りや嫉妬、あるいは加害に対する悲しみや恥といった一見「負」と思われる感情は、社会や世界の改善や改革のバネとなり、そのバランスを取り戻す動きを倫理的かつ建設的に後押しする可能性を秘めている。

ただし、それが実現されるためには、現状を自発的に変えようとする姿勢が不可欠である。つまり、自分の行動や社会の不公平を改めようとする意志や運動と結びついてはじめて、怒りや嫉妬、悲しみや恥といった「負」の感情は軽減され、怒りや悲しみを原動力として行動して良かった、という気持ちにもなるのである。

とはいえ、私たちが働きかけることで変わり得る状況と、容易には変わらない状況がある。頭や身体が思うように動かない場合は、学習や訓練、運動などによって改善できる場合も多いが、老病死に対する苦しみや悲しみ、怒りは、その感情を原動力として何かを始めるよりも、現実

をあるがまま受け入れる姿勢の方が賢明と言えよう。

さらに、人間には元来慣れ親しんだことを好む保守的な傾向がある。ましてや支配者側は自分の権力をたやすく譲り渡しはしないので、社会は簡単に変わらない。社会変革が起こりにくい状況下では、市民の怒りや悲しみのような負の感情は建設的に働かず、欲求不満に終わることが多い。また現実を「あるがまま受け入れる」という哲学は、たとえば封建時代の幕府や太平洋戦争以前の日本政府によって、庶民の反乱を抑え、社会を維持するために利用された。そうすると、倫理的な行動や運動につながるはずの負の感情は、行き場を失い、人々に虚無感を残すだけで終わってしまう。また、負の感情を独りで抱え込んだり、場合によっては悪くもない周囲の人に対してもその不満や嫉妬をぶついたりして、お互いの足を引っ張り合うことにもなる。

結局、負の感情に対しては、一定の距離を置いて考える必要がある。まず、負の感情が生じる原因が、老病死や自然現象などであるかどうか

を判断しなければならない。それが原因の場合、訓練や学習などによって自分を高めたり、こころを落ち着かせる瞑想や声明などを実践したりして、その感情を受け入れるようにするのがいいだろう。

負の感情が社会や人間に起因する場合、負の感情を建設的な方向に導いて、周囲や社会をより良くすることができるならば、まさに負の感情は倫理の元と言える。しかし、単なる思いつきで負の原因に対して反発したり怒ったりすると、倫理のバランスを再生するどころか、周囲に新たな負の感情を生むことにもなりかねない。

古来、どの文化でも言われてきたことだが、人は感情に振り回されず、論理的な判断と自習的な訓練に基づいて行動すれば、周囲との衝突を回避し、内面的葛藤を乗り越えることができる。言い換えれば、負の感情をそのまま抱いているとストレスになり、胃潰瘍や心身症、脳梗塞まで引き起こしかねないが、それを冷静に理解して利用することで、より健全な生き方と社会の出発点としるのである。



エッセイ

「幸せ」にまつわること

内田由紀子 (こころの未来研究センター准教授)
Yukiko UCHIDA

空前のブータンブームである。「ブータンといえば？」と聞くと多くの人が「幸せの国」と答えるのではなかろうか。GDPではなくGNH（国民総幸福）の成長を目指す国。昨年12月に開催された「アジア太平洋コンファレンス」会議の基調講演はブータンGNH委員会担当長官カルマ・ツェテム氏によって行われ、多くの聴衆をひきつけていた。とりわけ印象的だったのは講演の中で紹介されたブータンの子供たちの笑顔と祈りに対する姿勢であった。GNHの発想により、祈り・瞑想の時間が教育に組み入れられたことなどが紹介された。ブータンでは幸福を個人の問題として突き放さずに、人々の幸せを支える仕組みをつくることが目指されている。

日本でも2010年より内閣府の幸福度に関する研究会が発足し、筆者も委員として幸福のモノサシ作りの議論に参加している。指標を有効に活用し社会に還元する道筋をさぐるべく、皆真剣に議論を重ねている。震災後の今だからこそ、人々のこころを支える幸せ感を見据える必要があるという思いである。

日本の幸福感は他の先進諸国と比較して低いことが一貫して示されている。幸せは「山のあなたの空遠く……」なのである。この原因には様々なことがあるが、常々思うのは、日本人は比較が好きだということである。メディアで話題になるのも、先進各国に比べて日本の幸せ度が低いという話や、「日本一幸せなまちはどこか」など、比較に基づくものが多い。個々人の幸せの判断も同様であり、「人並みかどうか」が重視される。

「人並み」のような漠然とした比較はまだ良いが、具体的な比較は私たちをあまり気持ちの良い方向には導いてくれない。自分より恵まれた人と比較して鬱々とすることもあるだろう。悪い状況にある人と比べて「私はまだ」と思

うのにしても、決して気分が良いものではない。それでもなお、比較に基づかないと判断が難しい。これが比較による幸福感の難しいところである。

けれども私たちは絶対的な幸せも感じている。ちょうど良い湯加減の露天風呂にはいって「あ～幸せ、いい気持ち！」、美味しい料理を食べて「う～ん美味しい、幸せ！」。こんなふうに「思わず」うなってしまうときの「幸せ」の相対性は低い。

全体的な人生の評価とも言える「幸せ」と、今ここで感じる「幸せ」。前者は認知的で、後者は感情的だ。この2つはある程度かわりあっている。けれども同じではない。感情的に幸せを感じていても、認知的な幸せ判断に結びつけられないことがあるからだ。また、日本では「幸せなときには人は成長できない」「幸せだとねたまれる」というように、幸福感情に浸ることへの警戒心も強い。日本人の幸福度の低さはこうした相対的で認知的なものに比重が置かれている結果によるところが大きい



圓光寺の鐘楼 京都の美しい寺社で幸せを感じることもある

いのか、それとも社会・経済・政治的問題によるものか。こうしたことを解決しなければ、「日本は不幸な国」という考えから抜け出せない。

もう1つ、「幸せは個人が勝手に追求するもの」という考えは、限界を迎えているのではないかという気がする。ブータンのモデルが評価されているのは、個人の主観的な幸せを社会が積極的に支えようという姿勢が表れてきているのではないか。「社会の幸福」という大きなところまでいかなくとも、身近な人たちの幸福を考え、「個の幸福」から脱却することにヒントがあるかもしれない。「協調的幸福」は、震災後に結びつきを見直す人が増えている今だからこそ、必要なのではないだろうか。

ちなみに、「内田さん自身は幸せですか？」と尋ねられたことがある。あらためて、考えさせられる質問だなと思いながら、「幸せです」と回答した。幸せだと答えないと申し訳ないと思ったりする。そういうふうにするのも日本的なのかもしれない。

センター研究報告会2011

—研究報告と指定討論

吉川左紀子 (こころの未来研究センター教授)

Sakiko YOSHIKAWA

長岡千賀 (同研究員)

Chika NAGAOKA

内田由紀子 (同准教授)

Yukiko UCHIDA

山極寿一 (京都大学大学院理学研究科教授)

Jyuichi YAMAGIWA

定藤規弘 (自然科学研究機構生理学研究所教授)

Norihiro SADATO

2011年度のセンター研究報告会のテーマは「絆がつくるこころ」である。センターで行っている連携研究プロジェクトの中から、今回はこのテーマに関連する研究を行っている長岡千賀、内田由紀子、吉川左紀子の3名がそれぞれのプロジェクトの成果について研究報告を行い、人類学、山極寿一理学研究科教授、神経科学の定藤規弘自然科学研究機構生理学研究所教授からコメントをいただいた。長岡の報告のキーワードは「聴く人」、内田のキーワードは「繋ぐ仕組み」、吉川のキーワードは「周囲にある笑顔」である。

センターの研究報告会は、毎年12月に実施しており、研究報告とディスカッション、全研究プロジェクトのポスター発表を行っている。報告会は、ふだん個別に研究を進めている研究プロジェクトの連携研究員が一堂に集い、親しく交流する機会でもある。今回も、研究報告の合間を利用して、稲盛財団記念館3階の会議室に掲示された30を超すポスターの前で、活発な意見交換を行った。

限られた時間ではあるが、年一度のセンター研究報告会は、センターの研究プロジェクトを新たな視点から見直すことのできる、貴重なひとときである。(吉川左紀子)

1 カウンセリング対話における「聴き方」

長岡千賀

対話における「聴くこと」の意味

や、「聴く人の存在」が人のこころを変える力について、実証的に明らかにしたい。このようなチャレンジな目標をかかげ、臨床心理学、認知心理学、社会心理学を専門とする研究者が集まり、カウンセリング対話に焦点を当てて研究を行ってきた。現実のカウンセリング場面にできる限り近い状況設定で対話場면을撮影し、その50分間の対話映像から得られるさまざまな指標(表情と視線、まばたき、発話形式など)を使って「対話の数量化」をするという方法を用いてきた。事例分析ではなく「カウンセリング対話の特徴」に注目して実証科学のアプローチで分析した研究は他にあまり例がない。

「質が高い」カウンセリングと

「質が低い」カウンセリング

カウンセリング対話にはどのような特徴があるだろうか。これを調べるために私たちは、「対話が深まりカウンセリングとして良い感じであった」と評価された事例(高評価事例)と「対話が深まらなかった」と評価された事例(低評価事例)の分析を行った。50分の対話を10分間のユニットに分け、各ユニットにおけるクライアント(相談者)とセラピスト(臨床家)の発話とポーズなどの長さを調べ、ユニット内で、誰がどれだけ話し、どれだけ黙っていたかを求めた。それを時系列の順に並べたのが図1である。この図からわかるのは、まず、高評価事例は、低評価事例よりも、相談者の発話やポーズ

の時間が長いということである。高評価事例では低評価事例に比べて、相談者は沈黙しながらゆっくりと話をし、臨床家はそうした相談者の語りを遮ることなく聴いている。そうした特徴が読み取れる。また、高評価事例の相談者のポーズの割合が、対話開始から約20~30分で最も高いことも大きな特徴である。この時間帯では、約90秒という、日常対話からすると異例の長さのポーズが生じていた。ロジャーズの弟子ジェンドリンによれば、相談者が自らの内面に注意を向け思考を深めるときに、長いポーズが生じる(Gendlin, 1978)。これを踏まえると、相談者が気づきを得るきっかけに出会うのは、カウンセリング対話開始から20~30分間経過してからであると言えよう。

相談者の気づきを支える聴き方

では、相談者の長いポーズが生じたところではどのような局面だったのだろうか。これについて調べるために私たちは、相談者と臨床家に自身のカウンセリング対話の映像を見せ、面接中にどのようなことを感じたり考えたりしていたか、自由に報告してもらった。そうして得られた内観報告から、カウンセリング対話の特徴として2つあげることができる。

第1に、カウンセリング対話は、相談者にとって厳しい対話であり、「悩みをやさしく聴いてもらえる」「悩みの解決を助けてもらえる」といった楽なものではないということである。相談者にとって臨床家は、すぐ

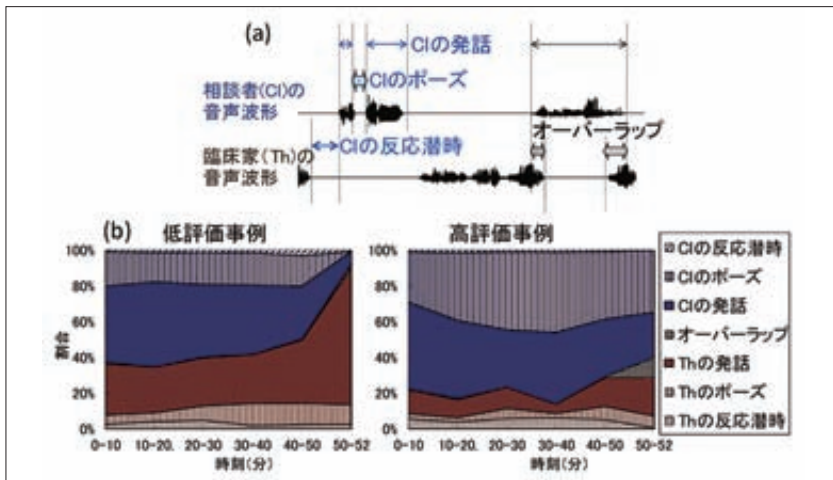


図1 発話と沈黙の時間的構造

(a)発話と沈黙の分析指標：横軸が時間軸で、線がギザギザに上下している部分は発話がなされた部分、それ以外は沈黙の時間である。(b)発話と沈黙の時間的構造：横軸は時間経過、縦軸は各ユニットの長さを100%として各分析指標が占める割合を示す。

にアドバイスを与えてくれる「親切的」他者ではなく、相談者による思考の進展や深まりをじっと待つ動じない他者として存在している。

第2に、相談者と臨床家の信頼関係である。相談者は、臨床家に頼りきりになっているわけではなく、むしろ自分の力で考えようとしており、それと同時に、それを支えてくれる臨床家を信じている。臨床家は、相談者は自身で考えることができるということを信じて、相談者の心の動きに真剣に向き合っている。こうした両者の信頼関係があるからこそ、思考の進展や深まりが生じるのではないだろうか。

今後、さらなる検討により信頼関係形成プロセスを明らかにしたいと考えている。

2 農業コミュニティの社会関係資本：“つなぐ”役割の検証

内田由紀子

この研究は、吉川センター長と、竹村幸祐氏（京都大学経営管理大学院助教）との共同研究であり、近畿農政局、農林水産省、全国農業改良普及職員協議会などの外部からの協力連携が得られることで実現した。そもそもプロジェクトを立ち上げる

きっかけも、近畿農政局の普及課の職員の方が、2007年にセンターを訪ねてこられて、「ここをつなぐということは、実は、私たちが行っている普及の仕事とけっこう関係しているんですよ」とおっしゃったことである。「普及」という仕事について、恥ずかしながら、私たちはそれまで知ることがなかったが、人と人のところをつなぐことを目指す農業社会のコーディネーター的な役割を担おうとしている人たちについて調べてみることに意義があると感じた。

社会心理学的な関心は、「コミュニティにおける社会関係資本は、どのように生成維持されるのか」という問題であり、文化心理学者としての関心は、「日本的な社会関係の形成にかかわるものとは何か」ということである。日本社会の根幹はかなり関係性ベースであるということが指摘されているが、この基礎にあるのは、農業的なコミュニティなのではないか。すると、農業社会における「きずな」である「ソーシャル・キャピタル」がどういふふう形成、維持されているのかを知ることは重要だと感じた。

まず、ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）とは何か。パットナムによる定義は、個人間のつなが

り、すなわち、社会的なネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範、である。実際、コミュニティ内の人間関係やネットワークというのは、1人1人の会員にとっては重要なリソースになる。例えば、だれか頼れる人がいるというだけで、生存確率が高まる。

ただ、ソーシャル・キャピタルが大事だといった議論がある一方で、コミュニティの中でいかにして生成維持されているのかといったことについては、実際のところは明らかではない。そこで私たちは、普及指導員がある種の「ソーシャル・キャピタル生成のプロ」として捉え直し、その役割について検討することにした。

普及指導員とは何かというと、農業者に直に接して、農業技術の指導、経営相談、農業に関する情報提供などを行う、都道府県の職員である。仕事としては、「スペシャリスト機能」と「コーディネート機能」という2つの役割が掲げられている。「スペシャリスト機能」というのは、農業者に対し、地域の特性に応じて、農業に関する高度な技術および当該技術に関する知識の普及指導を行うということである。一方、「コーディネート機能」は、先導的な役割を担う農業者および地域内外の関係機関との連携をとることである。つまり普及指導員の仕事は、技術指導だけではなく、関係機関との連携や共同について促進するコーディネーターとしての機能をあわせ持っている。

そこで2010年に、全国の普及指導員を対象にした調査を行った。調査方法は、インターネット調査、対象は、全国47都道府県の普及指導員7,241名で、約60%の4,355名の方が回答してくれた。

まず、「普及活動を担う人々の特徴は何か」について、尊敬する普及指導員の特徴について回答してもらったところ、他の業種の公務員と比べ

て、他者志向性、チームワーク、視野の広さ、情熱、が特に重視されていることがわかった。

次に、「農村社会の問題解決と暮らしに貢献しやすい普及活動」について、特に難しい課題に直面したときの問題のタイプと実施した支援、そして実際の成果の評価への回答を求めた。実際に地域でよく起こっていた問題は「生産技術」に関するもの、それから、農業者の収益、経営状況などであった。よく実施されている支援は生産技術の紹介と関係機関との連携調整であった。そして、実際に成果を上げやすい支援は、農業者同士の連携や関係機関の連携調整であった。これらはまさにソーシャル・キャピタルの形成に働きかけるような支援活動であると考えられる。

最後に「ソーシャル・キャピタルを向上させている普及指導員の特徴」について。これについては近畿で行った先行調査とあわせて時系列変化を見てみたところ、普及指導員の問題解決能力が高いと、地域の住民の信頼性や信頼感（＝ソーシャル・キャピタル）が高まり、結果的に地域の生活レベルが向上することがわかった。そして、こうした地域のソーシャル・キャピタル向上に関わる普及指導員の特性は、他の関係機関との連携活動能力（例えば、関係するほかの機関にいろいろなことを報告するかどうか）、そして本人の職場の人間関係であることがわかった。つまり普及指導員がうまく他の機関とつながり、その人の職場環境がよければ、担当する地域のソーシャル・キャピタルもよくなるということである。自分の職場の人間関係がうまくいっていると、担当している地域の人たち同士が仲良くなっていくという、少し不思議な連鎖「つながりの連鎖」が起こっているといえる。

普及指導員が持つソーシャル・キャピタル向上のワザを、教育現場、医療現場などに援用し、「つなぎ手」

の役割をもう一度見直すことが重要であろう。

3 こころの調整機能と“きずな”

吉川左紀子

「感情・認知機能におよぼす他者・モノの影響」プロジェクトの成果を報告した。テーマは「笑顔の調整機能」。上田祥行研究員との共同研究である。

これまでの心理学研究から、口角を上げて笑顔の表情をつくると、とくにうれしいことがなくても、その人のうちにポジティブな感情が生まれることが知られている。たとえば、そうした状態で漫画を読むと、口角を上げないときに比べて、おもしろさの評価が上がるのである。このように、自分の行為（表情をつくる、など）で自分のこころの状態を調整することを「自力によるこころの調整」と呼ぶとすると、「他力によるこころの調整」はどんなものだろうか。たとえば、日常生活の中で、まわりにいる人たちがにこにこしているときと、緊張して顔がこわばっているときでは、その中にある自分のこころのはたらきに違いがあるように感じられる。周囲の人が笑顔であれば、そのときに行っている作業の遂行にもポジティブな影響があるのではないだろうか。そこで、「周囲にある笑顔」の効果を実際に調べてみようと考えた。パソコン画面の4隅に顔写真を示し、その顔の表情が笑顔のときとそうでないときで、直後に画面中央付近に提示される、文字の向き判断の遂行成績に、どのような違いがみられるかを調べたのである。

測定したのは、たくさんのL字に混じって提示される横向きのTが、左向きか右向きかを判断するのにかかる時間である。実験の結果、笑顔の顔写真が提示されてから一定時間後に文字画面がでたときに、怒りや

真顔の顔写真が提示されたときよりも、反応時間が速くなることが分かった。周囲に提示する刺激を、顔写真から灰色の四角形やモザイクのような意味のないパターンに変えて同じ課題の反応時間を計測したが、笑顔の顔写真が提示されたときのほうが反応時間が速かった。素朴に考えれば、周囲に単純なパターンが出てきても気にならないが、顔写真がでてきになって、LやTに向ける注意が逸れてしまい、反応が遅くなるのではないかと予想される。しかし実際にはそうならず、笑顔のもつ「他力調整機能」が示されたのである。

この効果が何を表しているのかをさらに検討するために、「おいしそうな食べ物」と「まずそうな食べ物」の写真を使って同じ実験を行ってみたが、「おいしそうな食べ物」による促進効果はなかった。つまり、笑顔の促進効果は、「ポジティブな意味をもつ視覚刺激」によるものではなく、「笑顔の他者」の効果と考えられるのである。さらに、Tの向き判断課題を行っているときの、実験参加者の眼球運動を計測したところ、停留時間の長さや目が動く速度には、条件間で違いがなかったが、笑顔の促進効果がみられた条件では、停留点の数が少ないことが分かってきた。つまり、1度の停留で、より効率的な視覚処理が行われる可能性が示されたといえるだろう。

これまでの心理学研究からは、笑顔のもつさまざまな影響力が明らかになっている。たとえば、笑顔の人の顔は、そうでない人よりも記憶に残りやすいことや、笑顔の人では、顔と名前の連合記憶が促進されることが示されている。また、笑顔の人は、そうでない表情のときよりも、より魅力的であると判断されることも知られている。こうした「笑顔効果」は、笑顔という表情が、他の表情とは質の異なる影響力をもつことを示している。一方、私たちの研究

は、笑顔の「間接効果」を示した点が新しい。当面の課題とは無関係な周囲の人の笑顔が、課題の遂行を促進するという研究結果は、こころのもつ「他力による調整機能」を示しているといえるだろう。

指定討論

心を通じ合わせる技法と能力

山極寿一

聞かせていただいた3題とも、刺激的でとても面白い発表だった。長岡さんは「カウンセリング」と「悩み相談」を対比させてお話をされたが、これら2つは同じ「治す」ことを目標にしているけれど、そのプロセスが微妙に違うことがよくわかった。一言でいえば、カウンセラーは向かい合う姿勢、相談者は隣り合う姿勢を大事にしている。カウンセラーは患者と向かい合って、患者が自分を語る方向へ辛抱強く誘導しようとする。一方、相談者は患者といっしょに何かを見ながら共同作業をしていく。相づちを打ったり、まばたきをしたりしながら、患者本人が考えることより、いっしょに話をすることに注意を払っているように見える。私が気にかかったのは、どちらの姿勢も言葉以外のコミュニケーションが重要な役割を果たしているのではないか、ということだ。それを長岡さんは「無条件の肯定的関心」と呼んでいたが、相手の信頼感をつなぎとめる姿勢やしぐさが重要なのではないだろうか。その技法は、むしろ人間のような言葉を持たないゴリラやチンパンジーから学ぶところが多いように思う。

ワールドカップで優勝した日本の女子サッカーチームは、巧みなチームプレーで個人技に勝る世界の強豪を制した。それは長い時間をかけて、言葉ではなく視線やしぐさで意

図を伝え合う関係を築いたからだ。この、いわゆる「共鳴集団」は、10～15人の規模が限界で、ゴリラの平均集団サイズに匹敵する。内田さんは人間のコミュニティにソーシャル・キャピタルが生成される条件として、他者志向、チームワーク、情熱を挙げておられるが、集団の規模に応じた適切なコミュニケーションを考慮する必要があるように思う。ゴリラと人間が違うのは、ゴリラが1つしか共鳴集団を持たないのに対し、人間はそれぞれ複数の共鳴集団に属していることだ。仲間との信頼を築くには言葉以外のコミュニケーションが必要だが、複数の共鳴集団を保つには言葉が不可欠である。

そういったコミュニケーションとして人間は笑いを多用する。吉川さんの示した笑いは、霊長類にある2つの笑いのルーツ（smileとlaughter）のうち、smileのほうだろう。これは内田さんのおっしゃった「他者志向性」を内包している表情だ。つまり、相手の自分に対する態度を先取りして微笑むので、相手の行動を許容して促進する効果があると思う。人間の関係の作り方は類人猿に比べるとはなはだおせっかいだが、こうした笑いの中にも相手といっしょになるうという気持ちが表れていて、共感（empathy）より同情（sympathy）への志向性が強いと感じた。

課題と期待

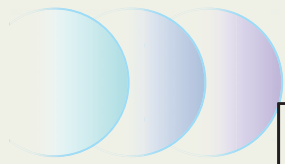
定藤規弘

長岡博士は、傾聴がカウンセリングの核であることを定量的行動解析から導いた。傾聴とsympathy（同情）の関係について論じた。他者の感情状態を追体験でき、それが自分でないことを認知する（視点取得）という共感（empathy）に、援助行動への衝動を伴うと同情が成立し、適切な援助行為としての傾聴につながると考えられる。傾聴は他者視点からの

自己像を得させる点で“鏡”にたとえられる。「カウンセラーにまた会いたい」「仏像に会いたい」というクライアントの述懐は他者視点の投影であろう。傾聴における無条件の肯定的関心に伴う注意深さが、カウンセラーの真剣さを発生させ、これがクライアントの信頼形成に資すると考えられる。一方、視点取得はカウンセラーの感情的巻き込まれを防ぐ点でも重要である。共感、視点取得の神経基盤は明らかになりつつあるが、同情のそれは今後の課題である。

内田准教授は、社会関係資本としての“つなぐ”役割を担うコーディネータが“触媒”として作用していることを示唆した。定藤研究室でのコーディネート機能の実際について問われ、紹介した。(1)ゴール設定、(2)着手点の提示、(3)フィードバックの促進に要約され、カンファレンスなどを含む研究者間の対話の促進を通して、個々の研究者における知的活動の触媒的役割を果たしていると思われる。信頼形成における情動的ならびに認知的判断いずれも実験的アプローチが可能で、その神経基盤については知見が集積しつつある。将来的に社会関係資本形成との関連が解析対象となると素晴らしい。

吉川教授は、肯定感情によってbottom-upの注意機能が促進することを示した。笑顔の視覚探索課題パフォーマンスへの影響は促進的かつ特異的であり、眼球運動の停留回数が減少し、一度の停留でより効率的な処理が起こることを示した定量的行動解析は脳科学研究に直接つながるものであり、今後の展開が大いに期待される。



「こころ学」創生の取り組み

—— 連携研究プロジェクト紹介 ——

京都大学こころの未来研究センターでは、平成19年度～平成21年度にかけて、こころの“個”の側面にかかわる「こころとからだ」、「社会性」の側面にかかわる「こころときずな」、「精神性」の側面にかかわる「こころと生き方」という3領域を設定し、多彩な学際的研究プロジェクトを実施してきました。

これらの成果を受け、平成22年度から、こころの知の探究、実践と社会発信、研究者コミュニティの形成、若手研究者育成の4つの取り組みを軸とする、総合的な新学問領域である「こころ学」の創生を目指しています。

従来の3領域を基盤にしつつ、特に重点的に研究を進めるテーマとして

「こころ観」「負の感情」「発達障害」「きずな形成」「現代の生き方」「自然とからだ」を設定し、脳科学、心理学、宗教学、倫理学、民俗学など異領域をつなぐ学際的な連携研究プロジェクトを推進しています。

連携研究プロジェクトは、こころの未来研究センターのスタッフが主導する「教員提案型連携研究プロジェクト」に加え、外部研究者が主導する「一般公募型連携研究プロジェクト」があります。

いずれにおいても、学内外の研究者、実践家と当センターのスタッフが密接にかかわり、学際的研究を進めています。
(平石 界)



「こころ学」の創生

* 研究プロジェクトは本誌第7号でも紹介しています。

研究プロジェクト一覧

教員提案型連携プロジェクト

大区分	研究課題	プロジェクト代表者
負の感情	自己感情の制御と他者感情の認知の神経機構	船橋新太郎
	負の感情研究 ― 怨霊から嫉妬まで	鎌田東二
	甲状腺疾患における「感情のなさ」について	河合俊雄
	負の感情と生きがい観教育	カール・ベッカー
こころ観	こころ観の思想史的・比較文化論的基礎研究（人類はこころをどのようにとらえてきたか？）	鎌田東二
	こころとモノをつなぐワザの研究	鎌田東二
	メタ認知に関する行動学的および神経科学的研究	船橋新太郎
	現代における自己意識・他者意識の研究	河合俊雄
きずな形成	感情・認知機能におよぼす他者・モノの影響	吉川左紀子
	共感的対話の相互作用性	吉川左紀子
	信頼・愛着の形成とその成熟過程の比較認知研究	森崎礼子
	社会的ネットワークの機能と性質：「つなぐ」役割の検証	内田由紀子
現代の生き方	新人看護師のストレス予防とSOC改善調査	カール・ベッカー
	青年期の社会的適応：ひきこもり・ニートの文化心理学的検討	内田由紀子
	日米における糖尿病患者の心理・社会的側面と療養状況の関連	内田由紀子
	物への依存・人への依存	河合俊雄
自然とからだ	癒し空間の比較研究	鎌田東二
	進化と文化とこころ：生物学的視点と社会的視点からこころを探る	平石 界
発達障害	発達障害への心理療法的アプローチ	河合俊雄
	発達障害と読み書き支援	吉川左紀子
教育	こころ学創生：教育プロジェクト	吉川左紀子
ブログ	こころの研究ニュースの発信：こころ学ブログ	平石 界

一般公募型連携プロジェクト

研究課題	プロジェクト代表者
認知的文化差異の基盤に関する研究：調整型・影響型対人関係の役割	宮本百合（ウィスコンシン大学マディソン校）
利他主義の進化認知科学的基盤	小田 亮（名古屋工業大学大学院工学研究科）
こころと身体をつなぐメディアとしての味覚研究：食の「質」をふまえた食教育の検討	荒牧麻子（女子栄養大学栄養学部）
近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究	秋丸知貴（日本美術新聞社編集局長）
モノと感覚・価値に関する基盤研究	大西宏志（京都造形芸術大学芸術学部）
ミクロ文化事象分析と映像実践を通じたこころの学際的研究 ― 文化と医療誌における映像資料・精神生態関与資料をおもな対象として	宮坂敬造（慶應義塾大学文学部）
「社会的こころ」の多様性の進化的・遺伝的基盤に関する研究 ― 双子児法による	安藤寿康（慶應義塾大学文学部）

自己感情の制御と他者感情の認知の神経機構

船橋新太郎（こころの未来研究センター教授）

■研究の背景

脳の働きとしてさまざまなものを挙げることができるが、人のこころの動きと最も密接に関連していると思われるのが、感情である。感情の制御や認知に関わる脳部位として、前頭連合野腹内側部が知られている。前頭連合野腹内側部は、扁桃体や帯状回から入力を受け、また、前頭連合野外側部とも緊密な機能的関係を持つことから、人の「こころ」の最も重要な部分である感情の表出や制御に関わる重要な脳部位である、と考えられている。この部位に損傷のあるヒトの研究により、乏しい感情表現、極端な感情の変化、自己感情の制御の欠如、共感や同情の欠如、社会性や倫理観の欠如などが報告されている。また、前頭連合野腹内側部は、自己の感情の表現や制御と同時に、他者の感情の認知にも関わる事が知られている。他者の行為の目的や意味の理解に関わるシステムが運動前野や頭頂葉などの運動関連領域で発見され、このシステムはミラーシステムと呼ばれている。感情においても、感情の表現や制御に関わるミラーシステムが脳内に存在し、これにより他者の感情や感情の動きを認知することができると仮定すると、共感や同情などの神経基盤を説明できると考えられる。

■研究の目的

自己の感情を表現する仕組み、自己の感情を制御する仕組みを前頭連合野腹内側部で明らかにすると同時に、この仕組みが同時に他者の感情の理解にも貢献しているかどうかの検討を行う。感情の表現や制御に関わる前頭連合野腹内側部の神経システムの働きをもとに、「こころ」の表現としての感情の神経基盤を明らかにする。

■研究方法

自身の感情の変化や他者感情の理解においては、刺激として呈示した表情や体の動きの文脈依存的な変化が重要な要因となる。そこで、見ることによりさまざまな感情が生成される人を含まない30秒程度の動画と、さまざまな感情表現をしている人を含む30秒程度の動画を用意し、それを実験協力者に呈示して、人を含まない動画を見たときに惹起される感情（A）、人を含む動画を見たときに惹起される感情（B）、ならびに、その動画の中に現れた人の感情（C）を問う。感情Bと感情Cの間に関連があるかどうかを検討し、他者の行動によって推測したその人の感情と同じ感情が、その人の行動を見て自分にも惹起されることを確かめる。これにより、自己の感情を制御・表現する仕組みが、同時に他者の感情の理解にも貢献していることを確かめることができると考えられる。今年度は、研究目的にあった刺激の選択と作成に重点を置き、実施した。

■結果

BBC製作のビデオ“The Blue Planet”および“Planet Earth”の中から、動物のさまざまな行動場面、動物間の闘争場面、摂食場面、自然の風景、植物など、さまざまなシーンを約30秒の長さで560シーン取り出した。これらのシーンは、人が映っておらず、人を含まない動画を見たときに惹起される感情（感情A）の検討に用いる。一方、アメリカ映画7本、日本映画6本を任意に選択し、その中で人がさまざまな表現をしている場面を約30秒の長さで切り出し、200シーンを収集した。これらのシーンの多くには登場人物によるある種の感情表現がなされており、それを見たときに惹起される感情（感情B）

や、登場人物のもつ感情（感情C）の検討が可能であると思われる。ただ、他者の感情理解にしろ、他者の行動により自己に生じる感情には、その前後の文脈の効果が強く反映されることが、シーンの選択にあたって痛感された。切り出した30秒のビデオ・クリップは、今までの多くの研究で使用されてきた静止画や写真に比べると、文脈効果を得られると思われるが、場面によっては登場人物の感情を理解するには短すぎることも考えられる。

次年度は、これらのビデオ・クリップを実験協力者が見たとき、どのような感情が惹起されるかを検討し、感情Aのビデオで明確にある感情が惹起されるシーンを感情ごとに数シーン集めると同時に、登場人物のあるビデオを用いて、感情Bと感情Cの相関の有無を検討する。

参考文献

Funahashi, S. (2011) Brain mechanisms of happiness. *Psychologia*, 54: 222-233.

研究プロジェクト

負の感情研究——怨霊から嫉妬まで

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■「負」の感情の制御

人間の「こころ」のはたらきの中で、特に微妙でやっかいな影響を及ぼすのが、「負」の感情である。

「負」の感情には、怒り、憎しみ、恨み、嫉みなどさまざまあるが、正義感に駆られた怒りを抱くとか、理不尽な振る舞いを憎むとかの感情であるならば、その怒りや憎しみは「負」というよりも、関係性をより良い方向へと是正していく「正」の側面を持つことになるので、その場合、「正」と「負」の関係は一義的・実体的に決定しているとはもちろん言えず、関係的・状況的な相互反転性や両義性を持っている。

とはいえ、これらの感情が「負」となることがあるのは、それらの感情の強い生起が、自己のあり方や他者との関係性に修復困難なダメージを与えたり、暴力的な破壊をもたらすことがあるからである。誰も一度ならず体験したことがあると思うが、破壊衝動を伴うこともあるこうした「負」の感情をコントロールすることは容易ではない。

わたしが「負」の感情研究を始めたのは、「世直し」に對置して「心直し」ということを考えるようになってきたからであるが、その「心直し」において「負の感情の制御」という問題はきわめて重要な課題となってくると思えたからである。

■ 2つの合同研究会

そこで、本研究プロジェクトでは、本年度は、慶應義塾大学との合同研究会として、1つは、お盆の行事と大文字（五山）の送り火の行われる2010年8月15日と16日に『負の感情』とはなにか？——『底つき感』の通文化比較とその手法としての映像』というテーマで、もう1つは、2011年2月21日に『負の感情』の克服への方途——心

理学、宗教学、人類学による東西の文化比較から』というテーマで行った。

前者では、南カリフォルニア大学教授の文化人類学者・映像人類学者のK. G. Heider氏が「ニューギニアおよびインドネシア先住民社会における負の感情と映像人類学」について発表し、それを中心に負の感情の文化的ありかたの共通性と違いについて映像資料も交えつつ検討した。後者では、トロント大学教授の認知心理学者のGerald Cupchik氏が“Under the Gaze of the Buddha: Calming Our Negative Emotions.”と題するプレゼンテーションを行い、これを中心に「負の感情」の克服への方途の文化的共通性と違いについて、トリックスター論や宗教的方途の異同にも焦点を合わせつつ東西文化の比較という視点から論議した。特に、負の感情の克服に例えばトリックスターの笑いが有効に作用する文化的文脈や、仏像の表情の認知と感情の問題、またユダヤ教と神道における〈畏敬〉の感情の比較、負の感情の鎮め方などが議論された。

■「負」の感情の克服に芸術が果たす役割

本研究プロジェクト「負の感情研究」は、副題に「怨霊から嫉妬まで」という副題を付している。それは、中央アフリカのピグミー系狩猟採集民および中央アジアの遊牧民を対象に、これまで「嫉妬」と呪術ないし宗教実践の関係についての報告がほとんどない狩猟採集や遊牧社会における「嫉妬」のあり方について、現代日本を含むより「複雑な」社会体制における「嫉妬」のあり方との比較を念頭に実証的に再検討することを研究計画の1つに据え、これにより得られた仮説を、農耕以後の北東アジアの諸社会における社会怨

霊、崇り、怨念、復讐などの歴史民俗事例に関する文献記述を批判的に見直し、再解釈を行おうと考えたからである。

■和歌、神道祭祀、仏教儀礼、修行

そして、これらのフィールド研究や文献研究で得られた視角や考察を、文学・音楽・演劇・舞踊などに表象されてきた「負」の感情表現に応用して、「負」の感情の克服に芸術が通時代的に果たしてきた役割を解明することを企図した。そこにおいて、とりわけ、「鎮魂の芸能」と言われる能（申楽）の取り扱いが本質的に重要な事例研究となる。

そこで、本年度は能研究を核としつつ、「怨霊」の荒ぶる都／「嫉妬」の渦巻く都・平安京の「負の感情」を浄化する装置・方途・技法としての和歌と神道祭祀と仏教儀礼と修行を考察の対象としていった。具体的には、桓武天皇の実弟・早良親王の「怨霊」鎮めとしての「御霊神社・出雲寺」の創建、菅原道真の「怨霊」鎮めとしての「北野天満宮（北野天神）」の創建、崇徳上皇の「怨霊」鎮めとしての「白峰神宮」の創建、東：青龍、南：朱雀、西：白虎、北：玄武の四つの霊獣に護られた風水都市（四神相応の地）平安京、鬼門の鎮めとしての比叡山延暦寺と赤山禅院、仏教における負の感情の解消方法＝煩惱の消滅＝解脱プログラム＝四諦八正道を検討考察しつつ、それが聖徳太子が策定したとされる「憲法十七条」にどのように反映されているか、などの諸問題について考察を進めつつある。

関連文献

鎌田東二編『平安京のコスモロジー——千年持続首都の秘密』創元社、2010年。

甲状腺疾患における「感情のなさ」について

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■プロジェクトの目的

甲状腺疾患は、古くから心身症の1つとして挙げられ、心理的問題とも関連の深い疾患であると考えられている。本プロジェクトは甲状腺疾患専門病院における心理療法の実践に端を発するもので、これまでに事例検討・調査研究が重ねられるなかで、反省的な感情が生じてきにくいなどの特徴が指摘されている。

こうした指摘をふまえて、本プロジェクトは、2つの心理検査とインタビューから甲状腺疾患患者の心理的特徴を多角的に把握しようとするものである。また、心理的問題から来談に至ることの多い神経症と比較することで、甲状腺疾患の特徴を捉えようと試みた。

■調査の対象者

下の表1のとおりである。

■心理テストによる検討①

NEO-FFI 人格検査

神経症傾向・外向性・開放性・協調性・誠実性の5つの因子からなるNEO-FFI人格検査においては、各甲状腺疾患群（GD, HD, NG）は5次元と

もほぼ標準域にあった一方、神経症群NEは神経症傾向が高く、外向性・誠実性が低かった。自己評定型の質問紙では、神経症の特徴は明らかになったが、甲状腺疾患の特徴は捉えられなかった。

■心理テストによる検討②

バウムテスト

「実のなる木を一本」描くバウムテストは、人格構造を捉えようとする投影法である。

慢性甲状腺炎HD群と結節性甲状腺腫NG群は、樹幹がなかったり、幹や枝先が閉じられていなかったりする木が統計的に有意に描かれることから、内と外のつながりや境界が不明瞭で、自我境界の弱さが示唆された。バセドウ病GD群は、樹冠が描かれるけれども閉じきれなさが目立ち、甲状腺疾患のなかでは神経症水準に近いが、神経症NE群よりも自他の境界に曖昧なところがあり、他者との間で葛藤を感じにくいと考えられた。

意識的レベルで回答される質問紙では、甲状腺疾患群は標準的な反応を示すにもかかわらず、バウムテストでは神経症水準よりも重い特徴が見られ

た。甲状腺疾患群（GD, HD, NG）では、深い問題を抱えていてもそれを捉えて対処する自我が弱く、心理的問題として意識されていないのではないかと考えられた。

■インタビューによる検討

半構造化面接から、身体症状と心理的問題の関連、自分のことをどのように捉えているか、他者との関係、カウンセリングへの関心などが検討された。

統計的な分析に基づく各疾患群の特徴は、表2のようにまとめられた。

神経症NE群と比較して、甲状腺疾患群は主体の意識に乏しく、問題を内的に抱えて扱いにくいと考えられた。

また、受動的ながらカウンセリングに関心を示す者も約29%いたが、実際に来談に至ることは非常に少なかった。甲状腺疾患においても、心理的な援助の必要性や可能性が考えられるが、彼らがカウンセリングへ至るまではかなりの距離があると考えられる。甲状腺疾患患者の問題の捉え方、訴え方、またカウンセリングへのニーズに対応した導入が必要だろう。

表1 調査対象者

疾患群	バセドウ病 (GD)	慢性甲状腺炎 (HD)	結節性甲状腺腫 (NG)	神経症 (NE)
疾患の主徴	甲状腺ホルモンが過剰になる。甲状腺の機能亢進。	甲状腺ホルモンが不足する。甲状腺の機能低下。	甲状腺にしこり(結節)ができる。甲状腺の機能に影響なし。	精神科クリニックにて精神科医に神経症圏と診断された者。
人数 (M, F)	64(12, 52)	38(3, 35)	68(11, 57)	22(6, 16)
平均年齢 (SD)	36.9(10.56)	46.6(12.06)	51.0(11.87)	38.8(14.24)

表2 半構造化面接の結果

GD	<ul style="list-style-type: none"> 症状の自覚があり、3群のなかでは比較的 psychological 次元と身体的次元に近い。 問題を感じていたとしても、それを自己のものとして捉えにくく、自覚がありながら自発的に治療を求めることが少ない。 関係のなかに拠り所を求めているようだが、その関係のあり方が具体的・行動的レベルで表されやすい。
HD	<ul style="list-style-type: none"> 周囲に合わせることで、円滑な人間関係を保とうとする傾向があり、自己概念にもネガティブなものを捉えにくい。
NG	<ul style="list-style-type: none"> 感情に言及されることが少ない。内面に着目しにくく、外的な特徴から自分を捉える。文脈や状況に沿わない語りが展開されるなど、何かを捉える視点が希薄で、対象を内省してそこに留まることが少ない。

研究プロジェクト

負の感情と生きがい観教育

カール・ベッカー（こころの未来研究センター教授）

■イメージや宗教に偏らない

「瞑想」の応用

ストレスは、誰にとっても非常に大きな課題であるが、教職員や看護師のストレスは、並々ならぬレベルに上る。彼らは毎日、さまざまな性格の生徒や患者を相手にし、自己中心的で理不尽な要求を押し付けてくる、言わば「モンスターペアレント」や「モンスター患者・家族」に対しても、笑顔でご機嫌を取らねばならず、これまでにはなかった事態にまで及んできている。さらに教師は、学力のみならず、子どもの集中力やしつけ、人間関係の在り方まで育てねばならなくなってしまう、看護師は看護のみならず、無数の事務処理や事務報告を要求されてしまっている状況である。その結果、学校の教諭が「勤務拒否」まで起こしているケースが目立ち、また若手の看護師の燃え尽きや離職率は社会問題にまでなっている。これらの問題に対して、こころの未来研究センターのプロジェクトの1つとして、京都の伝統に基づく「ストレス軽減法」、即ちイメージや宗教に偏らない「瞑想」の応用を考えて提唱している。

皮肉なことに、瞑想の身体的・精神的効果に関する研究は、それを昔から実践してきた東洋ではなく、むしろ欧米のほうで近年、医学的に研究され始めている。大人の抱えるストレスや、それに基づく疾患を軽減するという証明も現れつつあり、例えば「不可逆」と思われた動脈硬化や心臓病でさえ、瞑想によって緩和できるという目覚ましい報告もある。また、子どものADHDや集中力不足が嘆かれている教室への導入により、子どもがそれまでにはないほどの落ち着き、集中力、記憶力を増してくる、との報告もある。ただし、日本では、その試みは皆無に近い。

■「わく・湧く・ワークショップ」

私たちは当センターで、日常ストレスを感じている、あるいはストレス問題に興味を持つ教職員や看護師を招き、「わく・湧く・ワークショップ」という公開講座を行っている。このワークショップは、イメージ・呼吸・精神統一とストレス関連疾患などとの関係を研究している院生たちの力を借りて、ほぼ2か月に1度のサイクルで開催している。仕事帰りの夕方6時から8時頃まで、瞑想の文化的背景やその理論といった簡単なプレゼンテーションの後に、メディテーションとイメージワーク（呼吸法やイメージ・トレーニング）などのリラクゼーションやストレス低減法を実践している。

終わってから参加者に感想を尋ねるのみならず、心理的・生理的尺度で実践前後の感情やイメージ、ストレス値の変化を測定している。特にストレス値の測定では、市販の唾液αアミラーゼモニターを使用して、唾液中のストレスホルモンのαアミラーゼを測定している。これは参加者からも好評で、「ストレスが数値化されることに興味を持った」という感想が寄せられている。

現時点では有意なレベルのデータは得られていないが、これらの測定で参加者がストレス管理への認識を深めるとともに、ストレス低減法として瞑想を活用していくことに期待している。

■国際シンポジウム「東洋のこころでストレス過多社会を生き抜く」

当センターには、瞑想のような意識トレーニングに造詣の深い諸氏が集まっていた。飛騨高山の千光寺住職、大下大圓師は袈裟掛けで国公立病院に出入りし、末期患者や妊婦の精神支援を行っている。スリランカで修業を重ね、最近では『ケアと対人援助に活かす瞑

想療法』、『癒し癒されるスピリチュアルケア』を著している。また、フィリピンのカトリック系大学で初めて瞑想やヨーガを導入した精神科医のダンテ・シンブラン教授も、2010年8月から4か月間、当センターの客員研究員として在籍していた。この両名と、香港から2人の瞑想の大家を講師に招き、11月28～29日の両日、「東洋のこころでストレス過多社会を生き抜く」と題した国際シンポジウムを開催した。紅葉狩たけなわの週末であったが、両日で参加者は130人を超える盛況ぶりであった。このことから、社会におけるストレス問題への関心の高さが窺える。

国際シンポジウムの発表でも、瞑想によって、心臓や肺の機能が調整され、高血圧や不整脈に対しても有益であることが指摘された。瞑想で喘息や慢性痛、不眠症等も緩和され、脳内のセロトニンやドーパミン、メラトニンなどが増え、免疫力機能も上昇したという報告もある。またトレメラーゼの上昇から、長寿につながることを期待する研究者もいるという。こころの未来研究センターでは、これらの先行研究に基づき、人間の「こころ」を理解しようという学術的な目的に止まらず、実際に慢性的なストレスや疼痛で困っている学校や病院の職員への導入に関して、国内外の前例などを参考にしつつ、これから積極的に研究と応用を進めていこうとしている。

こころ観の思想的・比較文化論的基礎研究 (人類はこころをどのようにとらえてきたか?)

鎌田東二 (こころの未来研究センター教授)

■こころ観の日本思想史

人類が「こころ」をどのようにとらえてきたかを、「こころ観」という括り方で捉えることから本研究プロジェクトは出発した。宗教も哲学思想も科学も、それぞれの「手法」で「こころ」を捉え、それがどのようなものであるのかを「解釈」したり「説明」したりしている。その「解釈」や「説明」のモードやコードを、「思想史」や「文化論」として位置づけてみるというのが本プロジェクトのめざすものである。だからここでは、宗教も哲学思想も科学も特別扱いはしない。そのいずれもが、独自の手付きや手法で「こころ」にアプローチしていると考えからだ。

こうして、さまざまな観点からの多様なアプローチを可能な限り総覧しつつ、「こころ」観の多様性を浮き彫りにしながら、その多様性の中の共通原理に迫っていきたいと思っているが、とりえず、戦略的にも戦力的にも基軸となるのが、「こころ観の日本思想史」というテーマである。この基軸を縦軸にとって、そこから東アジアや諸地域・諸時代の「こころ観」を横軸に、それらとの比較や照合を行っていく。

■こころ観に関する論文

各論的には、すでに、縄文遺跡から見る縄文人のこころ観(たとえば、死と再生、生まれ変わりの観念など)、『古事記』や『日本書紀』『風土記』『古語拾遺』などの神話や古代神道儀礼から見る日本人のこころ観については、論文(「こころの練り方」探究事始めその一、など)や著作(『神と仏の出逢う国』『平安京のコスモロジー』など)にまとめてきている。

また、仏教から見るこころ観についても、仏教瞑想とスピリチュアルケア学専攻の井上ウィマラ氏がこころ観と

ワザ学との相関関係の中で瞑想との関係において論じた(「仏教瞑想の射程とマインドフルネスの応用可能性」)。また、旧約聖書学専攻の手島勲矢氏が「ユダヤ教聖書解釈における〈心〉と〈名前〉と〈顔〉」について、教育人間学専攻の矢野智司氏が「人間の心を生かす他者としての動物——文学作品を通しての動物—人間学のレッスン」について発表し、その要点を表題と論点を少し変えて『こころの未来』第6号に論考として公開している。また、美術史専攻の土田真紀氏が「柳宗悦と民藝におけるワザとこころ」、記録映画『久高オデッセイ』の監督・大重潤一郎氏が「久高島に伝わる海の民のワザとこころ」について発表し、その内容を井上論文とともに『モノ学・感覚価値研究』第5号に掲載した。

■「こころ観」研究を通して浮かび上がった問題

以上のような本年度の「こころ観」研究を通して、問題として浮かび上がったことは、第一に、「心」や「魂」と「息(呼吸)」との関係である。前掲手島氏が論じているように、古代ヘブライ語の「ネフェシュ」も「プシュケー」も語源的に「息」の意味を持っている。これを図式化していえば、「いのち」と「いき」と「こころ」と「たましい」は、多くの古代宗教文化において密接な相関関係を示しているといえる。息が吹き込まれて命という肉体的実体性を持ち、そこに心の働きが生まれ、その心を包含しつつ核ないし内奥に存在するのが魂であるという相関である。

第二に、仏教はそのような「こころ」を呼吸法をベースとした瞑想技法によって探究し制御しようとした。こころのモニタリングやスキャンングを精緻にメタ化した身心変容技法が仏教文化

には芳醇に保持されている。そこで、仏教の研究は「こころ観」研究においても極めて重要な柱となるだろう。

第三に、各論として、矢野氏が提示した「動物」と「人間」との関係の「物語」も、大変示唆に富む視点を提供してくれる。人間がどのように自己理解を進めていったかを考える際に、「動物」という他者理解をどう進め、その相関をどう「物語」ったかは、アニミズム・シャーマニズム・トーテミズムなどの原初宗教とも絡み、また古代からの神話や儀礼や諸種の昔話とも絡んで、人間理解、ひいては人間の「こころ」理解(こころ観)の形成を測るものさしとなるだろう。

第四に、そのような「こころ観」理解の「物語」と「ワザ」の1つとして、柳宗悦の「民藝」運動や沖縄・久高島の民俗儀礼のコスモロジーと諸技法を見ていくことが可能であろう。

関連文献

手島勲矢「名前を付けること——心理学と聖書解釈」『こころの未来』第6号、2011年3月。
矢野智司「人間の心を生かす他者としての動物」『こころの未来』第6号、2011年3月。
土田真紀「柳宗悦におけるワザと自然」、大重潤一郎「久高島に伝わる海の民のワザとこころ」、井上ウィマラ「仏教瞑想の射程とマインドフルネスの応用可能性」、鎌田東二「『こころの練り方』探究事始めその一」(以上、『モノ学・感覚価値研究』第5号、2011年3月)。
鎌田東二『神と仏の出逢う国』角川選書、角川学芸出版、2009年。
鎌田東二編『平安京のコスモロジー——千年持続首都の秘密』創元社、2010年。

研究プロジェクト

こころとモノをつなぐワザの研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■「負」の感情の制御

「心」と「物」を二元対立的に捉えるのはデカルト以来の近現代の常識化した1つの見方であるが、その見方の是非は差し置くとしても、通常、「物」は目に見えるが、「心」は目に見えないものと考えられている。

だが、ここで、「ワザ」という第三項を置いてみると、対立的に見える両者に橋が架かる。

例えば、こころの未来研究センターのある稲盛財団記念館の西側を流れる鴨川に「橋」を架けたいという「思い・イメージ・プラン」を思いついたとする。そのような「思い」を持つのは「心」のはたらきであり、ある動機や意図や感情や思考に基づいて起こる想像力の発露でもあるが、そのイメージを具体化するために、設計技師を集め、図面を引いたり、力学的に橋桁の太さや強度を計算したり、施工の手順や予算を検討したりして、財源を確認し、建築土木業者に発注して、何年かかけて第二荒神橋を作ることになる。

とすれば、わたしたちはさまざまな「ワザ」（土木建築などの諸技術も含む）を通して、「物」の世界に改変を加え、環境世界や人間世界に大きな変化をもたらしてきたということになる。つまり、広い意味での、人間が用いる「ワザ」こそが、目に見えない心と目に見える物をつなぎ、それらを具体的に表現したり改変したりするソフトウェアであるということになるだろう。

■ワザはこころとモノをつなぐ媒介者

本研究プロジェクトでは、あえて、古代日本語に発する「ワザ」という言葉を使いながら研究を進めている。古代日本では神霊を呼び出し、交わり、生命力を高め強化する技法を「ワザワ

ギ」と呼んだ。例えば、『日本書紀』では、「俳優」という漢字を「ワザヲギ」と訓む場合もあれば、「ワザビト」と訓む場合もあり、さらには「伎人」「俳人」「倡人」も「ワザビト」と訓んでいる。いずれにせよ、それらは神楽や舞踊などの古代宗教儀礼に関わる聖なる技法であった。

その「ワザ」は、上記のような諸種の儀礼や芸能から、さまざまな芸術・技術・学芸・ライフスタイルをも包含する。人間はこの「ワザ」の力によって、多様で豊かな文化や文明を形成し、生の充実や社会発展をはかろうとしてきたのである。

こうして、本研究プロジェクトでは、「こころ」に迫る観点として「ワザ」に注目した。「ワザ（技・業・術）」とは、人間が編み出し、伝承し、改変を加えてきたさまざまな技法であり、その技法には、呼吸法や瞑想法などを含む身体技法や各種の芸能・芸術の技法やコミュニケーション技術など、実に多様で豊かな種類がある。このような「ワザ」に着目することにより、人間の心と、人間が作り上げてきた物や道具や観念世界などとの相互関係を具体的に吟味できる。〈ワザはこころとモノをつなぐ媒介者〉であるというのが、本プロジェクトの基本的視座である。

■「手ワザ」領域と「体ワザ」領域

このように、「ワザ」が心と物に相關するソフトウェアであるために、ワザ学研究はこころ観研究やモノ学研究と切り離すことができず、本年度は特にこころ観やモノ学との合同研究会を行った。こころ観の研究プロジェクト報告でも書いた土田真紀氏、大重潤一郎氏などの研究発表はまさに心と「ワザ」の相關に関わる具体事例の発表であった。また、染色家である人間国宝の志

村ふくみ氏による「現代の『工芸』の道」は、柳宗悦が提唱した「民藝」運動から作家として独自の「ワザ」を編み出し、活躍していく過程を率直に表現して大変参考になる。そこに、「民藝」という、「モダン（近代）」を挟み撃ちする志向性を持つプレモダン（前近代）からポストモダン（後近代）を包摂する運動が孕んでいる、もの観・こころ観・わざ観が浮上してくるからである。

「ワザ」は「こころ」と同様に、古語に発し、現在も多様に用いられている広がり多義性を持つ言葉である。柔道では「ワザアリ」という語がそのまま国際判定語になっているが、世界共通語としての「ワザ」の世界を探求し、「ワザ」の本質と意味、またそのヴァリエーション（諸相）を研究することによって、こころと生の豊かさや面白さや楽しさを捉え、それぞれの生活実践に生かし応用することができる。そしてそれが個性と自由を担保したこころ直しと世直しにつながってゆくという志向性のもとで本研究を、まずはモノづくりに関係するような「手ワザ」領域（展覧会「物気色展——物からモノへ」2010年11月21～28日）と、神楽や芸能や呼吸法や瞑想などを含む身心変容技法・ボディワークである「体ワザ」の2つの領域を中心に進めつつある。

関連文献

大石高典「身をほぐし、心をほぐす技術と平和力——出産・武術・狩猟を貫く『生存のためのワザ』を構想する」『モノ学・感覚価値研究』第5号、2011年3月。
奥井遼「憑依と演技の間に——淡路人形座における人形遣いの身体論序説」同上。
海野直宏「新体道のワザと滝行」同上。
鎌田東二「滝行——その日本的身体技法の形成と特色についての一考察」同上。

メタ認知に関する行動学のおよび神経科学的研究

船橋新太郎（こころの未来研究センター教授）

■研究の背景

私たちは、今何をしようとしているのか、何を知っていて何を知らないのか、何が得意で何が不得意か、今何を考えているのかなど、今の自分の「こころ」の状態を知ることができる。自分自身のこころの状態をモニターする働きや、自身が記憶している内容やそれを思い出せるかどうかなど、こころの状態をモニターする働きを総称して「メタ認知」と呼んでいる。こころの状態やこころの働きの検討は言語による内観報告以外に有効な方法がないことから、メタ認知の研究は言語によるコミュニケーションが可能な人でのみ実施できると考えられてきた。

メタ認知の研究では、feeling-of-knowing (FOK) 判断課題がよく用いられる。この課題では、実験協力者に一般的な知識を問うテストを課す。答えのわからない問題については、答えを「知ってる感じ」の強さを問う。ある質問の答えを、今は思い出せないが、知っていることを知っていることがある。あるいは、まったく知らないことを知っていることもある。事柄に関する記憶をモニターしているように思えるが、本当にモニターできていることを確かめるため、直後に多選択肢テストを行う。メタ認知能力があれば、FOKの強い問いは直後のテストで正解する確率が高くなり、弱い問いでは正解する確率が低くなると予想される。人では予想どおりの結果になることから、メタ認知能力を持っていると結論できる。

メタ認知の研究は言語によるコミュニケーションが可能な人でのみ実施できると考えられてきたが、適切な場面を設定すれば動物にも同様の機能をもつものがあることが最近の研究で明らかにされている。動物実験では、時々

難しい問題が現れる記憶課題が使われる。従来の行動課題とは異なり、メタ記憶課題では、テストを受けるか回避するかを動物自身に選択させる。テストを受けて正解すると報酬が得られるが、間違った場合はペナルティーが与えられる。一方、テストを回避した場合は、少量の報酬がある確率で得られる。このようにした場合、動物がメタ認知能力をもっていると、難しい試行でテスト回避の選択が増加すると予想される。また、テスト回避のない強制テスト条件での正答率と、テスト回避を入れた自由選択条件での正答率を比較すると、自由選択条件での正答率が高くなると予想される。この方法を用いて、サルや一部の鳥類はメタ認知能力を示すことが明らかにされている。

■研究の目的

メタ認知機能は自分の「こころ」の状態を認知する仕組みであり、これに直接関わる脳の仕組みを明らかにすることにより、人が自分の「こころ」を理解する手がかりが得られると考えられる。そこで、サルを用いて、メタ認知機能に関わる神経メカニズムを明らかにする。

■研究方法

眼球運動を利用した選択条件つき遅延位置合わせ課題を2頭のサルに学習させ、「テスト回避」条件を含む自由選択条件と、それを含まない強制選択条件での正答率の比較と「テスト回避」選択率の変化を、課題の難易度を変えて検討し、メタ認知を用いて課題を解決していることの確認を行った。CRTモニター中央に呈示される注視点を注視していると、その周辺に視覚刺激が0.5秒間呈示される。サルはその刺激呈示位置を記憶しておかなければなら

い。刺激呈示後、約5秒間の遅延期間に入る。この間も注視点の注視が必要である。遅延期間の終了後、モニターには赤、緑の刺激が呈示される。緑刺激を眼球運動により選択すると、記憶テストを受けなければならない。記憶テストでは、先に呈示された視覚刺激の呈示位置に眼球運動をすると報酬が得られる。間違えると20秒間の休み期間が挿入される。赤刺激を選択するとテスト回避となり、モニターに呈示された刺激に向けて眼球運動をすると30～50%の確率で報酬が得られる。課題の難易度は、遅延期間中に呈示される妨害刺激の数を3段階に変化させることで設定した。

■結果

4頭のサルのうち3頭で、難易度の増加に伴ってテスト回避率が増加した。また、強制テスト条件下での正答率に比べ、自由選択条件下のテストを受けたときの正答率が有意に高くなることが示された。この結果は、ヒト以外のサルや鳥類の一部もメタ認知能力を示すという先行研究の結果を支持する。同時に、これらのサルはこの課題の実行時にメタ認知機能を用いていることから、メタ認知機能に関わる神経基盤を明らかにする研究が可能であることを示している。ヒトを対象にした神経心理学研究や脳機能イメージング研究により、前頭連合野がメタ認知能力と関係のあることが示されている。今回の結果をもとに、これらの動物を用いてメタ認知機能に関わる前頭連合野の神経基盤を明らかにしていく計画である。

研究プロジェクト

現代における自己意識・他者意識の研究

河合俊雄（こころの未来研究センター教授）

■ 問題意識

心理療法は、フロイトの『夢判断』が1900年に出版されたように、19世紀末から20世紀のはじめに成立し、西洋における自己意識や主体の成立を前提にしている。つまり自分で自分のことを見つめるという自己意識のために心理療法の対象となる神経症の問題が引き起こされ、またそれを治療するための心理療法が可能となるという構造になっていた。心理療法が自主的な来談を前提にしているように、主体性があること、自己関係や自分の内面の成立ということは、心理療法にとって欠くべからざる条件であった。

それに対して、日本で心理療法を行おうとすると、自他の分離が曖昧であったり、人間主体だけではなくモノに魂を認めたりするような前近代的な意識が残っているのを考慮する必要がある。それはよい意味では、箱庭療法の普及などにつながってきた。それと同時に、近年においては、解離症状や自傷・犯罪などの行動化する問題、さらには発達障害が増えてきており、それらにおいては、葛藤や自意識の問題というのが認められない。これはある意味で、心理療法というパラダイムそのものを揺るがすほどになっており、近代意識を飛び越えた「ポストモダンの意識」ということが言えると考えられる。

そこで本プロジェクトでは、一方で日本古来の意識やあり方を、主に『遠野物語』の新しい〈読み〉の検討を通じて研究し、他方で近代意識を飛び越えたような意識を、心理療法の実際やそこで生じてくるイメージ、さらには現代の文学作品から探ってきた。

■ 『遠野物語』の新しい〈読み〉

日本古来の意識がどのようなもので

あったかを知り、またそれがどのように新しいあり方の可能性に開かれているかを検討するためサブプロジェクトである「遠野物語の新しい〈読み〉」では、臨床心理学者と赤坂憲雄を中心とする民俗学者と一緒に『遠野物語』を読み、そこから日本古来のあり方や意識を読み取ってきた。

その中では、この世とあの世の境界があいまいであること、動物、山人などの異質の他者に出会う瞬間に境界と意識が成立すること、また古来の意識も、『遠野物語』のいくつかの物語の比較で歴史的な変遷がうかがわれることが明らかになってきた。研究会では、「山」、「ザシキワラシ」、「動物」などにテーマをしばって、それぞれが自分の視点で解釈する研究会も何度か開かれた。たとえば「山」に関して、定点としての「石」と「小屋」に着目されるなどのように、臨床心理学者と民俗学者が意外に同じものに注目することが興味深く、相互の視点の交流によって、考え方を深めることができた。

これらの成果の一部は、既に『東北学研究』などに発表されたが、1つの論集としてまとめる方向で進んでいる。

■ 心理療法の新しい展開

現代の意識の特徴については、連携研究員の田中康裕や岩宮恵子が心理療法においてイメージや内面が扱われることが少なくなってきたこととして報告してきている。それは症状としては、日本人の代表的な神経症であった対人恐怖的な訴えが減少し、解離や発達障害的な様相を呈するものが増えてきていることに現れている。それに対して、心理療法においても、直接的な関わりが求められたり、セラピストとの関係を通じて境界を認識し、主体を確立するような方向が必要となって

きたりしている。

■ 村上春樹と現代の意識

村上春樹の作品には、共同体や親と戦って主体を確立し、自分自身に責任を持つような近代意識をうち立てるといふ課題が意味を持っていて、既にバラバラになって生きているような人間が多く見られる。これはまさに近代意識を飛び越えた「ポストモダンの意識」のあり方を描いているように思われる。たとえば『スプートニクの恋人』に登場する、夏目漱石の『三四郎』の冒頭部分との比較を意識したエピソードが示しているように、近代意識の「禁止」、「個人の人格の連続性」、「葛藤」などがポストモダンの意識には認められず、瞬時につながっては離れるような意識になっている。

『1Q84』は、このような状況についての、物語として個人としての1つの生き方を示唆するものとなっていると考えられた。

参考文献

岩宮恵子『フツの子の思春期』岩波書店、2009年。
河合俊雄『村上春樹の「物語」』新潮社、2011年。

癒し空間の比較研究

鎌田東二（こころの未来研究センター教授）

■「聖地・霊地」の特色とその心的メカニズム

「癒し空間」とは何か？ それは、人にある一定の「安らぎ」や「心地よさ」や「浄化」や「崇高さ」を感じさせる「空間・場所」である。それは、伝統的には「聖地・霊地」ないし「霊場」などと呼ばれてきた。

本研究プロジェクトでは、日本における政治・宗教・文化・観光の中心を成してきた平安京・京都に形成されてきた寺社や聖地などの「癒し空間」を、宗教学・資源学・生態学・民俗学・芸術学・衣食住文化研究・認知科学・認知心理学・臨床心理学などの諸種の方法を用いながら、総合的・多角的に研究を進め、世界各地の癒し空間との比較研究を試み、人に安らぎや崇高さを感じさせる場の特色とその心的メカニズムを突き止めることを企図している。

「癒し空間」の比較研究は、伝統資源（リソース）の再活用や、環境の循環性や、地域の生物多様性や文化多様性などの観点から見ても極めて興味深い事例であり、そこから抽出された特性は現代の心の平安を再検討していく際に多大のサジェスションとヒントを与えてくれる。とすれば、本研究は、人類文明の“安心”“安全”“安定”という「平安」の条件や機能を再検証し、再活用する可能性を示唆できることになるだろう。

本研究プロジェクトでは、研究成果を、京都府や京都市、また諸地域との連携により、シンポジウムやセミナーやワークショップの開催により社会発信していく予定である。

■癒し空間のモデル化

本年度は、主として、京都・奈良および近畿諸地域の寺社や森や琵琶湖水辺、神奈川県および関東地方を中心に

したフィールド研究を行う。具体的には、奈良県吉野郡天川村坪ノ内に鎮座する天河大辨財天社と、神奈川県寒川町に鎮座する「相模国一ノ宮」の寒川神社と、上賀茂神社（賀茂別雷神社）や下鴨神社（賀茂御祖神社）や伏見稲荷大社や比叡山延暦寺や赤山禅院や法然院や本願寺などの京都・平安京の寺社を中心にフィールド研究し、それによって得られた癒し空間のモデル化を図る。その一部はすでに『月刊京都』などで発表している。また、癒し空間が持つ癒しの機能を臨床心理学的に探り、さらに、仏像や樹木や岩などがもたらす心理効果を実験心理学的な手法で探求することも将来的な視野に入れている。

■「生態智」の研究

「癒し空間」の研究は、聖なる場所での人々の「身体知」や、そこに集蔵された「生態智」の研究と密接につながっている。本プロジェクトでは、「生態智（Ecosophia, ecological wisdom）」を「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの知恵」と定義し、それはパワースポットの源流である聖地や癒し空間や古代からのさまざまな生活文化のワザの中に保持されてきていると考えている。

伝統的に「聖地」と呼ばれてきた場所は、「聖なるモノの示現するヌミノーゼ的な体験が引き起こされる場所」であるが、そこには「生態智」と呼ぶほかない知恵と力が宿っているがゆえに、そこで長らく祈りや祭りや籠りや参拝や神事やイニシエーションなどの儀礼や修行（瞑想・滝行・山岳跋涉等）が行われてきた。

■21世紀の「霊性のコモンズ」

そのような場所は、太古の記憶を場所の記憶として蔵した聖なるものの出現地にして、魂を異界へと飛ばし、つなぎ、浄化し、活性化するタマフリ・タマシヅメの力を持つ特別の力と価値のある場所とされた。そこは、人間にとって根源のないのちと美と聖性に関わる宇宙的調和と神話的時間を感じとる場処でもあった。したがって、聖地は、「性地（エロス空間）」にして政地（政治空間）」でもあった。すなわち、生殖を含む生命力を喚起し、活性化するのみならず、人々の念や思いや信仰を集め、情報とエネルギーの集積回路となる「性地」としての特性があるために、そこは政治的な統治や支配にとっても非常に重要な場所、すなわち「政地」となってきたのである。最澄や空海が開いた比叡山や高野山はそのような総合的な神聖空間であったといえる。

本研究プロジェクトでは、そのような「生態智」を深く宿す「聖地」を21世紀の「霊性のコモンズ（公共財）」として捉え直し、それらを伝統文化の再布置化や地域文化再興にトランスレイトする方向性を企図している。

参考文献

- 河合俊雄・鎌田東二『京都「癒しの道」案内』朝日新書、朝日新聞出版、2008年。
 鎌田東二『聖地感覚』角川学芸出版、2008年。
 鎌田東二編『平安京のコスモロジー——千年持続首都の秘密』創元社、2010年。
 鎌田東二編『遠野物語と源氏物語——物語の発生する場所とこころ』創元社、2011年。
 鎌田東二編『日本の聖地文化——寒川神社と相模国の古社』創元社、2012年。

研究プロジェクト

進化と文化とこころ：生物的視点と社会的視点からこころを探る

平石 界（こころの未来研究センター助教）

■目的

古来「人間とは何か」そして「人間のこころとは何か」という問いを追求する営みは、宗教、哲学、文学、政治学、経済学、社会学、心理学、人類学、そして生物学や脳神経科学など、多層的に厚みをもって行われてきた。本研究プロジェクトは、特に「進化」と「文化」という切り口から迫るアプローチを取り上げ、それぞれのアプローチを専門とする研究者間の交流とコミュニケーションを促進することを目的としている。

■プロジェクトの第一の軸：共同講義

本研究プロジェクトは3つの軸によって推進されている。第一の軸は、メンバーらによる共同講義である。2010年度は、京都大学の全学共通科目である「こころの科学入門Ⅰ」で、メンバーの平石と内田に吉川左紀子こころの未来研究センター長を加えた3名で、「理論」「感情」「他者理解」「対人関係と自己」「言語」という共通テーマにたいして、進化心理学、文化心理学、認知心理学の立場から講義を行い、さらに講師と受講生によるディスカッションを行った。

また、より専門的な内容を扱う講義として、総合人間学部の学部特殊講義「こころの科学」も開講した。夏学期は「進化」、冬学期は「文化」を中心テーマに、プロジェクトメンバー全員が参加して講義とディスカッションを行った。2010年度冬学期は、こころの未来研究センター客員准教授であるベス・モーリング氏（米国デラウェア大学・文化心理学）にも担当していただいた。

■プロジェクトの第二の軸：ワークショップ

第二の軸はワークショップの開催で

ある。「第1回進化と文化とこころワークショップ」（2010年8月9日）では、竹澤正哲氏（上智大学）による「制度アプローチから考える文化の維持」と、鳥山理恵氏（トロント大学）による「文化伝達：模倣から社会学習まで」という2つの話題提供を中心に議論した。竹澤氏は、米国南部における「名誉の文化」の例を挙げつつ、文化が特定の社会生態学的条件における合理的な“制度”として説明できることを指摘した（ニスベットとコーエン、2009）。しかし文化は、環境が変化した後も“非合理的”に維持されることがある。こうした文化の“慣性”を理解するには、それが伝達されるプロセスを明らかにする必要がある。鳥山氏は、発達心理学の研究を紹介しつつ、文化伝達において、真似する者（子ども）が、対象者（親など）の行為の意図を理解した上で、まったく同じ行動を取る「真の模倣」が重要であることを指摘した。真の模倣によって文化的知識が累積されることが、チンパンジーなどの文化と、ヒトの文化を大きく隔てるものと考えられる。しかし「真の模倣」は「非合理的な文化の維持」という問題を解決するものではなく、今後の議論がまだ必要とされる。

「第2回進化と文化とこころワークショップ」（2011年3月24日）は、文化の歴史的变化パターンを検証する“文化系統学”を主テーマに、三中信宏氏（農業環境技術研究所／東京大学、生物統計学）による講演「文化系統学と系統樹思考」ならびに、2011年に出版予定の『文化系統学への招待』（中尾央・三中信宏編著、勁草書房）の草稿講読会を行った。現存するさまざまな文化の類似性を比較することで、どの文化とどの文化が歴史的に近接するか、文化の歴史の変遷／過去を再構築



第2回進化と文化とこころワークショップ

するのが文化系統学である。ワークショップでは、こうした手法が文化心理学によるアプローチとどのような親和性を持ち、さらにどのような研究へと発展する可能性があるのか、議論が行われた。

■プロジェクトの第三の軸：講演会の開催

第三の軸は、研究会・講演会の開催である。2010年9月6日には森島陽介氏（チューリヒ大学）を迎え、見知らぬ他者への利他性の個人差と脳活動の関係についての研究を紹介していただいた。11月9日には山田克宜氏（大阪大学）に、社会の平均所得が上昇しても人々の幸福感は必ずしも上昇しないというイースターリンのパラドクスについて、幸福感は他者との比較によって決まるとする立場からの研究を紹介していただいた。

■今後の展望

本研究プロジェクトは2010年度に正式スタートしたが、それ以前から平石と内田は「進化と文化とこころ」のコミュニケーションを図ってきた。今後も継続して互いの領域の最新の知見をぶつけ合う場を作ることで、「こころ」の多層的理解への道を探っていきたい。

こころ学創生：教育プロジェクト

吉川左紀子（こころの未来研究センター教授）

■こころの科学集中レクチャー

2011年3月3日からの3日間、2010年度のこころの科学集中レクチャーが行われた。前年度に続き、2回目の集中レクチャーである。この教育プロジェクトは、文化心理学の北山忍先生（ミシガン大学）にコーディネータをお願いし、「こころのはたらきのもつ不思議さ、おもしろさをより深く理解すること」を目的として実施している。学部1年生からポスドクまで参加資格に制約はないが、受講希望者は、500字ほどの受講理由をつけて申し込むことになっている。講師同士のディスカッションや、講師と受講生のディスカッションの時間がふんだんにあるので、「意欲的で積極的な受講生」の参加を望んでいるためである。

■「こころの謎：文化、社会、感情、脳の密接な関係」

2010年度の集中レクチャーは、前年度のテーマを継続して「こころの謎：文化、社会、感情、脳の密接な関係」。北山先生のほか、認知科学の下條信輔先生（カリフォルニア工科大学）、神経科学の入來篤史先生（理化学研究所）を講師に迎えて実施した。受講生は、48名。レクチャーのスケジュールは3日間共通しており、午前中は10時から90分の講義と60分のディスカッション、午後は2時15分から90分の講義と60分のディスカッションである。昼食時にも議論が続くことを想定して、昼食時間もゆったりとてある。

1日目の講師は下條信輔先生、2日目の講師は入來篤史先生、3日目の講師は北山忍先生。3日間とも、午前と午後の2回のレクチャーに講師全員が出席し、レクチャー後のディスカッションにも参加する。世界をリードする先端の研究者による講義と、それに続

く講師陣のやりとりは、受講生にとって、こころの先端研究の面白さを実感する貴重な3日間となった。以下は、集中レクチャー終了後の、受講生の感想からの抜粋である。

「大学で受ける講義とはまったく違うスタイルで、知的興味を非常に刺激される内容でした。先生がたがお互いの研究内容について激しい議論をされるのを直に体験できたことは私にとって非常に貴重なことでした」

「それぞれバックグラウンドの異なる3人の先生がたによる意見交換は、今後、自身がある心理学的現象を解釈する際に多角的な考え方ができるようになるのに非常に有益だった」

「贅沢なセミナーでした。知識の伝達だけでなく、研究者としての大きな見方を聞くことができ良かったです。先生がたの知識の豊富さと研究に対する姿勢に驚かされました。ひとつの質問に対して、100個くらいの答えが返ってきてる感じでした」

■講義の概要

各講師による講義の概要は下記のとおりである。

・講義1（下條信輔先生）「意識の主観経験と行動：『クオリア』を巡って」

心理物理学、神経科学における最近の知見や現象を足がかりに、クオリア問題が少なくとも部分的には擬制問題であり、解決不能な難問に見えた仕組みそのものも、生物学的／神経科学的／言語学的制約条件から了解可能であることを示す。

・講義2（下條信輔先生）「意思決定のメカニズム～潜在と顕在、受動と能動」

講義の前半では、選好意思決定がそれに先立つ潜在的な行動／神経過程によって決定されていることを示す。後半では、脳内の神経活動の因果関係を

調べた知見に基づき「外からの感覚刺激で直接決定されていれば受動的、脳の内的要因で決定されていれば能動的」という常識的な考えが神経科学の立場からは必ずしも支持され得ないことを示す。

・講義3（入來篤史先生）「創造性の神経生物学的起源」

創造的な芸術作品では、時間・空間・意味・価値などの無数の「次元」が渾然一体と溶け合いながら魅力を放って、観る人の心を惹きつける。この創造的世界が、脳の中でどのように出現するのかを、宇宙・物質・生命・精神の起源と進化という、より大きな文脈の中で俯瞰しながら議論を進める。

・講義4（入來篤史先生）「人間知性の進化の神経生物学」

身体の構造や運動に立脚した象徴概念形成、推論／論理思考などの機能や、これらの機能にもとづいて他主体の意図や主体間相互関係の理解を担う脳内機構などについて、研究事例を紹介しながら、その神経生物学的メカニズムについて考察する。

・講義5（北山忍先生）「進化、文化、心」

進化と文化という大きな時間軸のもとにどのように人間の脳が変化し、いわゆる「文明的生活」が可能になっているのかを考察するための理論的枠組みを提示し、それを関連する実証データで検証する。

・講義6（北山忍先生）「脳の可塑性と社会性」

人は、文化という外的環境に適応（しよう）し、その過程で心理的情報処理システムも、それに介在する脳システムも変容すると考えられる。近年の文化神経科学のデータを中心にこの可能性の妥当性を検討し、脳は当該の文化の影響を受け可塑的に変容し、認知・感情・動機づけといった様々な心理過程を規定することを示す。

研究プロジェクト

モノと感覚・価値に関する基盤研究

大西宏志 (京都造形芸術大学准教授)

■「モノ」の向こう側にあるニュアンス

私たち日本人が「モノ」と言ったときには、「もののけ」、「もののあはれ」、「ものがたり」というように、その「モノ」の向こう側に、何かの存在、他者とのつながりといった、物質以上のニュアンスを感じ取ることができる。2006年度～2009年度、京都大学こころの未来研究センター鎌田東二教授によって、「モノ学の構築——もののあはれから貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する」をテーマとする研究会(モノ学・感覚価値研究会)が発足、運営され、宗教学、美学、比較文化論、認知科学、そして芸術の実践など、領域を越えた活動が行われた。2010年度、本研究プロジェクトでは、この研究会の流れを汲みながら、人間がモノから何かを感じるという性質が何によって実現されているのか、「言葉」という視点から議論を行う研究会と、モノをテーマにした展覧会「物気色」およびシンポジウムを実施した。

■シンポジウム「言葉の感覚・価値——その韻律、質感、視点から」

研究会の主要な発表としては、2010年11月26日「言葉の感覚・価値——その韻律、質感、視点から」と題するシンポジウムを京都大学こころの未来研究センターで行った。本シンポジウムでは、モノのカテゴリ化やその価値の感覚と深く関連する「言葉」をテーマとし、「モノを作る立場」の作家(詩人)と「人間を分析する立場」の感覚や言語の研究者が、人間のモノに対する認識や、感覚・価値における言葉の役割を分野横断的に議論した。具体的には、松井茂氏(東京藝術大学、詩人)には「口ずさめる詩とは何か——声を共有する試み」と題し、意味を明示的には持たない言葉によって書かれた詩、

およびその詩を発声することで生じる個人個人の身体感覚とその記号接地に関する試みについて、また、渡邊淳司研究員(日本学術振興会/NTTコミュニケーション科学基礎研究所)には「オノマトペを利用した触り心地の分類」と題し、触覚のオノマトペとその音声の関係を利用したワークショップについて紹介いただいた。そして、高嶋由布子氏(京都市立芸術大学、認知言語学)には「五感を捉えることばの視点」と題し、五感の知覚動詞の持つ視点の身体性や主観との関連について、鈴木清重氏(立教大学、知覚心理学)には「事象の知覚体制化と映像表現の技法」という題目で、言説や画像系列の組み合わせによって生じる印象の変化について講演いただいた。本シンポジウムによって、言葉が持つ発声の音響的な作用や、視点の操作に関する新たな視座がもたらされた。

■展覧会「物気色」

展覧会「物気色」では、京都市内にある築120年の日本家屋(京都家庭女

学院・虚白院)を会場にして18名の作家が作品を展示。これまで現代美術が扱ってこなかったモノや気配の現出が試みられた。また、鎌田東二教授と河村博重能楽師による能舞「虹鬼伝説」も実施し、日本の古典芸能が持つ生態智を今日的な形で提示した。さらに、こころ観+ワザ学合同研究会として「民藝と物気色アート」と題したシンポジウムを、志村ふくみ氏(染織家、人間国宝)、鞍田崇氏(総合地球環境学研究所)、近藤高弘研究員(造形作家)、武田好史氏(アートプロデュース)、大西宏志研究員(京都造形芸術大学、映像)らによって実施した。志村氏の基調講演では、無我・無名を重視する民藝運動と既に身につけてしまった近代的な自我との葛藤が語られ、続くシンポジウムでは自我の現れとしての近代芸術を乗り越えるものとして、物気色のアートの可能性について討議された。

これらの成果は、新たな研究・実践分野の萌芽となるとともに、既存の研究・実践をより広い視点から相対化することに繋がる。



能舞「虹鬼伝説」シテ:河村博重、音楽:鎌田東二(撮影:佐藤鷹政)

ミクロ文化事象分析と映像実践を通じたこころの学際的研究

宮坂敬造 (慶應義塾大学教授)

■〈こころを写す映像記録〉

本研究では、〈こころを写す映像資料〉および〈精神生態関与資料〉の分析理論を展開しつつ、「相互作用自然事態に現れる〈こころ〉の表現・認知過程把握の手だてとなる、新しい映像手法」の開拓・呈示を目的とした。心的状態に関わる表情、身体所作、言行を映像記録していく場合には、他者との相互作用場面の背景環境に照らしながら映像に定着する作業がまず必要となる。この認識に基づき、本研究では〈こころを写す映像記録〉という新しい概念を設け、こころ研究に役立つ映像系列がもつべき特色を明らかにし、また、そうした学術映像記録の作成条件を検討し、将来行う予定の映像記録制作に役立つ方途とした。

■内部研究会とシンポジウム

そのような映像記録は、ひとまとまりのこころの相互過程、すなわち精神生態単位を最小限一単位含むような映像系列（G・ペイトソンの先行研究を援用拡張）からなっているべきものである。このように考える本研究では、そうした映像系列が組み合わさって感情変化を伴う認知的転位が生じる心的事態に特に注目し、これを「ミクロ文化事象分析」の手法（R・バードウィセルおよびA・シェフレンの先行研究を改訂）と組み合わせて捉える分析方法の開拓を試みた。与えられた予算枠のなかで計2回の内部研究会によってこうした方法論的議論の展開を試み、呪術による病の治療儀礼の調査映像等から怒りや嫉妬等の〈負の感情〉の展開経緯を捉える映像系列事例と参照して検討する方途を討論した。あと2回は、本センター鎌田東二教授主催の「負の感情研究——怨霊から嫉妬まで」との合同開催の機会に恵まれて、シン

ポジウム形式での研究発表を行った。特に、本連携研究代表者が所属する慶大人文グローバルCOE文化人類学班関連の研究会とも呼応し、映像人類学の重鎮であるサウス・カロライナ大学名誉教授カール・ハイダー氏、およびカナダ・トロント大学のジェラルド・カプチック教授の研究発表が本連携研究共催で得られた点で、当初志向した国際レベルでの研究発表にはずみがついた結果となった。

■文化と医療誌に関わる映像

以上が簡略な概要であるが、以下で紙幅の範囲で説明してゆく。

本連携研究で扱う映像記録の内容は、文化と医療誌に関わる映像、すなわち、宗教一医療的場面での憑依の映像記録等の、情意・エトスを表現する映像記録となる。準備的予備研究を前年度に違う題名で実施したが、ここでは、「こころを写す映像記録・表現」の標本抽出的な例となる製作済みの映像記録作品を学術的なものを主として選定、検討評価した（京大関係の蒐集所蔵品も参照し、ロンドンRoyal Anthropological Instituteとドイツ・ゲッティンゲンのIWF研究所所蔵の映像資料等を検討〈宮坂担当〉、ドイツ・Max Plank研究所の動物行動学的映像記録〈大石担当〉）。すなわち、それらの映像資料を、こころを写す系列単位を同定しながら本研究の分析作業枠組みによって分析・検討し、さらに、喜怒哀楽等の生活感情や宗教的憑依等の変性意識や精神症状に関連したこころの状態などを、それがどのような社会的文化的文脈で記録・表現されているのか（たとえば映像人類学での特定の社会でのジェンダー関係の文脈、精神医学的調査や臨床場面での治療者患者関係、トラウマ等の記憶、教育場面における教師

生徒関係など）、その関連に留意して分析整理した。

■〈こころにまつわる精神生態〉

こうした整理をふまえ、本年度は、客観的なこころの状態として映像記録者に捉えられた対象者たちの心的状態を、その所作や行動を通して記録者が映像記録表現する過程を分析する枠組みをさらに精緻化していく作業を進めた。また、映像記録表現者が属する職能集団で伝えられる映像記録表現技法や所与の映像記録機器や技術の変化、現場のわざの運用形態が、その集団や時代・文化によって遷移していく経過にも着目し、「こころを写す映像記録技法」の変遷とそうした映像記録の特色について、50年代から70年代にかけての一部の範囲ではあるが、分析・検討を試みた。

検討の際、ひとつの映像記録作品には複数の系列単位で示される水準とそれらが関連して全体としてあつかうこころの状態という水準がある、という点から出発し、当初は、イメージのインパクトと物語系列から映像系列を捉える認知科学的接近の知見に照らしつつ、ナラティブの理論も参照しながら分析枠組みを整えていった。その過程で、ミクロ文化事象の概念を改訂導入し、〈こころにまつわる精神生態〉という、より深い単位で考察する枠組みを改訂して組み込むことにより、こころを写す映像資料・こころ誌映像資料の的確な把握と分析が可能になる展望をもつに至った。

以上の方法を用いて、アフリカ・カメルーン東部州農耕民の呪術事例（大石・山口担当）、南インドのブータ祭祀とガーナ・アカン族儀礼での憑依事例（石井担当）の映像系列を分析し、冒頭記述のシンポ等での発表に反映させた。

研究プロジェクト

近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究

秋丸知貴（日本美術新聞社編集局長）

■図像解釈学とは何か？

一般に、生物は、それぞれ種に固有の感受器官と反応器官が構成する、固定的な「環境世界」（ヤーコプ・フォン・ユクスキュル）に閉じ込められている。これに対し、本能が壊れた「欠陥生物」（アーノルト・ゲーレン）である人間は、環境「世界内存在」（マルティン・ハイデッガー）であると共に、環境「世界開放性」（マックス・シェーラー）も有している。

エルンスト・カッシーラーは、この世界開放性の鍵を「象徴形式」と見る。つまり、人間は、感受系と反応系の中に象徴系を介在させ、「対象の身替」ではなく「対象の概念のための乗物」（スザンヌ・ランガー）として、抽象的・精神的内容を具体的・感性的形式で表現する、象徴形式を能動的に形成することにより、自然から自由になると同時に自然を制御する。

そして、この象徴形式の中でも、言語的「アイデア」に先行する、図像的「アイコン」（ハーバート・リード）としての造形芸術、特に絵画こそは、最初に外界と内面を調節し、感情と思考を調整し、認識と行為を調律し、環境への適応を可能にする、人間文化の最も基礎的で根源的な象徴形式である。

これを受けて、同一の文化圏におけるさまざまな文化事象との照合を通じて、可視的な具現的・感性的記号の造形と画題に、それを創出した時代・社会に通底する不可視的な心性的・精神的意味内容を解釈する美学・美術史学方法論が、エルヴィン・パノフスキーが開拓した「図像解釈学（イコノロジー）」である。

■近代技術的環境における心性の変容——アウラの凋落

本研究プロジェクトは、この図像解

釈学を近代西洋美術に適用し、その本質的特性である抽象化傾向に、近代技術的環境における心性の変容の反映を考察する。

まず、ヴァルター・ベンヤミンの「アウラ」は、原著に即して分析すれば、同一の時間・空間上に共存する主体と客体の相互作用により相互に生じる変化、及び相互に宿るその時間的全蓄積と読解できる。また、そうしたアウラを典型的に生み出す、主体が客体と同一の時空間上で原物的・直接的・集中的・五感的に相互作用する関係を「アウラの関係」、その場合の主体の客体に対する知覚を「アウラの知覚」と定義できる。

基本的に、生来的身体と天然的自然に基づく「自然的環境」（ジョルジュ・フリードマン）では、技術は肉体の連続的延長であり、動力は天然自然力に依存しているため、人間は環境に物理的に内包され織り込まれていた。したがって一般的に、自然的環境では、人間と外界の関係は密接的で沈潜在的なアウラの関係であり、その知覚は持続的で充実的なアウラの知覚であった。

そして、このアウラの知覚を必須的前提として発達したのが、前近代西洋美術の主流的特徴である、自然主義的なルネサンス的リアリズムである。なぜならば、その特質である緻密で具象的な再現描写には、対象との濃密で没入的な「感情移入」（ヴィルヘルム・ヴォリンガー）的相互関与が経験上不可欠だからである。

これに対し、日常生活のさまざまな場面で、主体と客体の間に「有機的自然の限界からの解放」（ヴェルナー・ゾンバルト）を招く各種の「近代技術」が介入すると、そうした主客の自然な心身の相互交流は現実的に阻害され、主体の「感覚比率」（マーシャル・マク

ルーハン）は捨象的に変更され始める。その結果、「近代技術的環境」では、主体にはアウラの関係が十全に成立していない「脱アウラの関係」による「脱アウラの知覚」が発生することになる。

そして、そうしたアウラの知覚の衰退につれて、徐々に絵画においては、従来の主流であったルネサンス的リアリズムは妥当性を喪失し、新たに動態的・間接的・二次元的・抽象的な近代技術的環境に象徴的に適応する抽象造形が勃興することになる。すなわち、「アウラの凋落」（ヴァルター・ベンヤミン）と近代西洋美術における抽象化傾向は、同時代的な並行現象である。

■抽象絵画と近代技術——こころの未来研究の一事例として

上記の過程は、「ヴァルター・ベンヤミンの『アウラ』概念・『アウラの凋落』概念について」「近代絵画と近代技術」「印象派と大都市群集」「セザンヌと蒸気鉄道」「フォーヴィスムと自動車」「近代絵画と飛行機」「『象徴形式』としてのキュビズム」「近代絵画と近代照明」「近代絵画と写真」「抽象絵画と近代技術」等として主題化できる。

本研究プロジェクトは、2010年から2012年にかけて、これらの個別主題に関して、口頭発表を14件（学会12件、研究会2件）行い、論文発表を学会誌等で14件（査読有り10件、査読無し4件）行った。なお、その内の1件（秋丸知貴「近代絵画と近代技術——近代技術的環境における心性の変容の図像解釈学的研究」『形の科学会誌』第25巻第2号、2010年）により、2011年度形の科学会奨励賞を受賞した。そして、本研究プロジェクトの一部『ポール・セザンヌと蒸気鉄道』により、京都造形芸術大学大学院より2011年度博士学位（学術）を授与された。

こころの未来研究センター滞在記 ～感謝の旅～

ビナイ・ノラサクンキット (日本学術振興会研究員、ミネソタ州立大学心理学部准教授)
Vinai NORASAKKUNKIT

こころの未来研究センターで 新しい研究を展開

私が初めてこころの未来研究センターを訪れたのは、2007年12月、内田由紀子博士（現・こころの未来研究センター准教授）に招かれて日本人の若者の精神的健康に関する講演を行ったときだった。私はそのとき、こころの未来研究センターの学際的で独創的なビジョンを知った。こころの未来研究センターのミッションの中で最も魅力的だったのは、現実社会で今まさに起こっている問題の解決のためにこころや意識に関する研究を拡張していくことを目指し、異なる学問分野の考え方を引きあわせて心理・社会的な問題についての研究を進めていこうとする、その発想だった。

まさにその12月のころ、グローバル化の進展とともに世界で急速に起こりつつある変化を理解する上で、私は自分の専門分野である文化心理学のスタンダードな研究方法に限界を感じ始めていた。私の同僚であり共同研究者であるこころの未来研究センターの内田准教授、そしてセンター長の吉川教授は、グローバル化が日本の若者に与える心理的影響について調べる新たな文化心理学的研究を進めることについて、深く賛同してくれた。こころの未来研究センターの時機を捉えたミッションとビジョンに触れ、私はこころの未来研究センターこそこの新しい研究を進めるのに最も適



2011年春、稲盛財団記念館前の鴨川沿いで花見

した場所だと感じた。

翌年の夏をこころの未来研究センターで過ごすことができるように、2007年のワークショップを終えてすぐに私は日本学術振興会のサマーフェローシップに応募することにしました。そうしたところ、幸運とセンターの全面的サポートのおかげで、フェローシップを獲得するという恩恵を得ることができた。同時に、こころの未来研究センターでも若者の精神的健康についてのプロジェクトが発足し、連携研究員としてそこでの研究費を得ることができるようになった。こうしたサポートのもと、私は2008年の夏をこころの未来研究センターで過ごし、内田准教授とともに日本の中で主流から取り残された若者たちの動機付けに関する研究を行うことができた。さらにその夏の研

究成果が現れ、新たに1年間の滞在が可能になる長期のフェローシップに応募する機会を与えられた。私は再びセンターの全面的支援を受け、ミネソタにある本務校から2年間の研究休暇を与えられ、2009年9月からこころの未来研究センターでの研究に集中することができた。

才能と学術研究を 最大限に発揮させる環境

こころの未来研究センターで過ごしたその2年間の時間は、とにかく実り多く、ワクワクと奮い立たせてくれるものであった。同時に私を謙虚にし、学ぶこと多く、そして非常に刺激的であった。内田准教授とのプロジェクトは多様な研究に発展し、多くの論文・講演・研究発表に

つながったが、それだけではない。それは、内田准教授や吉川教授をはじめとする、こころの未来研究センターを構成する全研究者の偉大な知性（そして同時に全員が持つ誠実さ）と関わることで、そしてそうした人々に囲まれることへの純粹なる畏敬の念であった。そうした人々の多くが、非常に誇らしいことに、今や私の友人なのである。こころの未来研究センターの人々から得た支援、ぬくもり、そして親切は、感謝してもしきれない。また、彼らが常に議論を交わし、互いに建設的なフィードバックを与え合う様子が、私は大好きだった。皆それぞれの専門領域における先端的な研究者たちなので、彼らがどれほど洞察に満ちていようと驚くべきではないのかもしれないが、それでもなお皆が非常に熱心に意見を交わし合っているのを見る度に刺激を受け、感銘を受けた。こころの未来研究センターの事務の方々も信じられないほどに勤勉で、しかも気持ちの良い人たちだった。私はいつも、こころの未来研究センターは人々の才能を、そして学術研究を、最大限に発揮させる環境であると感じていた。

さらに、数えきれないほど多くのカンファレンス、また、世界トップクラスの研究者による招待講演の

数々もセンターの主催で開かれたが、これも特筆に値するものだった。私が論文や本を通じて知り、そして尊敬していた研究者のすべてが、こころの未来研究センターにこぞってやって来て自分たちの仕事について話しているかのようであった。私はそんな人々と話をする機会さえ得た。こうしたことは、こころの未来研究センターにいて自分か「世界の動向の中心」にいてかのように感じさせた。こうした場面で私が得た興奮は、もはや筆舌に尽くし難いものであった。

こうした刺激的な経験に加えて、こころの未来研究センターにいてさらなる「特典」もあった。それは、学会やワークショップへの参加を通じて様々な地を訪問できたことだ。そうした中にはバリ島でのフィールド調査への参加も含まれる。それは非常にエキゾチックかつ学ぶことの多い経験で、そこで見たこと学んだことを私はこの先何年もの間考え続けることになるだろう。



福井県立藤島高等学校での講演
(日本学術振興会サイエンス・ダイアログ事業)

また、こころの未来研究センターから調査に参加した他の研究者たちと知り合うことができたこともとても素晴らしいことだった。私は彼らと友人になれただけでなく、こうした機会がなければ会うこともなかった人々と共同研究を始めることさえできたのである。

いくつもの感謝を

こころの未来研究センターを去ることになったとき、私はいくばくかの悲しみをおぼえた。しかし、私がそのときもっと強く感じ、そしてこの先も間違いなく抱き続けることになる思いは、「感謝」だった。こころの未来研究センターのおかげで私に与えられた機会に感謝を。こころの未来研究センターのおかげで現在の研究ができる自分になれたことに感謝を。新しくできた共同研究のつながりや友情に感謝を。私の目を開かせ、多くを学ばせてくれたすべての経験に感謝を。こころの未来研究センターが私に寄せてくれた信頼に感謝を。2年以上ものあいだ、夢のような街・京都に住むことができたことに感謝を。そして、私に大きな誇りと喜びを与えてくれた研究者コミュニティの一員でいられたことに、感謝を。

(翻訳：竹村幸祐)



鴨川沿いにてサイクリング

吉川左紀子

論文

伊藤美加, 吉川左紀子「表情認知における顔部位の相対的重要性」『人間環境学研究』2011, 9, 89-95.

内田由紀子, 竹村幸祐, 吉川左紀子「農村社会における普及指導員のコーディネート機能」『社会技術研究論文集』2011, 8, 194-203.

野村光江, 布井雅人, 吉川左紀子「表情・音声による複雑な感情メッセージの理解——二者対話刺激を用いた検討」『認知科学』2011, 18, 1-12.

長岡千賀, 小森政嗣, 桑原知子, 吉川左紀子, 大山泰宏, 渡部幹, 畑中千紘「心理臨床初回面接の進行：非言語行動と発話の臨床的意味の分析を通じた予備的研究」『社会言語科学』2011, 14, 188-197.

石田彩夏, 上田裕行, 布井雅人, 吉川左紀子「直接対面はポジティブな表情表出を促進する」『電子情報通信学会技術研究報告』2012, 111 (464), 29-34.

Nakashima, S., Langton, S., & Yoshikawa, S., "The effect of facial expression and gaze direction on memory for unfamiliar faces," *Cognition and Emotion*, in press.

Nomura, M., & Yoshikawa, S., "Gaze and facial expressions when talking about emotional episodes," *Psychologia*, 2011, 54, 15-26.

吉川左紀子「ブータンの日常風景」『科学』2011, 86 (no.6), 524, 岩波書店.

著書

長岡千賀, 吉川左紀子「カウンセリング対話における『聴き方』, 子安増生・杉本均編『幸福感を紡ぐ人間関係と教育』ナカニシヤ出版, 2012年, 100-116頁.

学会発表, ワークショップ等

中嶋智史, 森本裕子, 吉川左紀子「未知顔の記憶における表情, 性別および呈示時間の影響」日本認知心理学会第9回大会(学習院大学, 東京) 2011.5.29.

嶺本和沙, 吉川左紀子「人物への順応が同じ人物の表情認知に与える影響」日本認知心理学会第9回大会(同上).

中嶋智史, 吉川左紀子「未知顔の再認記憶における自尊感情の影響」日本心理学会第75回大会(日本大学, 東京) 2011.9.15.

上田祥行, 吉川左紀子「課題非関連な情動刺激による視覚探索課題中の眼球運動の変化」日本心理学会第75回大会(日本大学, 東京) 2011.9.17.

野口素子, 吉川左紀子「表情表出による情動調整が受け手の表情表出および二者関係に及ぼす影響」日本心理学会第75回大会(同上).

吉川左紀子「実験室の中の“社会性”：表情同調研究から」社会神経科学研究会(生理学研究所, 岡崎市) 2011.10.6.

吉川左紀子「こころの調整機能と“きずな”」こころの未来研究センター研究報告会2011(京都大学稲盛財団記念館中会議室) 2011.12.10.

吉川左紀子「『気遣い』を伝える：看護師—患者間コミュニケーションの研究」京都大学グローバルCOE「心が活きる教育のための国際的拠点」総括シンポジウム(京都大学国際交流ホール) 2011.12.11.

Ueda, Y., & Yoshikawa, S. "Task-Irrelevant Happy Faces Facilitate Processing Speed in Visual Search Task." 23th Association for Psychological Science, Washington, DC., USA. 2011.5.28.

Nunoi, M., Nakashima, S., F., & Yoshikawa, S. "Affective evaluations of objects are influenced by associated face's attractiveness." Association of Social Psychology 16th General meeting, Stockholm, Sweden. 2011.7.14.

Nunoi, M., & Yoshikawa, S. "Do gaze direction and facial attractiveness of others modulate the preference for objects?" International Society for Research on Emotion 2011. (京都ガーデンパレス, 京都市) 2011.7.27.

Minemoto, K., Nakashima, S., & Yoshikawa, S. "Intensity of fearful and sad facial expressions affects our judgment of helping." International Society for Research on Emotion 2011. (京都ガーデンパレス, 京都市) 2011.7.28.

Minemoto, K., & Yoshikawa, S. "Face identity adaptation facilitates the recognition of facial expressions." European Conference on Visual Perception 2011." Toulouse, France. 2011.8.28.

講演

吉川左紀子「ゆっくり話を聴くということ：臨床対話の認知科学」品川セミナー(京都大学品川オフィス, 東京) 2011.7.1.

吉川左紀子「『機嫌のいい職場』をつくる」京都大学専門職員研修(京都大学芝蘭会館山内ホール, 京都市) 2011.11.17.

吉川左紀子「心をつなぐ仕事：2種類の共感力を育てる」京都市教育委員会「親と子のこころの電話」相談員全体研修(京都市アスニー) 2012.1.23.

ラジオ出演

吉川左紀子「顔や表情からみえる“こころ”」FM 京都, Kyoto University Academic Talk. 2011.12.14.

船橋新太郎

論文

Funahashi, S., "Brain mechanisms of happiness," *Psychologia*, 2012, 54, 222-233. in press.

Watanabe, Y., & Funahashi, S., "Thalamic mediodorsal nucleus and working memory," *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*, 2012, 36: 134-142.

Funahashi, S., & Tanaka, A., "Metacognition: a new method for studying the nature of the mind," P. Swanson (ed.) *Brain Science and Kokoro: Asian perspectives on science and religion*, Nanzan Institute for Religion & Culture, 2011, Nagoya, Japan, 51-67.

Andreau, J. M., & Funahashi, S., "Primate prefrontal neurons encode the association of paired visual stimuli during the pair-association task," *Brain and Cognition*, 2011, 76: 58-69.

学会発表

Takebayashi, M., & Funahashi, S. "orbitofrontal neurons encode preference for an intrinsic reward that is produced when artificial visual stimuli are seen." 41st Annual Meeting of Society for Neuroscience (Neuroscience 2011), Washington, DC., 2011.11.13.

Watanabe, K., & Funahashi, S. "Prefrontal neuronal correlates of cognitive capacity limitation and its adaptive allocation revealed by a dual-task paradigm." 41st Annual Meeting of Society for Neuroscience (Neuroscience 2011), Washington, DC., 2011.11.14.

Harish, O., Mochizuki, K., Mongillo, G., Hansel, D., & Funahashi, S. "Patterns of errors in oculomotor delayed-response tasks: a window into working memory role in action selection." 41st Annual Meeting of Society for Neuroscience (Neuroscience 2011), Washington, DC., 2011.11.14.

Tanaka, A., & Funahashi, S. "Neural correlates of explicit memory in the macaque lateral prefrontal cortex." 41st Annual Meeting of Society for Neuroscience (Neuroscience 2011), Washington, DC., 2011.11.14.

Goto, K., Kanazu, M., Yamamoto, H., Sawamoto, N., Fukuyama, H., & Funahashi, S. "Prefrontal activation associated with the top-down signal in memory retrieval." 第34回日本神経科学大会(横浜) 2011.9.15.

Takebayashi, M., & Funahashi, S. "Response patterns of primate orbitofrontal neurons and preference for visual stimuli." 第34回日本神経科学大会 (横浜) 2011.9.16.

Mochizuki, K., & Funahashi, S. "Neuronal activity in the prefrontal cortex during instructed and free choice oculomotor tasks." 第34回日本神経科学大会 (横浜) 2011.9.17.

Takahashi, H., Andreau, J.M., & Funahashi, S. "Behavioral analysis of monkeys performing visual pair-association task." 第34回日本神経科学大会 (同上).

Tanaka, A. & Funahashi, S. "Neural correlates of explicit memory in monkeys performing an oculomotor delayed-response task." 第34回日本神経科学大会 (同上).

Watanabe, K. & Funahashi, S. "Neuronal correlates of cognitive resource allocation revealed by a dual-task paradigm." 第34回日本神経科学大会 (同上).

Watanabe, K. & Funahashi, S. "Prefrontal neural correlates of cognitive capacity limitation and its adaptive allocation revealed by a dual task paradigm." 2011年度包括型脳科学研究推進支援ネットワーク「夏のワークショップ」ポスター発表 2011.8.23.

Takebayashi, M. & Funahashi, S. "Primate orbitofrontal activity represents strength of preference for artificial visual stimuli." International Society for Research on Emotion (ISRE) (Kyoto) 2011.7.28.

Tanaka, A. & Funahashi, S. "Activity of macaque prefrontal neurons during oculomotor delayed-response performance may reflect explicit memory processes." ASSC15 (Kyoto) 2011.6.9-12.

Tanaka, A. & Funahashi, S. "Prefrontal neuronal activity in monkeys performing a metamemory task." Satellite Symposium of ASSC15 on Metacognition 2011.6.8.

カール・ベッカー

論文

カール・ベッカー「日本仏教の現代的役割」『寺門興隆』興山社、2011年3月、50-53.

近藤恵、カール・ベッカー「死の受容」『心理学概論』ナカニシヤ出版 (京都) 2011年3月、229-235.

濁川孝志、大石和夫、カール・ベッカー、飯田史彦「教育とスピリチュアリティ」『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』13号、2011年3月、184-195.

島菌進、カール・ベッカー、高橋義人「生と死のあいだ」『教養のコンツェルト』高橋義人編、人文書館、2011年3月、293-319.

Becker, Carl. "Neuroethics, Bioethics, and Health," Journal of Philosophy and Ethics in Health Care and Medicine. 2011年5月、5-38.

カール・ベッカー「日本の叡智に学ぶストレス軽減法」『日本人にとっての看取りとその意味』ABCラジオ「ちょっといい話」10、2011年8月、62-65、87-90.

カール・ベッカー「死と終末期どう向き合うか」『精神医学史研究』15巻1号、2011年10月、18-28.

カール・ベッカー「生と死を通じて浄土を理解する」、戸松義晴編『寄り添いの死生学』2011年10月、89-129.

カール・ベッカー他「臨死体験であの世を考える」『だから死ぬのは怖くない』週刊朝日ムック65巻、2011年11月、146-150.

カール・ベッカー「医療が癒せない病」、窪寺俊之編『スピリチュアルペインに向き合う』聖学院大学出版会、2011年11月、13-70.

カール・ベッカー「臨床における意味と物語の復権」『仏教看護・ピハラー』6号、2011年11月、11-41.

Carl Becker, "Aging, Dying, and Bereavement in Contemporary Japan," [in Slovenian], Zivljenje, smrt in umiranje v medkulturni perspektivi. Ed. Maja Milcinski. Ljubljana, Slovenia: Razprave Filozofska Fakulteta, 2011, 29-40.

講演

Carl Becker, "Philosophy Implicit in Japan's Value System." 上廣 Cross-Currents 哲学会議 (ハワイ大学) 2011.3.17.

Carl Becker, "Justice and Economics in Globally Responsible Bioethics – One Buddhist Perspective." 東西哲学会議 (ハワイ大学) 2011.5.18.

Carl Becker, "Hospice/End-of-Life Care: Yesterday, Today and Tomorrow." International Conference on Grief & Bereavement (Miami Intercontinental Hotel) 2011.6.23.

Carl Becker, "Cultural Considerations in Dying, Death and Bereavement." International Conference on Grief & Bereavement (Miami Intercontinental Hotel) 2011.6.24.

Carl Becker, "Teaching That Matters: International Death Education." International Conference on Grief & Bereavement (Miami Intercontinental Hotel) 2011.6.25.

カール・ベッカー「死と終末期どう向き合うか」日本ホスピス在宅ケア研究会沖縄大会 (沖縄コンベンションセンター) 2011.7.17.

カール・ベッカー「死別悲嘆に対する日本人の経験智」佛教大学四条センター、2011.7.19.

カール・ベッカー「日本文化と医療」島根大学医学部附属病院主催「事前要望書広報」市民フォーラム (ビッグハート出雲) 2011.7.31.

カール・ベッカー「生と死を見つめ、今を大切に生きるために」人権啓発指導者養成研修会 (ルビノ京都堀川) 2011.8.8. ルビノ京都堀川.

カール・ベッカー「日本人のスピリチュアリティ」スピリチュアルケア協会特別講演、兵庫県看護協会、2011.9.3.

カール・ベッカー「新たな知の統合に向けて」京都大学国際フォーラム (京都大学百周年時計台記念館) 2011.10.15.

カール・ベッカー「『人生の意味』の測定法 Sense of Coherence とその応用」国際統合医療学会 (新宿明治安田生命ホール) 2011.10.22.

カール・ベッカー「日本人の死生観と超越」仏教文化講演会 (龍谷大学アバンティ響都ホール) 2011.12.5.

カール・ベッカー「看護に於ける倫理」京都府看護協会、2011.12.19.

カール・ベッカー「“死”って怖いですか?」第18回日本死の臨床研究会 (和歌山ビッグ愛ホール) 2012.2.19.

河合俊雄

論文

河合俊雄「国際分析心理学会」『心理臨床の広場』2011, Vol.4, No.1, 30頁.

河合俊雄「分析的心理療法をはじめめる前に」『こころの科学』160号、2011, 43-47頁.

河合俊雄「ユング再考：没後50周年を記念して」『こころの科学』161号、2012年1月、6-10頁.

著書

河合俊雄『村上春樹の「物語」：夢テキストとして読み解く』新潮社、2011年.

河合俊雄「心理療法の技法」, 京都大学心理学連合編『心理学概論』ナカニシヤ出版、2011年、325-331頁.

河合俊雄「『遠野物語』における場所とこころの接点」, 鎌田東二編『遠野物語と源氏物語——物語の発生する場所とこころ』創元社、2011年、99-108頁.

翻訳

シャムダサーニ (河合俊雄, 田中康裕, 竹中菜苗, 小木曾由佳訳) 『ユング伝記のフィクションと真相』創元社, 2011年.

その他

山極寿一, 河合俊雄, 宮野素子「暴力の由来」『ユング心理学研究 3』創元社, 2011年, 41-56頁.

河合俊雄「序文」, 畑中千紘『話の聴き方からみた軽度発達障害』創元社, 2011年, i-iii頁.

河合俊雄「解説」, 河合隼雄, 茂木健一郎『こころと脳の対話』新潮文庫, 2011年, 201-207頁.

河合俊雄「ユング『心理学的類型論』解説」ユング (吉村博次訳) 『心理学的類型』中央公論新社, 2012年, 1-19頁.

河合俊雄「ジェイムズ・ヒルマン追悼」『新潮』2012年2月号, 236-237頁.

学会発表

鍛冶まどか, 梅村高太郎, 谷垣紀子, 長谷川千紘, 河合俊雄, 田中美香, 金山由美, 桑原晴子, 深尾篤嗣「甲状腺疾患患者の心理的特徴 (1)」第30回日本心理臨床学会 (九州大学) 2011.9.3.

谷垣紀子, 梅村高太郎, 鍛冶まどか, 長谷川千紘, 河合俊雄, 田中美香, 金山由美, 桑原晴子, 深尾篤嗣「甲状腺疾患患者の心理的特徴 (2)」第30回日本心理臨床学会 (同上).

田中美香, 金山由美, 河合俊雄, 桑原晴子, 窪田純久, 宮内昭「甲状腺専門病院でのカウンセリングを依頼されるパセドウ病患者の特徴について」第54回日本甲状腺学会 (関西医科大学) 2011.11.22.

国際学会・講演

Kawai, T. "The Red Book and pre-modern cultures: The dead and sacrifice." In: C.G. Jung's Red Book in Contexts. Museum Rietberg, Zurich, 2011.3.12. (招待講演)

Kawai, T. "Beyond the subjective happiness." The 9th Global COE International symposium "Happiness," Kyoto University, 2011.10.11.

Kawai, T. "Big story and small stories after traumatic natural disaster: From psychotherapeutic point of view." Hazardous Future Conference. Lisbon, 2011.11.18. (招待講演)

インタビュー

河合俊雄「幻の日記ユング『赤の書』ユングは今、何を伝えるのか」『美術の窓』2011年1月号, 139-146頁.

鎌田東二

論文

鎌田東二「『乱世』と鴨長明と後白河上皇」『月刊京都』2011年4月号, 白川書院, 66~69頁.

鎌田東二「『古事記』と聖地」『現代思想』2011年5月臨時増刊号「総特集 古事記 1300年目の真実」132~141頁, 青土社.

鎌田東二「宗教的身体知と生態智の考察——『滝行』を中心として」『宗教研究』369号, 日本宗教学会, 193~220頁.

鎌田東二「孤独によって孤独を超える——修羅と菩薩を行き来する宮沢賢治の世界」『MOKU』2011年9月号, MOKU出版, 54~61頁.

鎌田東二「神話が人間の生存を支えている」『広告』387号, 博報堂, 2011年9月, 8~13頁.

鎌田東二「『3・11』後の精神史の構築に向けて」『月刊京都』2011年10月号, 白川書院, 68~71頁.

鎌田東二「モノ学と芸術——21世紀の文明に向けて」『比較文明』第27号, 比較文明学会, 2011年11月, 110~113頁.

鎌田東二「無縁と絆と無常」『月刊京都』2011年2月号, 白川書院,

68~71頁.

鎌田東二「神社が語る神々の世界」『歴史読本』2012年2月号, 新人物往来社, 54~59頁.

鎌田東二「神社の起源と聖地の確立」, 歴史読本編集部編『呪術と怨霊の天皇史』新人物往来社, 2012年, 24~42頁.

鎌田東二「出羽三山松例祭の霊性とコスモロジー」『月刊京都』2011年3月号, 白川書院, 68~71頁.

鎌田東二「古史古伝を生み出す構造を解明するフェイクロアを」『古史古伝』と「偽書」の謎を読む』新人物往来社, 2012年, 44~64頁.

鎌田東二「身心変容技法生成の場としての洞窟」『身心変容技法研究』第1号, 京都大学こころの未来研究センター, 2012年3月, 4~14頁.

鎌田東二「こころの練り方探究事始め その二『信心』と『身心』の中世から『性命』と『もののあはれ』の近世へ」『モノ学・感覚価値研究』第6号, 京都大学こころの未来研究センター, 2012年3月, 2~15頁.

鎌田東二「東北の神社と神楽の復興」『宗教と現代がわかる本 2012』平凡社, 2012年3月, 62~67頁.

鎌田東二「スパイラル史観と霊性的想像力」『臨床心理学研究』49巻3号, 日本臨床心理学会, 2012年3月.

鎌田東二「宇宙体験と宗教体験、そして、宇宙研究と宗教研究の間」『宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 研究開発報告 宇宙時代の人間・社会・文化』宇宙航空研究開発機構, 2012年3月, 1~13頁.

著書

鎌田東二「幸の世界観」, 子安増生・杉本均編『幸福感を紡ぐ人間関係と教育』ナカニシヤ出版, 2012年1月, 40~41頁.

鎌田東二『現代神道論——霊性と生態智の探究』春秋社, 2011年11月, 1~254頁.

鎌田東二編著『遠野物語と源氏物語——物語の発生する場所とところ』創元社, 2011年12月, 1~209頁.

鎌田東二編著『日本の聖地文化——寒川神社と相模国の古社』創元社, 2012年3月, 1~274頁.

玄侑宗久・鎌田東二『原子力と宗教』角川ONEテーマ新書, 角川学芸出版, 2012年3月, 1~256頁.

対談

鎌田東二・安藤礼二「神話を生きなおす—古事記が語るもの」, 『現代思想』2011年5月臨時増刊号「総特集 古事記 1300年目の真実」青土社, 102~123頁.

テレビ出演

鎌田東二「名著100分 銀河鉄道の夜第4回 ほんとうの幸い」特別ゲスト出演, NHK・Eテレ, 2011年12月28日22時~22時25分.

鎌田東二「3・11その後 ふるさとの祭りはいま」, NHK・Eテレ, 2012年3月18日15時~15時50分.

内田由紀子

論文

Wilken B., Miyamoto Y., & Uchida Y., "Cultural influences on preference consistency: Consistency at the individual and collective levels," Journal of Consumer Psychology, 2011, 21, 346-353.

Bastian B., Kuppens P., Hornsey M. J., Park J., Koval P., & Uchida Y., "Feeling bad about being sad: The role of social expectancies in amplifying negative mood," Emotion, 2011 online.

Toivonen T., Norasakkunkit V., & Uchida Y., "Unable to conform, unwilling to rebel? Youth, culture and motivation in globalizing Japan," Frontiers in

Cultural Psychology, 2011, 2, online.

内田由紀子「日本文化における幸福感——東日本大震災後の復興を支える心理と社会システム」『計画行政』2011, 34, 11-26.

内田由紀子, 高橋義明, 川原健太郎「東日本大震災直後の若年層の生活行動及び幸福度に対する影響」『内閣府経済社会総合研究所ワーキングペーパー』2011年12月.

Norasakkunkit V., & Uchida Y., "Psychological consequences of post-industrial anomie on self and motivation among Japanese youth," *Journal of Social Issue*, 2011, 67, 774-786.

内田由紀子, 竹村幸祐「普及指導員の行動に関する研究調査：地域ネットワークを支える普及活動」『技術と普及』2012年2月号, 20-31.

内田由紀子, 遠藤由美, 柴内康文「人間関係のスタイルと幸福感：つきあいの数と質からの検討」『実験社会心理学研究』(印刷中).

Norasakkunkit V., Kitayama S., & Uchida Y., "Social anxiety and holistic cognition: Self-focused social anxiety in the United States and Other-focused social anxiety in Japan," *Journal of Cross-Cultural Psychology*, in press.

内田由紀子, 荻原祐二「文化的幸福観：文化心理学的知見と将来への展望」『心理学評論』(印刷中).

著書

内田由紀子「北山忍の文化的自己観」, 梶田毅一, 溝上慎一編『自己の心理学を学ぶ人のために』世界思想社, 2012年, 25-40頁.

内田由紀子, 今田俊恵「文化：比較文化研究と文化心理学」, 大山正監修, 岡隆編『心理学研究法5 社会心理』, 誠信書房, 2012年, 286-312頁.

報告書

内閣府 幸福度に関する研究会委員「幸福度に関する研究会報告——幸福度指標試案」2011年12月.

内田由紀子, 竹村幸祐, 吉川左紀子「農村社会における普及指導員の『つなぐ』役割に関する調査研究：社会関係資本と普及活動」2012年2月.

学会発表

Uchida, Y. "Emotions as within or between people?: Cultural variation in subjective well-being, emotion expression, and emotion inference." Plenary meeting of the International Society for Research on Emotion. Kyoto. 2011.7.26.

Hitokoto H., Uchida Y., & Kitayama S. "Interdependent happiness: Meaning of happiness in Japanese cultural context." Plenary meeting of the International Society for Research on Emotion. Kyoto. 2011.7.26.

Yano Y., Frentrup S., Morling B., & Uchida Y. "Will you help me? Cultural differences in feelings of obligation and choice in social support situations." Plenary meeting of the International Society for Research on Emotion. Kyoto. 2011.7.26.

内田由紀子, 竹村幸祐「コミュニティにおける社会関係資本：社会的絆の生成と維持」日本心理学会第75回大会（日本大学文理学部, 東京）2011.9.17.

内田由紀子, 上野泰治「検索誘導性忘却を用いた自己・他者概念の比較文化的検証」日本社会心理学会第52回大会（名古屋大学, 名古屋市）2011.9.18.

荻原祐二, 内田由紀子, 楠見孝「友人関係における影響行動・調整行動の認知」社会心理学会第52回大会（名古屋大学, 名古屋市）2011.9.19.

Yano, Y., & Uchida, Y. "How marginalized Japanese recognize emotion in facial expression? The case of social withdrawal spectrum." *Cultural Psychology Preconference*, The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and

Social Psychology, San Diego, USA. 2012.1.26.

Norasakkunkit, V., & Uchida Y., "Mainstream Japanese Conform While Marginalize Japanese Comply: Divergent Motives for Compliance in Post-Industrial Japan." The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, USA. 2012.1.26.

Endo, Y., & Uchida, Y. "The role of online interpersonal relationships in face-to-face interpersonal relationships and psychological well-being in young adults." The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, USA. 2012.1.27.

Ogihara, Y., & Uchida, Y. "Does personal achievement orientation have negative effect for Japanese? Cultural analysis of personal achievement versus relationships orientation." The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, USA. 2012.1.28.

Norasakkunkit, V., & Uchida Y. "Does personal achievement orientation have negative effect for Japanese? Cultural analysis of personal achievement versus relationships orientation." The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, USA. 2012.1.28.

Morling, B., Uchida, Y., Frentrup, S., & Yano, Y. "Helped, but not helpless: How Americans and Japanese construct social support situations." The 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, San Diego, USA. 2012.1.28.

講演

Uchida, Y., "Emotions as within or between people?: Cultural variation in emotion and subjective well-being." *Accommodating culture into psychological research: A forum of cultural and cross-cultural psychologists*, Kwansai Gakuin University, 2011. 6.25.

内田由紀子「文化と幸福感：幸福度指標についての考察」東北活性化研究センター, 幸福度の定量化に関する調査研究会（仙台市）2011.9.27.

Uchida, Y., & Norasakkunkit, V. "NEET and Hikikomori spectrum in Japan: A cultural psychological perspective." *France-Japan Cross-Cultural Perspectives on Social Withdrawal (Hikikomori)*, Kyoto, 2011.10.31.

内田由紀子, 竹村幸祐「普及指導員の行動に関する調査研究：地域ネットワークを支える普及活動」平成23年全国普及活動研究大会記念講演（東京大学）2011.11.16.

Uchida, Y., "Meanings of happiness in cross-cultural comparison," In *Happiness - Does culture matter?*, Berlin, Germany, 2011.11.21.

Uchida, Y., "Happiness before and after a severe nation-wide disaster: The case of the Great East Japan Earthquake," In *Happiness - Does culture matter?*, Berlin, Germany, 2011.11.21.

Uchida, Y., "Happiness before and after a severe nation-wide disaster: The case of the Great East Japan Earthquake," In *Asia-Pacific Conference on Measuring Well-being and Fostering the Progress of Societies*, Tokyo, 2011.12.5.

内田由紀子「農業地域を支える営農指導活動とは」平成23年度JA福井営農指導員全体研修会（福井県あわら市）2011.12.7.

内田由紀子「農業コミュニティの社会関係資本：“つなぐ”役割の検証」京都大学こころの未来研究センター研究報告会 2011.2011.12.10.

内田由紀子「日本の幸福のあり方と幸福度指標」第12回京都大学地球環境フォーラム, 2012.2.4.

内田由紀子「日本の幸福度指標：文化的幸福観からの考察」ハピネス特別委員会第7回, 京都経済同友会, 2012.2.21.

内田由紀子「北山忍の文化的自己観」第60回自己意識研究会企画, 出版記念「自己論」連続セミナー, 2012.2.22.

ワークショップ企画・指定討論

Uchida, Y., "Workshop on Culture, Self, and Social Relationships," Kyoto University, 2011.6.28.

内田由紀子「『扉のむこう』上映会～ひきこもりに迫る」京都大学こころの未来研究センター, 2011.5.31.

テレビ出演・新聞等掲載

内田由紀子「普及指導員の資質向上 職場内教育が重要 京大が全国調査」『日本農業新聞』2011年5月25日.

内田由紀子「あなたはどのくらい幸せ? ～幸福度指標作りの模索～」『クローズアップ現代』NHK, 2011年6月2日放送.

内田由紀子「震災で変わる若者の人生観, 幸福度」『京都新聞』2011年9月21日.

内田由紀子「幸せ度 北海道なぜ43位」『北海道新聞』2011年11月16日.

内田由紀子「発言小町大賞 2011 ラジオ童話の作品名探し 被災地の母へ励まし広がる」『読売新聞』2012年12月18日.

内田由紀子「ニート・ひきこもり傾向の若者 失敗後, やる気失いがち」『京都新聞』2012年12月27日.

内田由紀子「ニートにあきらめ傾向強く: 京大など大学生で調査」『高知新聞』2012年12月27日.

内田由紀子「いま, あなたは幸せですか? ～大震災『以後』の生き方を考える～」『週刊朝日』2012年1月6日/13日号, 18-21頁.

内田由紀子「ニート・引きこもり: 『あきらめやすい』傾向大 失敗時に意欲喪失 米と京大の准教授研究発表」『毎日新聞』2012年1月10日.

内田由紀子「結びつき求める若者 社会の福音」『毎日新聞』リアル30's, 2012年1月18日.

社会活動

内田由紀子「内閣府 幸福度に関する研究会委員」(内閣府, 東京都).

平石界

論文

Hiraishi, K., Sasaki, S., Shikishima, C. & Ando, J. "The Second to Fourth Digit Ratio (2D: 4D) in a Japanese Twin Sample: Heritability, Prenatal Hormone Transfer, and Association with Sexual Orientation," Archives of Sexual Behavior, 2012, online first publication.

Niwa, Y., Hiraishi, K., & Oda, R. "A mirror has no effect on dictator game giving," Letters on Evolutionary Behavioral Science, 2011, 2, 16-19.

小田亮, 山内新作, 永縄拓也, 平石界, 松本晶子「利他性の進化認知科学的研究のための尺度の研究」『観光科学』, 2011, 3, 23-33.

Oda, R., Hiraishi, K., Fukukawa, Y. & Matsumoto-Oda, A. "Human Prosociality in Altruism Niche," Journal of Evolutionary Psychology, 2011, 9, 283-293.

中村敏健・守谷順・平石界・長谷川寿一「ドットプローブ課題を用いた BIS / BAS 尺度日本語版の構成概念妥当性の検討」『パーソナリティ研究』2011, 19, 278-280.

中村敏健, 平石界, 小田亮, 齋藤慈子, 坂口菊恵, 五百部裕, 清成透子, 武田美亜, 長谷川寿一「マキャベリアニズム尺度日本語版の作成とその信頼性・妥当性の検定」『パーソナリティ研究』(印刷中).

著書

平石界「生物・進化理論との関係で見た研究法」, 発達心理学会編『発達科学ハンドブック 第2巻 研究法と尺度』, 新曜社, 2011年, 244-265頁.

平石界「人間行動への進化的視点」, 唐沢穰, 村本由紀子編著『展望・

現代の社会心理学 第3巻 社会と個人のダイナミクス』誠信書房, 2011年.

学会発表, ワークショップ等

Hiraishi, K., Shikishima, C., Yamagata, S., Takahashi, Y., & Ando, J. "Heritability of Decisions and Outcomes on Public Goods Games," Human Behavior and Evolution Society 23th Annual Conference, France, Montpellier, June, 2011.

Hiraishi, K. "Inference from a Social Brain Point of view," 日本心理学会第75回大会ワークショップ(日本大学) 2011.9.15.

平石界, 佐々木掌子, 敷島千鶴, 安藤寿康「指比(2D:4D)の双生児データ分析: 遺伝率, 出生前ホルモン移動, 性的指向との関係」日本心理学会第75回大会(日本大学) 2011.9.16.

齋藤慈子, 中村敏健, 平石界, 長谷川寿一「ネコ好きとイヌ好きでパーソナリティは異なるか(2)」日本心理学会第75回大会(日本大学), 2011.9.17.

中村敏健, 平石界「サイコパシー傾向と利他行動の関係」日本社会心理学会第52回大会(名古屋大学) 2011.9.18.

Hiraishi, K. "Reasoning from two biological points of view: Evolutionary psychology and behavioral genetics," Lancaster-Kyoto Joint International Symposium: Towards an empirical understanding of cultural, social and evolutionary perspectives in psychological science, Lancaster University, UK, 2011.11.24.

丹羽雄輝, 平石界, 小田亮「鏡は人を利他的にするのか: テイキング型独裁者ゲームによる検討」第4回日本人間行動進化学会(北海道大学) 2011.11.19.

瀧本裕太, 小田亮, 平石界「最後通牒か独裁か, それが問題だ」第4回日本人間行動進化学会(同上).

古田大貴, 平石界, 小田亮「利他行動に及ぼす目の効果: 視線の違いによる検討」第4回日本人間行動進化学会(同上).

講演

平石界「行動遺伝学は進化適応を語るか」北海道大学 CERSS 若手スピーカーシリーズ(北海道大学) 2011.7.13.

平石界「進化心理学における遺伝と個人差」九州大学人間環境学府 多分野連携プログラム「人間諸科学における『進化心理学』の位置」研究会(九州大学) 2011.7.26.

上田祥行

論文

石田彩夏, 上田祥行, 布井雅人, 吉川左紀子「直接対面はポジティブな表情表出を促進する」電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎研究会(印刷中)

学会発表, ワークショップ等

Ueda, Y., & Yoshikawa, S., "Task-irrelevant Happy Faces Enhances Processing Speed in Visual Search Task," 23th Annual Convention of Association for Psychological Science, Washington DC., USA, 2011.5.28.

上田祥行, 吉川左紀子「課題非関連な情動刺激による視覚探索課題中の眼球運動の変化」日本心理学会第75回大会(日本大学, 東京都) 2011.9.17.

上田祥行, 吉川左紀子 "Happy Face Effect on Attention: Task-irrelevant Happy Faces Facilitate Visual Search Performance," 関西若手実験心理学研究会(京都大学, 京都市) 2011.11.26.

樋口洋子, 小川洋和, 上田祥行, 齋木潤「時空間的な視覚情報に対する潜在学習の検討」日本基礎心理学会第30回大会(慶応義塾大学,

横浜市) 2011.12.4.

Komiya, A., & Ueda, Y., "Cultural adaptation of visual attention: An eye movement study," Cultural psychology pre-conference at the 10th annual meeting of Society for Personality and Social Psychology, San Diego, USA. 2012.1.26.

Higuchi, Y., Ogawa, H., Ueda, Y., & Saiki, J., "Mechanisms of implicit learning of visual event sequences investigated by eye movement," 10th Tsukuba International Conference on Memory, Tokyo, Japan. 2012.3.5.

石田彩夏, 上田祥行, 布井雅人, 吉川左紀子「直接対面はポジティブな表情表出を促進する」電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎研究会(浜松市) 2012.3.5.

上田祥行, 吉川左紀子「課題非関連な笑顔による視覚探索の促進」Technical Report on Attention and Cognition. 2012.3.18.

樋口洋子, 小川洋和, 上田祥行, 齋木潤「時空間的文脈手がかり効果のメカニズム: 眼球運動による検討」Technical Report on Attention and Cognition. 2012.3.19.

山本哲也

論文

Urayama, S., Yamamoto, T., Aso, T., Fukuyama, H., & Le Bihan, D., "Theoretical solution for cross-term suppression in twice-refocusing DW sequence." The 17th Annual Meeting of the Organization on Human Brain Mapping, Centre des Congrès de Québec, Québec, Canada. 2011.6.28.

山本哲也, 山本洋紀, 眞野博彰, 梅田雅宏, 田中忠蔵, 齋木潤「ヒト視運動野の単眼性奥行き視への関与」『電子情報通信学会技術研究報告』2011, NC111 (96), 79-84.

酒井浩二, 山本哲也, 山本嘉一郎「全学必修科目『シチズンシップ』のグループ演習の運営法」『日本教育工学会研究報告集』2011, JSET 11-4, 51-58.

学会発表, ワークショップ等

山本哲也「レチノトピーに基づいた高次視覚野の同定: 大きな受容野サイズにどう立ち向かうのか?」京都大学こころの未来研究センター夏の研究ワークショップ(京都大学, 京都市) 2011.8.20.

山本哲也「ヒト高次視覚野の視野表象と機能」京都大学大学院医学研究科神経科学セミナー(京都大学, 京都市) 2011.9.5.

Yamamoto, T., Yamamoto, H., Miura, K., Sawamoto, N., Fukuyama, H., & Kawano, K., "Intra- and inter-visual area differences in optimal spatial frequency: a human fMRI study." The 34th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society, Pacifico Yokohama, Yokohama. 2011.9.17.

長谷川千紘

論文

長谷川千紘「箱庭療法における物語作り法の検討」『箱庭療法学研究』(印刷中).

翻訳

長谷川千紘「第10章 グループ・プレイセラピー」, 串崎真志監訳, 畑中千紘, 羽野(謝) 玲糸, 野口寿一, 佐々木麻子訳者代表『プレイセラピー 14の基本アプローチ——おさえておくべき理論から臨床の実践まで』, 創元社. 2011年, 195-215頁; Charles E. Schafer, Foundations of play therapy, 2003, John Wiley & Sons, Inc.

学会発表

鍛冶まどか, 梅村高太郎, 谷垣紀子, 長谷川千紘, 河合俊雄, 田中美香,

金山由美, 桑原晴子, 深尾篤嗣「甲状腺疾患患者の心理的特徴(1)——NEO-FFIおよびバウムテストを用いた神経症群との比較から」. 心理臨床学会第30回秋期大会(福岡国際会議場) 2011.9.3.

谷垣紀子, 鍛冶まどか, 梅村高太郎, 長谷川千紘, 河合俊雄, 田中美香, 金山由美, 桑原晴子, 深尾篤嗣「甲状腺疾患患者の心理的特徴(2)——半構造化面接の質的分析による神経症群との比較から」. 心理臨床学会第30回秋期大会(同上).

長岡千賀

論文

長岡千賀, 小森政嗣, 桑原知子, 吉川左紀子, 大山泰宏, 渡部幹, 畑中千紘「心理臨床初回面接の進行——非言語行動と発話の臨床的意味の分析を通じた予備的研究」『社会言語科学』, 2011, 14, (9), 188-197.

Komori, M., & Nagaoka, C., "The Relationship between classroom seating locations and instructor-student entrainment: A video analysis study," Proc. of International Conference on Biometrics and Kansei Engineering (ICBAKE) 2011, 106-111.

勝間田剛, 長岡千賀, 小森政嗣「引き込み現象に基づく講義関心度評価手法」『ヒューマンインターフェース学会論文誌』2011, 13 (3), 275-282.

小森政嗣, 長岡千賀「対面場面における表情の同調的表出に関する形態測定学的検討」『対人社会心理学研究』, 2011, 11, 73-80.

長岡千賀, 佐々木玲仁, 小森政嗣「心理臨床実践における描画に関する予備的検討(2) 描き手の動作を指標として(ヒューマンコミュニケーション基礎)」『電子情報通信学会技術研究報告』, 2011, 111 (190), 11-16.

長岡千賀, 佐々木玲仁, 小森政嗣「心理臨床実践における描画に関する予備的検討(ヒューマン情報処理)」『電子情報通信学会技術研究報告』, 2011, 111 (60), 143-148.

小森政嗣, 長岡千賀「講義における引き込み現象と着座位置の関係に関する予備的検討(ヒューマン情報処理)」『電子情報通信学会技術研究報告』, 2011, 111 (60), 139-142.

長岡千賀「『徒然草』に見るヒューマンエラー対策: 初心者のヒューマンエラーをいかに防ぐか」『ESI-NEWS』, 電子科学研究所, 2011. 12, 29 (6), 211-216.

著書

長岡千賀, 吉川左紀子「会話の「間」 カウンセリング対話における『聴き方』」, 子安増生, 杉本均編『幸福感を紡ぐ人間関係と教育』ナカニシヤ出版, 2012年, 100-116頁.

学会発表, ワークショップ等

長岡千賀, 佐々木玲仁, 小森政嗣「心理臨床実践における描画に関する実証的研究(1)」『日本心理学会第75回大会発表論文集』2011.9.17.

佐々木玲仁, 長岡千賀, 小森政嗣, 金文子, 石丸綾子「心理臨床実践における描画に関する実証的研究(2)」日本心理学会第75回大会発表論文集(同上).

小森政嗣, 長岡千賀「講義を聞いている学生の着座位置——映像解析による検討」日本心理学会第75回大会発表論文集 2011.9.16.

長岡千賀「対話の流れと深まり: 身体同調・相づち・内観の分析」日本心理学会第75回大会ワークショップ「カウンセリング対話を科学する(5)——隣接領域からの批判的検討」2011.9.17.

●10月25日 第9回わく・湧く・ワークショップ「イメージワークとメディテーションのタベ」(於:京都大学稲盛財団記念館3階小会議室1)。

●10月26日 癒し空間プロジェクト+平安京生態智研究会(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。発表:須田郡司(写真家)「石の聖地の比較研究」、鎌田東二「水の聖地・天河大辨財天社の癒し空間と台風12号による被害状況報告」。

●11月17日 癒し空間の総合的研究・平安京生態智/寒川神社研究会「縄文遺跡と延喜式内社~縄文中期最大の住居跡・岡田遺跡と寒川神社、勝坂遺跡と有鹿神社との関係について」(於:稲盛財団記念館大会議室)。講師:小林達雄(國學院大學名誉教授・縄文考古学)、鎌田東二「癒し空間と延喜式内社の研究について」。

●11月23日 ワザとところ——葵祭から読み解く(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。第1部 映画上映『京都歳時記葵祭』、講演:大重潤一郎(映画監督、NPO法人沖縄映像文化研究所理事長)「京の祭り」と沖縄の祭りを比較して。第2部 ミニ講演とパネルディスカッション:嵯峨井建(賀茂御祖神社禰宜・神社祭祀研究)「下鴨神社(賀茂御祖神社)の葵祭と神饌」、村松晃男(賀茂別雷神社権禰宜・NPO法人葵プロジェクト理事・事務局長)「上賀茂神社(賀茂別雷神社)の葵祭と競馬と葵」、やまだようこ(京都大学大学院教育学研究科教授・発達心理学)「京の祭りのワザとところを探る」、司会進行:鎌田東二。主催:京都府/こころの未来研究センター、後援:古典の日推進委員会。

●11月24日 第2回こころ観+ワザ学研究会+負の感情研究会合同研究会「沖縄・久高島のワザとところ~その過去と現在」(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。第1部 映画上映:『久高オデッセイ 第二部 生章』、『水の心』。第2部 講演:大重潤一郎「久高島のワザとところ」、須藤義人(沖縄大学専任教師)「沖縄の民俗文化・祭祀芸能文化におけるワザの伝承について」、坂本清治(久高島留学センター代表)「久高島山村留学と負の感情の乗り越えと成長」。指定討論者:やまだようこ(京都大学教育学研究科教授)。第3部 パネルディスカッション・質疑応答。司会進行:鎌田東二。

●12月8日 第3回「進化と文化とところ」研究会(於:京都大学・吉田南キャンパス・総合人間学部棟1103教室)。話題提供:清水裕士(広島大学大学院総合科学研究科)「友情を支える適応論的メカニズム」。

●12月10日 こころの未来研究センター研究報告会2011「こころを知り未来を考える

~絆(きずな)をつくるこころ~」(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室、ポスター会場:小会議室I・II)。(本誌32~34頁参照)。

●12月15日 第4回「進化と文化とところ」研究会(於:京都大学・吉田南キャンパス・総合人間学部棟1103教室)。話題提供:三船恒裕(神戸大学/日本学術振興会)「進化で解き明かす集団内利他行動」。

●2012年1月7日 “Workshop on Evolution, Culture, and Reasoning”(於:京都大学稲盛財団3F中会議室)。講演者:Laurence Fiddick(Lakehead University)、演題:“A Modular Account of Open and Closed Societies”。

●1月12日・13日「Japan-France Joint Symposium on Neural Dynamics and Plasticity: from Synapse to Network(神経ダイナミクスと可塑性:シナプスから神経回路まで)」(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。Introduction, Shintaro Funahashi, 第1部: Kei Watanabe, “Prefrontal neural correlates of cognitive capacity limitation and its adaptive allocation revealed by a dual-task paradigm.” Tadashi Ogawa (Kyoto University Graduate School of Medicine), “Prefrontal activity during trial-and-error knowledge updating.” Min Whan Jung (Ajou University School of Medicine, South Korea), “Neural activity related to value-based decision making in rodent frontal cortex.” Thomas Boraud (University of Bordeaux, France), “Multimodality decision making process in the cortex-basal ganglia loop.” 第2部: Yoshikazu Isomura (Tamagawa University Brain Science Institute), “Intracortical mechanism of voluntary movements.” Gianluigi Mongillo (Universite de Paris Descartes, France), “Balanced network model for working memory.” Tomoki Fukai (RIKEN Brain Science Institute), “A bistable model of logarithmic STDP underlies working memory.” David Hansel (Universite de Paris Descartes, France), “Some aspects of computation in cortical networks in balanced states.” 第3部: Hiroyuki Ito (Kyoto Sangyo University), “Correlated trial variability in cat visual cortex and the possibility of their stimulus dependences.” Shigeru Shinomoto (Kyoto University Graduate School of Science), “Reading neuronal spike trains.” Carl van Vreeswijk (Universite de Paris Descartes, France), “Some aspects of computation in cortical networks in balanced states.” Jeff Wickens (Okinawa Institute of Science and Technology), “Plasticity and neural dynamics

in the corticostriatal network.” Arthur Leblois (Universite de Paris Descartes, France), “Dopamine modulates information flow through the basal ganglia and regulates behavioral variability.”

●1月18日 第10回わく・湧く・ワークショップ「イメージワークとメディテーションのタベ」(於:京都大学稲盛財団記念館3階小会議室1)。

●1月24日 震災関連第2回研究会「災害時における宗教的ケアと宗教的世直し思想について」(於:京都大学百周年時計台記念館2階会議室III)。発表者:鈴木岩弓(東北大学教授・宗教民俗学)、金子昭(天理大学教授)。コメンテーター:島菌進(東京大学教授)、稲場圭信(大阪大学准教授)、井上ウィマラ(高野山大学准教授)、司会進行:鎌田東二。

●1月27日 「身心変容技法の比較宗教学——心と体とモノをつなぐわざの総合的研究」一般公開シンポジウム(於:京都大学稲盛財団記念館3階大会議室)。第1部 基調講演:内田樹(神戸女学院大学名誉教授・凱風館館長)「身心変容としての武道と芸道~合気道と能を中心に」、第2部 基調講演:町田宗鳳(広島大学大学院総合科学研究科教授)「禅と念仏の身心変容技法」、第3部 指定討論:斎木潤(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)、棚次正和(京都府立医科大学医学研究科教授)。司会:鎌田東二。

●2月29日 第1回「食育」研究会「19世紀末から20世紀初頭における神秘主義と食・農業実践の接近」(於:京都大学稲盛財団記念館3階小会議室1)。企画・司会:大石高典(京都大学アフリカ地域研究資料センター研究員)。話題提供:藤原辰史(東京大学大学院農学生命科学研究科講師・農業史)「近代ドイツの食の思想——シュタイナーとパウハウスを手がかりに」、鎌田東二「大正・昭和初期の食思想と食運動—宮沢賢治と出口王仁三郎(大本)と岡田茂吉(世界救世教)を中心として」。コメント:大石和男(京都大学大学院農学研究科助教・農本思想)、小田雄一(日本学術振興会特別研究員・宗教社会学、フードファディズム研究)。

●3月1日 当センター連携MRI研究施設にfMRI装置搬入。

●3月2~4日 2011年度こころの科学集中レクチャー(於:京都大学稲盛財団記念館3階中会議室)。講師:北山忍(ミシガン大学心理学部教授/文化・認識プログラム所長)、安藤寿康(慶應義塾大学文学部教授)、亀田達也(北海道大学大学院文学研究科教授/社会科学実験研究センター長)。